
とある侍の一方通行

スペディオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある侍の一方通行

【Nコード】

N2555R

【作者名】

スペディオ

【あらすじ】

万事屋で眠っていた坂田銀時は目を覚ますとそこは辺り一辺の暗闇の空間だった。

万事屋の従業員、志村新八と同居人の神楽は一緒にいない。

そんな時に現れたのは何回か目にしている洞爺湖の仙人だった…

プロローグ(前書き)

ぶっちやけキャラぶっ壊れまくりです。

やばいほどに(笑)

プロローグ

「……………んあ？」

眠りから覚めるとそこは何も見えない真つ暗な場所だった。

「はあ？……………なんだってんだオイ。呑んでもいねーから家に帰った記憶だつてあんのによ」

寝起き+なんだかよくわからない状況に不機嫌になりながら体を怠そうに起こす男、坂田銀時は周りをキョロキョロと見渡す。

「なーんか前にも似たような事が結構あるような気がすんだけど……
オイ、神楽あ新八い？……………チツいねーのかよ」

いつも一緒にいる万事屋メンバーの二人はいない。

ますます不機嫌になっていると前方から男の声が聞こえてきた。

その男を銀時は見覚えがある。

「お前は……………洞爺湖の仙人じゃねーか」

「久しいな、坂田銀時」

髪はボサボサで顎の下には物凄い髭を生やし、だらしない格好をした洞爺湖の仙人がたっていた。

「なんだ……………まあたくだらねーことで呼び出したのか？」

呆れたように銀時が聞くと仙人は苦笑してとんでもないことを言っ

た。

「くだらないというか……お主には申し訳ないが、お前には死んでもらった」

「はあ!？」

銀時は仙人のとんでもない宣言に素っ頓狂な声を発した。

「そうだ……だから今回は新八も神楽も側にはいないだろ？」

「オイオイ俺が死んだのは本当だとして……じゃああの二人はどうなるんだよ!？」

二人がいなかった違和感はこれで納得したが、残された二人はどうなるのか心配になって怒鳴り付けた。

「心配するな、そこんところは真撰組に任せておる。心配するのはわかるが、あやつはそんなにヤワじゃないだろ？」

それを聞いた銀時は

「……それもそうだな」

と安心したあとにまた続けた。

「それに何で俺を死なせた？それなりに理由はあるんだろーな？」

紅い目で鋭く睨みつけながら本題にはいった。

その形相はまさしく戦場を駆け抜けた白い夜叉。

「それなんだがお前にはある世界である人物になって救って欲しいのだ」

仙人は若干冷や汗をかきながら一枚の写真を取り出し、それを見せた。

「なんだ……このモヤシみてえな野郎は？」

写真に写っているのは銀時と同じ銀髪に紅い眼、アルビノ系でいかにも悪人面をしている男だった。

「彼の名前は一方通行^{アクセラレータ}。本名は不明、あの世界で言う超能力の通称で通っている」

「へえー……それに超能力って？」

写真の男……一方通行のことは多少はわかったが超能力について聞くが、仙人は首を横に振り

「それはお前が一方通行になってあの世界に行ってからのお楽しみだ。ちなみに彼の能力は”ベクトル変換”だと言って置こうか。どう使うかは君次第だしな」

そう答えた。

「なんだかよくわからねーが……そいつになってその世界を救えばいいんだな？それに救った後はそいつのまままで暮らしてけばいいって

話か」

そう結論づけると仙人も頷く。

「そうだな。それに彼は過去の過ちに苦悩しつつも、正しい道に進もうと努力している。君は一方通行となって過去の過ちをなくすようにやり直してもらおう。

あと、体格ぐらいは君、坂田銀時と同じにできるし、彼の幼少時代からの出来事をリンクすることができる。

あとあちらでの設定もいろいろ変わってあるから……っても原作見えないからわかるまいか」

仙人はいろいろ説明するのを銀時は静かに聞いてから最後の質問をする。

「ちなみにその世界は何て言うんだ？それにあっちでの本名はどうすんだよ」

「とある魔術の禁書目録だ。^{インデックス}そうそう説明でわかっていると思うが、過去の過ちの前の状態からだ。本名は坂田銀時で名乗っても大丈夫だ。では頼んだぞ」

仙人がそう答えたと銀時は目に見えないほどの眩しい光に包まれ、その場の空間から消えた。

プロローグ（後書き）

また新しく始めちゃいましたが、ちよくちよくやっついていきますので、よろしくお願いします。

知識薄いのでのろのろですが。

く過去の夢く（前書き）

カタカナ表記とかはあんまりないかもです

てか他のキャラとか人格壊れすぎかも（笑）

妄想で駄文ですがよろしくお願いします

く過去の夢く

銀時は見たことがないのになぜか見覚えのある場所が頭の中に写しだされる。

それは

とあるマンションの入口前で白髪の少年が周りを囲っている黒づくめの男達をじっと見つめている。男達の手には銃が構えられ、自分に向けられている。

銀時にはわかった。

(こりゃあ……この世界の俺の過去じゃねーか)

そしてこのあとの行動がわかるため苦い顔をする。

これは超能力者(レベル5)の実力を計るための実験。この時から少年はそれに達していた。

学園都市序列第一位として君臨していた。

少年へと発射された鉛玉は能力によって反射された。

次に現れた戦車の砲弾ですら反射。

少年はあらゆる攻撃をもろともせず反射した。

(…くだらねエな)

少年は自分の周りで倒れている男達、戦車の残骸を見て心の中でそ

う眩いた。

この光景を見せられた銀時は

(俺の過去ってどうしてこんなんばつかなんだろうな…)

辛そうな顔をして眩くと次の光景にも顔を崩さず、そのまま自分である少年を見つめた。

その原因はある男が現れたからだ。

周りを気にせずそのまま少年へとまっすぐ歩いてきた。

実験の続きかと思い、警戒していると男は頭を掻いて呆れた顔で言った。

「あーあー、こりゃあ派手にやったもんだなあ……誰がやったと思いきや、またとんでもねえクソガキだなこりゃあ」

金髪の頭、そして顔にはタトゥーがあり、派手な服に白衣を纏った男がいた。

警戒を緩めない少年に笑いながら更に近づく。

「ったくよお、何で俺の周りにはこんなガキしかいねーのかねえ」

さっきも二人拾っちゃったしよお

続けてそう眩くと少年の頭に手を置いた。

「!?!?」

少年は当然の如く驚いた。触れられないまま反射されるのにそんな

らなかった。

「あ？」

男は首を傾げた。

「何で…触れんだよ？」

そういうと男は思いだしたかのように答えた。

「触れるって…ああそうか、お前が第一位の一方通行っやつかあ？お前はたぶん常に反射ONにしてるんだろっが、敵意を見せねーやつだとわかれば無意識にOFFにでも切り替えたんじゃないの？」

「……………」

頭からまだ離れていないその手は少年にとって初めての温もりであり、とても暖かった。

その温もりを感じているとまた男は話しだした。

「それにもう実験なんか本当はしたくねーんだろ？人を平気で傷付けて楽しんでような顔には見えねーな。今に泣きそうな顔じゃねーか」

「うるせエよ…テメエには関係ねーだろ」

「生憎テメーみてーな助けを求めているようなクソガキは放ってほけるなんてできねーよ」

少年は驚いている。初対面の男にどうしてこんなにも見抜かれてしまうのか。

そんな様子を見ていた男は続けた。

「それに能力なしでも強えーって聞いたんだがねえ……そのための木刀かあ？そりゃあ」

男は少年を観察する。

年の割には背は高く、細身ではあるが体型はしっかりしている。

「……………」

少年も何故木刀は知ってる

もちろんこれを見ている銀時も。

(あの野郎……前世のものまで持たせやがって)

この世界を来させたあの仙人を思い出して睨みつける。

「なあ……お前を俺がこんな馬鹿げた実験から抜け出させてやる」

「……………はア？」

男の突然の発言に少年は呆れた声をだした。そして、コイツは馬鹿なのかあ？とでも言いたいのが声にはださず、心に閉まっておいた。

「俺がテメーを救ってやるつつつてんだ。こんな”異常な実験”からテメーが好きなだけ笑ってられるような”幸せな日常”に引つ張りだしてやるよ。それに、テメーが持つてるその木刀…人を傷付けるためじゃねーんだらうが、そいつは」

”^{テメー}自分を守るものでもねー、本当に守りたいものがあるからの木刀なんじゃねーのか”

それを聞いた少年と銀時はまた”あの時”の言葉を思いだしていた。

”あの時”の”あの人”の言葉を。

《敵を斬るためではない、弱き己を斬るために》

《己を守るものではない、己の魂を守るために》

それを思いだした瞬間、少年は答えをだした。

「俺は…大切なものを守れるような…そんなテーマの魂を守れるようなそんな人間になりてエ……！」

それを聞いた銀時はこう思った。

(俺あこんなこと言ってたんだなあ……前じゃ有り得なかったぜ)

この自分はよっぽど俺より強えーな

と自重気味に笑った。

そしてそれを聞いた男は顔に似合わない優しげに笑って

「よし、そんぐれえの覚悟がありゃあ問題ねーな！俺はお前を引きとってやる」

とまた頭を撫でた。

だがまだ少年は不安になっている。

「……研究所は？」

「ああ？そんなもん俺がぶっ潰してやる。必ずな」

男がなんの躊躇もなく言つてのけたのに驚いたが、何故安心した。
この男なら必ずやってしまふのだらうと。

そんな事を思つてると少年は更に自分から

「坂田銀時」

と名乗った。

「あ？」

男は首を傾げたが、すぐに理解した。

「一方通行じゃねー……坂田銀時だ」

まさか自分から名乗ってくれるとは思つていなかった男は笑いながら

「あつそお、俺は木原数多あまただ」

そう名乗った。

そして坂田銀時は男…木原数多についていった。

後日、木原率いるハウンド・ドッグ猟犬部隊は警察「アンチスキル」と手を組み、銀時がいた研究所を潰したのだった。

〜因縁な奴ほど仲がいい〜（前書き）

三話目にこのタイトルにしました。

俺の書くレベルはとにかく馬鹿くさいです（笑）

違いすぎるとは思っけどそこは目をつぶってください。
少しは一方通行口調かな？中身は銀時だけど。

く因縁な奴ほど仲がいいく

ふと目を覚ますとまず見えたのは見慣れた風景。

そこは自分の家だった。

ムクリと自分の身体を起こして頭を掻いた。

「ハア……随分と懐かしい夢みたなア」

そう言いながら銀時は私服に着替え、出かける準備をする。

そしてある事を思い出す。

（あゝひとつ言い忘れたが、別に過去の過ちを無くせと言ったが、お前のいいとおりに生きていいぞ）

などと消える前の仙人が適当な事を言い放ったことのため息を漏らす。

（つつたくまず、過去の過ちってえのがわからねえから行動できねーし……まずは飯食うか）

まず考えるのやめて外に出た。

「どうすつかね……とりあえずファミレスに行くか」

とブツブツと呟きながらほのかに暖かい春の季節を感じると、向こうから見知った人物が歩いてきた。

「ゲッ」

二人同時に気づき苦い顔をする。

「うわア最悪だよ。なアーンで外にまで出て会わなきゃいけないですかア？メルヘンくウーン？」

「オイオイ、久々に会ってそりゃあねーじゃねーか銀時。それに安心しろ。メルヘンなのは自覚してある」

バツタリ会ってしまったのは銀時に次ぐ第二位であるデータマター未元物質かまねていしく垣根帝督。

そうこんな町中で第一位と第二位はで会ってしまった。久々と言うのはつい最近まで共に暮らしていたのだ。

木原ともう一人の超能力者と。

垣根は銀時と同じく拾われた一人。

垣根と銀時ともう一人はあの中から木原が働いている研究所で調整を受けていたが、レベル5のためそれほどいじくられず過ごしていた。

そして木原は研究所にはいなく、アッチコッチ飛び回っているためどこにいるかわからない。

それからは年も年だしそれぞれ別々になっている。

そして気になるもう一人とは

「そっぴやアイツ、麦野とは会ってんのかア？」

そう第四位の原子崩し（メルトダウン）、麦野沈利（むぎのし

ずり)である。

銀時は垣根に聞くが、首を横に振り

「いや、どこに住んでいるかさっぱりだな」と答えた。

「ふーん、まあいや。ってことでじゃーな」

興味なさげに垣根から背を向いて立ち去ろうとするが、服をグイッと引つ張られる。

「うおっ!？何しやがんだよ!？」

長身にも関わらず、よろけてそのまま引きずられていく銀時に笑いながら垣根は言う。

「まあまあ久々会ったんだし、飯でも食おうぜ、ファミレスで」

「何が悲しくてテメーと一緒に飯食わなきゃいけないんですか!？」

と抵抗する銀時だが

「一人で周りの視線感じながら食うよりはいいーだろ」

受当なことを言う垣根に銀時はグッと声を詰まらせる。

「……テメエのおごりな」

「ハイハイ」

そう言った銀時にまた笑って服を離してやった。

だがファミレスで入って席に座っても周りからは注目を浴びていた別の意味で。イケメンが入ってきたので女子達は釘づけだ。

「こりゃあどういう事ですかア？銀さんお前を信じた俺が馬鹿だった」

「落ち着け……こりゃどうみても俺のせいじゃねえ……！お前そのものが目立ちすぎなんだよ」

「チャラ男くんには言われたくないんですけどオ？」

イライラとしている銀時に垣根は苦笑している。

それもそうだ。長身で細身、白い髪に赤い目をした悪人面だが、かなり顔立ちは整っているイケメンだ。

垣根もチャライが同じく長身で茶髪に整った顔立ちをしている。

周りは知っているか知らずか第一位と第二位だ。注目されないわけがない。

「ハア……」

二人はため息をつくが

「とりあえず何か頼むか……」

「そうだな」

腹が減っているため、店員呼んで注文することにした。

「ご注文は決まりましたか？」

「ハンバーグステーキとイチゴパフェとブラックコーヒー」

「噛み合わねーチョコイスだな……まあいいやめんどいから俺も同じで。」

「かしこまりました」

店員が去っていくと、若干引き攣った顔で垣根を見る銀時。

「……なんだよ？」

「うわアないわア……お前何？ホモ属性でもあんの？だったら今後一切近づくなよ」

随分な言われように垣根は眉間に皺を寄せまくる。

「それは断じてねえ……食いてーもんが被っただけだ…それにテメー嫌だったら俺が言ったあとすぐ変えりゃあいい話じゃねーか？お前のほうがそっち系統なんじゃねーの？」

途中からニヤニヤと笑いながら言う垣根にキレ始めた。

「ヘエー万年二位のヘタレメルヘンくんが俺に盾突いていいのかなあ？能力なしでも勝てねエクせに」

銀時も途中からニヤニヤしながら言う垣根はガタンと立ち上がり

「上等じゃねーか第一位イイイイイ……！」

ぶちギレた。背中には白い天使のような羽が現れた。

「戦闘不能にしてやるよオていとくウウウン!？」

銀時も立ち上がり、黒い悪魔のような羽が現れた。

この二人はくだらないことでファミレスをぶち壊すのだろうか。

客や店員たちは奮えていた。逃げられないほどに。

と、そこに

「あーーーーー!!」

二人にとっては懐かしい声が聞こえてきた。振り向くと

「久しぶりだにゃーん!銀時にていとくん!」

茶髪でピンクのワンピースにハイヒールを履いた第四位の麦野沈利がいた。

「「……………は?」」

いつの間にか二人の羽やら殺気が消えて周りはほっとしたが

「ありゃ、最近まで一緒に暮らしてた人を忘れるなんて酷いんじゃない?」

第三者によるドスの効いた低い声といかにもビームだすよみたいな殺気にまた怯えはじめた。

この二人も同じであり

「「そんな忘れるわけがありません麦野様！！」」

即効で土下座で頭を床に着けた二人でした。

「わかればいいんだにゃーん」

また穏やかな声にホツとして席に戻る。

麦野も二人と相席し、メニューを見てると店員が二人の頼んだものがきた。

「ハンバーグステーキにイチゴパフェ、ブラックコーヒーになります」

同じものかよ、と麦野は笑いながら私もそれで頼んだ。

そのころ二人は

（あれ？これおかしくね？俺ら第一位と二位だよ？なんで四位にびくついてなきやいけないんですかアアアア！？）

ビクビクしながら頼んだものを頼ばっていた。

「ねえ、なんで二人同じものなのよ？それにブラックってあきらかに銀時よね？」

「「まあ、なんとなくなりゆきで」」

「「どんななりゆきだ」」

二人息ピッタリなのに思わず突っ込んでしまった麦野。

「いやあ歩いてたらチラツと窓から白髪と茶髪が映ったからもしかしてと思ったら、まさかドンピシャだったとはねえ」

「まあ銀時に会ったと思ったら麦野にも会えたとはねー」

「とんだ偶然だなア」

シミジミと話す三人は少なからずともなんだかんだで再開を喜んでいた。

その間に麦野にも同じものがきていた。

すると

く　と誰かの携帯がなった。

「わりイ、俺だ」

鳴ったの銀時の携帯。

ディスプレイは”〇〇研究所”と書かれていた。

眉間に皺を寄せて

「ちよつと席外すは」

とお手洗いの場所へ向かっていった。

二人は不思議そうにしていた。

「……なんだ？」

『君だけに用意された実験だよ』

研究者の不気味な声に銀時は更に皺を寄せる。

『二週間後に君はその実験に受けてもらうよ』

「その実験てエのは？」

『それは今教えたらおもしろくないだろ。二週間後来てくれたら教えるよ…あとはそれだけだから、ではまた』

クククと不気味な笑いで電話を切ったのに対して銀時は

「嫌な予感しかしねエな…オイ……！まさか過去の過ちってこの実験のことじゃねーよな？」

第一位の頭を持ってもわからず、嫌な予感しかない銀時はとにかく垣根達に戻ることにした。

「よお遅かったじゃねーか、彼女からか？」

それに反応したのは銀時じゃなく麦野で、険しい顔で銀時を睨みつけると、わけもわからない銀時は顔引き攣らせながら

「そんなンじゃねエよ、ちょっとした用事できちまったから先に失礼するぜ」

勘定頼むぜといとくと忘れずに付け足してその場をあとにした。

「チツ……覚えてやがったか……ん？」

「……………」

垣根が苦笑していると麦野が無言になって不機嫌になっているのに気づき、冷や汗を流す。

「あの？麦野さん？どうしたんですか？」

気持ち悪いほど丁寧に話しかける垣根に麦野は

「なんなのよ……！久しぶりに会ったってのにこれだけって！」

ヤバイって思ったが垣根は有ることを思いだしてニヤつく。

「そついえばお前銀時に惚れてんだっけなあ」

その瞬間プシューッと顔を真っ赤にして慌てた。

「な……！んなわけないだろーが！？」

少し口調悪くなってきたが垣根は気にしない。

「昔からそれも聞いてんだよ、あんどきはお前、アイツからよくしてもらってたからベツタリだったもんな」

それを聞いたときさらに赤くなる麦野を垣根はニヤニヤしていた。

昔の銀時、垣根、麦野の話はもう少し先で。

ファミレスをでて歩いていた銀時は

「ダアーツもう辞めだ辞め！二週間行けやいい事だ、ろくな実験だつたら断ればいいじゃねエか！！」

あの木原が今いない研究所は何を企んでいるのかわからない。

そう考えているとふと目に入った路地裏で誰かが絡まれていた。無視しようとしたが生憎見てしまえば無視できない性格のため、チツと舌打ちをしながら路地裏へと向かっていった。

く因縁な奴ほど仲がいいく（後書き）

麦野がとくにおかしいような……

今回は銀時と超電磁砲、御坂美琴の話です。

くしつこい奴に関わったらおしまいく
です。

上条さんもいずれでますがちょっとかわいそうかも

くっつい奴は関わったらおしまいく (前書き)

少し変わってます。

上条さんと美琴はだいぶ前からの知り合い設定です。

くっつい奴は関わったらおしまい」

「ハア……」

茶色の短髪に髪留めをして常盤台のお嬢様学校の制服を着た第三位の超電磁砲^{レールガン}、御坂美琴^{みさかみこと}は近くにある電柱に背中を預けてため息をついた。その理由は

「なあお嬢さん、かわいい顔してんじゃん。俺らと遊ばない？」

「悪いようにしないからさあ」

目の前にいる不良が5、6人ほど自分に言い寄ってくるためである。はっきり言って気持ち悪い。

能力で蹴散らすかと思ったが、生憎路地裏でも人目につく場所なため、どうしもんかと考えていると段々とこちらに誰か一人向かってきていた。真っ白い人物が。

気付いていない不良達に後ろから「オイ」と声が聞こえた瞬間、不良一人が殴り飛ばされた。

「なアーンですかアお前ら？女一人に何人でたかってんだよ。あれか？一人で口説けないヘタレちゃん共ですかア？」

ふざけた口調で言った男：銀時に不良たちはキレた。

「なんだデメー!!!」

「何してんのかわかってんか!？」

「うるせエ!俺アな、ろくにカフェインとパフェは摂れねエは、ふざけた電話はかかってくるはで苛ついてんだよ、クソツタレがアアアア!!!」

殴りかかってきた不良達よりも早い動きで銀時は蹴散らしていった。

美琴はこの銀時の動きを見て無能力者(レベル0)にしては強いとそう思った。

「なめてんじゃねーぞゴラァ!!!」

不良がほとんど倒れたが、最後の一人はナイフを取り出し向かってきたのを見て、反射モードをONに切り変えた。

「ぐああああ!!!」

反射された為、ナイフは地面に落ち、手首がおかしな方向に曲がっていた。

(能力者……!)

ここで美琴は彼が能力者だと知った。

銀時はOFFに切り変えたあと「恨みはねエが、とりあえず倒れとけ」と言い、木刀を振りかざす。

「てっ、テメーは何者なんだよ……」

「なアに、ただの通りすがりの侍よオ」

グシャツと音がして不良は倒れた。そして美琴がいる場所を向く。

「常盤台のお嬢さんがこんなところで何してんだア？さっさと家に帰れよ」

そう言っつて背を向けて立ち去ろうとする。

それが気に入らなかつたのかピキツと音を立てて美琴の眉間を最大限に寄せ、前髪からバチバチと放電させて銀時へ放つた。

「アンタ、待ちなさいよおおおー!!」

「うおっ!?!」

突然の攻撃に反射モードONにはできたが演算が間に合わず美琴にそのまま弾き返した。

「きゃっ!」

美琴も弾き返されたことに驚きながらも、持ち前の運動神経で避けた。

「テメツ何しやがる!?!つーか能力者なのかよ!」

「そうよっ!それにしてもアンタ本当に何者なのよ!?!第三位である私の電撃が聞かないなんて!侍とかつて言つてたし何よそれ!」

銀時は大声で怒鳴つたがあちらも負けないくらいの大声を出して怒鳴つてきた。それを聞いた銀時は冷や汗を流していた。

(やべエ……前世の癖で言っちゃったじゃねエか！これじゃあ頭の痛い子じゃねエかオレエエエ！！！)

「いやア……まアうん、木刀持つちゃってるしい？侍ってノリで言っちゃった感じ？」

「何よそれ……わけわかんないわね」

何とかごまかせた事にホツとしたが彼女が言った第三位というのを思い出した。

「っーかお前あれ？……第三位とか言わなかった？」

「ええそうよ。第三位超電磁砲は私、御坂美琴の事よ」

銀時から見た美琴はどう見ても普通の女子中学生にしか見えないので驚いてしまった。そして何か思いついたのかニヤって怪しく笑い「まア無事ならよかったはクソガキ」

そう言った瞬間、ブチッと美琴の忍耐袋は破けた。

「誰がクソガキだああああ！！！！」

ポケットからコインを取り出して指で弾く。

標的に合わせて赤い閃光を放った。

もの凄い勢いで銀時に向かってきた閃光はぶつかった瞬間カクンと上空へと跳ね上がった。いった。

「え……うそ！？」

超電磁砲ですら弾かれて戸惑いを隠せない。

「あれが超電磁砲ねエ……思ったよりすげエな」

ふざけた口調で言ったが、あんなからかいで本当に見れるとは思わなかったため少し驚いている。

軽い気持ちで美琴に近付いていくが

「あ……いや……」

「……………」

膝から崩れ落ち、美琴が声を出せない程ガクガクと震えていたのに気付いた。

美琴からみれば銀時は白い化け者でしか写っていない。それほど涙を溜めた怯えた目でこちらを見てた。

銀時はその目を知ってる。

「そんなことすりゃあ誰だってそんな目をするはな。慣れたと思ってたんだが、やっぱり辛エは」

反射を切り、目の前まで行き頭をそつと撫でた。

「え……?」

殺されると思っていた美琴はキョトンとしていた。

銀時はしゃがみ込み、視線を合わせて

「からかったつもりだったんだが、泣かしてしまっなんて俺ア馬鹿だな……考えりゃあ解ることだったのなア、まア……わるかったな。殺そうなんてそんな鬼畜じみたこたアしねエよ」

そう言いながら更に優しく撫でた。

さてと……と銀時は立ち上がって「立てるか？」と手を差し出すと美琴は素直に頷いて手を掴み、立ち上がった。

「あんまり寄り道しねエで帰れよってことでじゃあな」

見届けた銀時は手を放し、そう言いながら背を向けて歩きだす。

「ま、待って」

美琴の声に立ち止まるが振り向かない。

「アンタ、名前は？」

そこで首だけ動かして

「坂田銀時」

そう名乗ってまた歩きだした。

美琴は見えなくなるまでその背中を見つめていた。

翌日昼休み、御坂美琴は公園にきていた。

「ちえいさあああああ」

ドゴン、と自販機を蹴飛ばしてすとジュースがガタガタと落ちてきた。

美琴は苛立っていた。昨日あのくらいのことをされたのだから相当な実力者であることはわかっていているのにいくら調べても”坂田銀時”という男のデータはなかった。あのツンツン頭の右手並（レベル0だが）にデタラメな能力、それに能力なしでの身体能力。

「あゝもうわけわかんない奴！なんでそんな奴らに負けなきゃいけないのよお！！」

苛立ちながら叫んだあとジュースをとり、プシュッと開けて飲むとすると声が聞こえてきた。

「犯罪現場見ちゃった私にもおすそ分けしてもらえないかにゃーん？」

美琴には見覚えのない女性がいた。

「アンタ誰よ？」

「私は麦野沈利よ。そのコーヒーちょうだい」

その女性…麦野は美琴が蹴りでだしたブラックコーヒーを指差す。

「うわぁアンタそんなの良く飲めるわね」

美琴は自身の持っているサイダーを飲む。

「まあ最初はねえヤバかったけどもう慣れたは」

(アイツがよく飲んでたしね……今もか)

そんなことを思っでぐいっとな平気に飲んでいる麦野に美琴がじっと見てきた。

「……………飲む？」

「……………一口だけ」

そう言っとなハイっとな渡されてちょびりと飲む。

「ぐっ……………苦っ……………よく飲めるわねそんなの」

「お子様にはまだ早いか(人の事言えなかつたけど)

「うっ……………」

うえっとな吐きそつな美琴に麦野は苦笑する。

「ハア……………」

「どうしたの？そんな深いため息ついて？」

いきなりため息をついた美琴に麦野は問う。

「ちよつとね……………」

「お姉さん聞くわよ？相談に乗ってあげる」

お姉さんって…………と美琴は苦笑するが、寮に戻ってもあの変態な後輩が「誰ですの！？そのお方は…………まさかまたあの類人猿！？おのれ…………黒子のお姉様に……………」なんて言っただけだと思いい、二人でベンチに腰掛け、麦野に昨日のこと話すことにした。

話を聞いた麦野はグシャツとまだ入っていた缶コーヒーを手で潰した。

手にダラダラとこぼれているが気にしない。

（あんの野郎！用事あるとか言っただけなんだあ！？女泣かせた上に？最後はさりげないフラグ立つかあ！？）

凄まじい顔で睨んでいる麦野に顔を引き攣らせる美琴。

「あ…あの？」

「沈利でいいわ。どうした美琴？」

（それにしてもこの子が私の上に立ってるなんてねー…信じ難いわ）
話の中で彼女が第三位の超電磁砲であることがわかったのでとりあえず名前で呼び合わせようとする。

（でも待てっ！まだこの子はまだアイツの名前を出してない！容姿と能力が似ているだけかもだし！）

そして無理矢理そう思いながら平常心を保つ。

「うん…最後に名前聞いたら答えてくれた」

「な、なんて名前…？」

ゴクリと唾を飲み込んで答えを待った。

「坂田銀時って言ってたけど…」

（ブ・チ・コ・ロ・シ確定だああああ！銀時イイイイイ！！！！）

ガダンと思わずベンチから立ち上がってしまい、叫び衝動を抑えた。

ビクツと美琴は反応したが麦野の反応を怪しく感じ

「沈利…坂田銀時の事を知ってるの？」

とジーツと見つめてくると「うっ」「と麦野は戸惑ったが
「ハア……知ってるわよ銀時のことは昔から」

逃げられないだろうと観念した。

くじつに奴は関わったらおしまい〜(後書き)

やっぱりあんましつこさが…

↳ 最初の出会いなんてこんなもんだよね (前書き)

銀時、垣根、麦野、木原と一緒に暮らしてたころの話です。

後半、少しシリアスかな？

「最初の出会いなんてこんなもんだよね」

「……ねえ」

「は？」

美琴に声をかけられ、麦野は反応した。

「沈利は坂田銀時とどういう関係なの？」

先程とは違う思い、麦野はこう答えた。

「同じ拾われた仲間な」

「え？」と気の弱い声が聞こえたが気にはかけずにそのまま続ける。

「私：実は第四位の原子崩しなの。そして銀時は第一位”一方通行”なんだよ」

突然の麦野のカミングアウトに美琴は身体が動けなかった。まさか昨日会った人物が第一位だったとは思わなかっただろう。それに目の前の人物が原子崩しだとも。麦野はそのまま続けた。

「私と銀時：それに第二位の垣根もある男に拾われたんだ。その前は研究所で散々いじくられてた、ただの造られたモルモット」

「まあ全部あの人潰してくれたんだけどさ」

「そ、その人は…？」何とか声をだした美琴にフツと笑い

「生きてる。まあどこにいるかなんて知らないけど」

そう答えた。

「そついや銀時のことが知りたいのよね？」

本題に入ると美琴はコクリと頷いた。

「いいわ教えてあげる。初めてアイツと会ったのは、あの人の家だった」

〈木原の家〉

「おーいクソガキども今帰ったぜ。おとしくしてたか？」

この家の主である木原数多はおとなしくしているであろう同居二人に自分の帰宅を告げる。

すると奥からその二人が玄関に向かってきた。

「おかえりなさい」

一人は年相応にかわいらしく笑う少女… 麦野。

「テメエ遅っせーんだよ。早く飯作れ」もう一人は不機嫌そうに言う少年… 垣根。

「まったく帰ってきてそりゃあねーだろ垣根くんよお、少しは麦野みてえに笑って迎えられるねーのかよ？俺はそんな風に育てた覚えはねーぞ」

「ぶっ殺されてえようだな。なんでお前みたいな奴に笑って迎えるわけねーだろうが、それに育ててもらった覚えもねーな」

「あーあー、こんな人間になっしてくれない事を俺は麦野に期待するしかねーな」

垣根の素直でない暴言に笑いながら流して麦野の頭を撫でる。

そこで二人は木原の後ろにいる白い少年… 銀時の存在に気づいた。

「んで、そいつは一体誰なんだ？」

「ん？ ああ、こいつはテメーらと同じで”拾って”きた第一位の坂田銀時くん。仲良くしてやれよ？」

「……………」

「……………」

垣根が問うと木原は銀時を二人の前につきだしてあっけらかんとしながら紹介した。

その三人の反応は無言。

それを破ったのは麦野だった。

「私は麦野沈利ね。よろしくね銀時」

そう言っつて右手を差し出すと銀時は小さな声で「よろしく」と握り返した。

「チツ俺は垣根帝督ってんだ……………ホラよ」

舌打ちしながらもぶつきらぼつに右手を差し出すと銀時も同じように握り帰すが、バキバキと骨でも折れたような音が聞こえてきた。

「痛つてえ！！オイお前何してやがる！？」

「あつわりイ、なんか気にいらねエからついつい反射しちまったよ、わりイなていとくん」

「ていとくん、じゃねーよ！！帝督だつて言っただろーが！！てい・と・く！！OK!？」

不純な理由で反射されて拳げ句の果て、「ていとくん」呼ばわれさ

れた垣根は叫んだ。

「わかったわかった、ていとくん」

「そうよ、落ち着きなよていとくん」

「たく玄関んとここで騒ぐなっつーの。近所迷惑だろうがていとくんよお」

だが、上から銀時、麦野、木原の順に笑いながら「ていとくん」で定着させていた。

ブチッと垣根の忍耐袋が切れた。

「ふざけんなお前ら！！ああ切れちまったよ。第一位！！テメーはぶっ殺す！！！！！！」

白い羽を羽ばたかせる。

「上等だよていとくウウウウン！？愉快に素敵にスクラップにしてやんよ、クソメルヘンがア！！！！！！」

と銀時は黒い羽を羽ばたかせるが、

「テメーら何、人様の家で暴れんじゃねえ！！！！！！ここ全体壊す気かあああ！？」

ゴチンつと二人の頭にゲンコツを落とした。何故二人に攻撃できたかはまあそこはあれで（笑）

「「っ！！！！」」

かなり痛むのか頭を押さえて涙目になる。

「ったく少しは…仲良くしろってんだよクソガキども」

「「はあ!?!」」

木原に反抗するが

「あア!?!」

「「すみませんでしたああ!?!」」

ドスの効いた声で拳を握りしめていた木原を見て即座に謝った。

それを見ていた麦野はクスクスと笑っている。

それにしても思う。

(超能力三人に研究者一人と一緒に暮らしてるなんて誰も想像つかわないわ)

自分達を拾ってくれた木原をみる。外見はあんなんだ中身は面倒見がよく、時には厳しく、時には優しくと親見たいな事を自分達にしてくれる。それだけで幸せに思えた。

造られた存在であってこういったことはなかったから。

麦野は考えてからまた三人の方向いて少女らしい笑顔で見つめた。

「あゝテメエらちょっと買い物行ってこい。冷蔵庫んなか空なつち
まってるあ」

「「「はあ?」「」」

少ししていきなり木原が買い物を押し付けたことに三人は皺を寄せた。

「オイ、何で子供に行かせんだよ、どう考えてもおかしいだろうが」

垣根の正論に二人も頷く。

「ああ？金はやるよ。それに俺は今からテメーらの資料まとめなきやいけねーんだよ。それとも終わるまで待つか？いつなるか知らねーがな」

木原によつて正論は打ち消され、グツと息詰まった。

「ああそれに俺にそんな常識は通用しねえ」

ニヤリと木原はそんな台詞をはいた。

それに反応したのはやはり垣根だった。

「あれ？それって俺の台詞じゃね？まじでぶち殺しちゃ駄目？あの駄目人間」

ブチブチとキレかけている垣根に銀時は笑う。それを見ていた麦野は痺れを切らす。

「あーもうどうでもいいからさあ、腹減ってんだけど？さっさと行こうよ、ていとくんに乗って」

「ああ、そうだなア頼むぜエ？メルヘンていとくん」

「オイ、お前も飛べんだろうが。却下」

「チツ」

仕方ねエな…と渋々承諾した。

決まればあとは木原からお金を受け取り、外に出た。行き先はこの近くのスーパー。

「よし麦野、乗れ」

垣根は羽を広げて乗せる態勢になるが

「メルヘン飽きたから、銀時んところ乗る」

「」

「……は？」

麦野に拒否られピシリと固まった垣根と、意外な展開にキョトンとなった銀時。

だかすぐに再起動した垣根が「畜生オオオオオっ」と叫びながら先に飛んでってしまった。

「っつてことでよろしく」

「ハア…わかったよ。んじゃ乗れや」

姿勢を下ろして麦野が乗ったのを確認してからバサツと広げる。

「……じゃあ行くぜ」

麦野が頷いたのを見て一気に飛び上がった。

「おい、見たか今の？」

「ああ、今は一方通行と原子崩しだな」

「ターゲットはどうすんだ」

「一方通行は厄介にもほどがある……だとすれば」

「原子崩しか」

ニヤツと白衣をきた男達は笑う。

闇は静かに動いた。

く最初の出会いなんてこんなもんだよね (後書き)

次で終わると思います。

く親も最強なら、子も最強くです。

く親が最強なら、子も最強く（前書き）

最初誰？この人達？って思うかもしれませんが……そこは目をつぶ
ってください（笑）

「親が最強なら、子も最強」

銀時は初めて人を乗せた。

前まではこをなこと有り得ないのに、今は麦野を乗せて飛んでいる。

「飛んでるのってやっぱり気持ちいいな」

「いや飛ンでんの、俺だけどな」

「いいじゃない気分だけ味わっても」

「まアいいけど」

「ねえ」

「んあ？」

「ちょっと一回りしてから行こうよ？」

「はア？」

「いいじゃん、そんな時間かからないでしょ」

「垣根ンときもしてもらったンだろオ？」

「うん、なんかこの風景だけは見飽きないんだよなあ」

「あっそオですかイ」

「へえ」

「なんだよ？」

「意外にも言うこと聞いてくれてんじゃない？」

「……わりイかよ」

「誰もそんなこと言ってないじゃない……ありがとね」

「……フン」

「ふふっ」

「今度はなんだ？」

「乗り心地いいなって」

「変わらねエだろ」

「垣根よりなんか暖かい」

「なんだよそりゃあ……」

二人してこんな感じでやりとりしてて銀時は初めてな気分になっていた。

（まさかあの実験から解放されて誰かとこうして戯れるなんて、考えもしなかったな）

すべては木原が導いてくれた結果だと思い、心の中で感謝した。

少しの間の沈黙。だがそれも破ったのも麦野だった。その方法は

「よいしょっ」と

「!?!何してやがる!?!」

銀時の背中に身体を預け、腹に手を回すという方法だった。

「何って抱き着いてるんじゃないか。垣根にもやってるし」

「そオ言う問題じゃねエよ!?!」

平然と言う麦野に叫びだす銀時。

歳の割には少し大きな胸が背中に当たっているためかなり動揺している。麦野はその反応を楽しむ。

「まさか第一位と二位がそんなに動揺するなんてねー、面白いもん見れたわー」

「いいから、早く起きてその手を退かせやがれっ!?!」

ニヤニヤしながら「ハイハイ」と大人しく座り直して手をもとに戻した。

ようやくホツとした所で下から勢いよく砲弾が飛んできた。

「なっ!?!」

「きゃっ！え！？何！？」

翼に集中して能力を使用していたため、間一髪で避けた。

「オイ！麦野っ！大丈夫かア！？」

「大丈夫よっ！」

自分の上にいる麦野の安否の確認して返事を聞くと先程、砲弾がきた場所をみる。

そんなに高くは飛んでないために下にいるものは確認できた。

そこは目的地からは少し離れた場所で数人の研究者、戦車、乗ってきたであろう数台の車があるのが見えた。

「しっかり掴んでろ！」

それに反応した麦野は先程のようにしがみつく。それを確認したあと銀時はビュンと瞬時に降下してそのまま勢いよく着地した。

「やあ、さすがは一方通行って言ったところかな」

ニヤニヤとしていた研究者は話し掛けると銀時は睨みつける。

「テメエら何が目的だ？」

「私ら研究者はどれも科学が好かなくてねえ、核爆弾の開発しているんだ。だけど、どれも強力な原子力が必要でね、その原子

崩しを頂戴したい訳さ」

「「!?!?」」

研究者の言葉に二人は驚いた。この科学の町で生きながらも科学を嫌いな者達がいるとは。そして一番銀時の癩に触ったものは、隣にいる原子崩しである麦野沈利が必要としていることである。

「んなことできると思ってたのか？それにテメエらが敵に回してるのが誰かわからねエわけじゃねエよなア？」

「ククク、正気じゃないことだったのはわかっているさ第一位。だが、我々はそんなに馬鹿ではない」

銀時の言葉にも関わらずニヤつきながら答えると銃口をこちらに向けた。

銀時と麦野はそれを見て呆れた。そんなもの効くわけがない、やっぱり馬鹿かと思いつつながらそれを見つめる。それを悟った研究者は

「まあ、受けてみればわかるさ」

パン

とさら口元を緩ませながら銀時に放った。

銀時の腹あたりに向かった弾を反射するために切り替えたが

「!?!?ぐあつ!?!?」

「なっ！？銀時！？」

反射できずにそのまま腹を貫いた。
それに麦野は信じられない顔をして叫んだ。

「て、テメエ……何だよそりゃあ」

「ハハハハハ……！どうやら成功したようだな！邪魔な君達を少しでも対抗できるように開発した特殊な弾だよ。いやいや実験一号に君がなってくれたおかげで効果あるとハッキリとわかったよ」

打たれた場所を押さえながらも倒れまいと耐えながらも立ち続ける銀時は顔を歪ませながら高笑いをしている研究者を睨みつける。

ブチツと何か切れた音が聞こえ、そちらに向くと、麦野が爆発寸前だった。

「ふざけたことしてんじゃねーぞゴリアー！！ブチ殺しカ・ク・テ・イだよお前からあああああっ！！！！！！」

全力をだしてまで電子を集め、放とうとする麦野。だがそれを見ていた研究者達の顔は一つも崩さない。

ポケットから何か無線機なものを取り出し、そこについてあるボタンを押した。

その同時にキィィンと超音波のような音が流れた。

「！？」

「グツ……！！」

それと同時に麦野の周りに集まった電子は消え、何とも言えない痛みを抱えた。銀時も同じだ。それを見た研究者は続けた。

「これはまだ未完成なんだがね、どうやら至近距離では効果ありのようだな」

その化け物を連れていけ

そう言い、他の研究者達は麦野を連れてこさせようとしたその瞬間、銀時の何が壊れた。

何とか風のベクトルを操り、研究者達を吹っ飛ばした。

先程から話していたリーダー格の研究者は目を見開いた。

「テメエ……今こいつに何て言った？」

銀時は先程とは違つとてつもない殺気を放つ。

「ぎ、ん、と、き……？」

まだ苦しいのか、息を荒くしながらも銀時を呼ぶ。

銀時は反応しない。ただ目の前にいる研究者を見ていた。

「ど、どうせお前らは所詮造られた化け物なんだ、そんな奴に化け物扱いして何が悪い！？」

殺気が尋常がないのか、余裕はなく冷や汗を流しながら言った。

「確かに俺は”化け物”だ。それは認めてやる……だが、こいつは違つたろオが！！確かに超能力だア、第四位だア言われてるがよオ。こいつだつて”一人の人間”なんだよ！！俺みてエにうす汚れてねエンだよ！！それをテメエら見てエなクズ共に化け物扱いさせるわけにや、いかねんだよオ a m j g t p w b ……！！」

いつもよりも格段と大きくなつた翼を広げた銀時に研究者どころか麦野まで驚いた。

その黒い刺々しい翼はまさしく悪魔で化け物そのもの。研究者達は怯えはじめたが、血が迷い銃口を銀時に向ける。

「く、来るなああああ！！この化け物がああああ！！！！」

銀時はケタケタと笑いながら近づいていく。

先程ダメージを与えた特殊な弾を放つよりも早くその翼は研究者達を襲つた。

ドゴオオオオオン

たつた一瞬。それだけでその場所にいた研究者達は跡形もなく消し飛んだ。

残つたのは爆発を起こした戦車と研究者達の車の残骸。幸いに一人いかなかったのが良かった。

しばらくして翼も消え、腹から血を流しながら麦野がいるだろう場所を見る。

その先には自分に目を見開いて少し怯えてる麦野がいた。

それを見て銀時は

「これが化け物だ、クソツタレが」

そう言って倒れ込み、意識を手放した。

く親が最強なら、子も最強く（後書き）

一話で終わらそうになかったんでその二に続きます。

「親が最強なら、子も最強？」（前書き）

その？です。

あと羽 翼に途中から変えました。そのほうが適切かと思ひまして。

「親が最強なら、子も最強？」

少し遡ること垣根帝督は辺りが暗くなってきたため、スーパーの中に先に入って待っていたがいつまで待ってもこない二人にイラ立っていた。

（麦野のあの寄り道癖は乗せていたからわかってるつもりだが、いくらなんでも遅エーぞ！！）

あの第一位がいるのでそんなに心配はしていない（むしろどっちも超能力者であるため、心配は皆無だが）。

だがいくらなんでも遅すぎる。それにもう一つイライラする原因。

（木原の野郎、ガキが帰ってこないから心配とかそんな考えがねーのかよ）

木原が動いてくれないことだ。

（まあ今思えばあんな顔で心配されたも、お笑いもんだけどな）

それを想像するだけでも自然と笑ってしまう。

「ったく、しゃーねーな。俺が適当に買っていくか。いや、麦野はシヤケ弁だな、うん。じゃないと殺される」

ここで違うものを買ってしまつたらとこころ構わずビームをぶつ放してくるだろう、順位関係なく。

（本当はアイツが一位なんじゃね？）

そう思いながら冷や汗を流して苦笑する。

カゴにシャケ弁やら何やら入れてると外からドゴオオオオンと大きな音がしてスーパーの中は地響きがなり、大勢の客は突然のことで騒いでいる。

「んだあ？こんなときに暴れてるなんて、よっぽどの暇人みてーだな……それにしても」

嫌な予感がすんのは気のせいか？

冷静にいったつもりだったが、段々とモヤモヤした気分になり、舌打ちをした。

「ここからじゃそんな離れてなさそうだな。行ってみるか」

夕飯の買い出しなどどうでもよくなり、スーパーからでた後、普通に歩きだした。

そしてその事件現場の近くになるに連れ、野次馬が群れてきている。イライラとしながら更に歩いていくと、そこにはアンチスキルが忙しなく現場検証を行い、救急車へと救命隊がタンカーに横たわる少年を運び込もうとしている。垣根は目を思いつ切り開いた。

なぜなら付きっ切りで泣きながら見守る少女と、目を固く閉じ、血を流して横たわる少年を知っている。

「なんで………なんでテメエがそんなことなつてんだあああああ！
?!?!第一位イイイイイ!!!!!!」

信じられない光景に垣根は思いつ切り叫んだ。

麦野は震えながらも銀時が一言呟いて倒れる瞬間を見た。

「……………え？」

そこで震えは止まり、完全に固まった。

「銀時……………？」

銀時の側に行き、弱々しい声で呼んだ。そのまま俯せで倒れた銀時は反応しない。

周りには血が染み込みだしている。現時点では血流操作で人を殺せても自分の負った傷は治せない。今まで反射してきたため、そんな事が一度もなかったからだ。

だがそんな事は麦野は知らない。

「あ……………あああああ……………っ！！！！！！！！」

”早く病院に連れていかないと死ぬ”
そんな思いで頭がパンクし始めた。

自分を人間と認めてくれた少年。”化け物”と承して自分を庇ってくれた少年を見殺しにするわけにはいかないのに涙でくしゃくしゃになってその場から動けない。

偶然、騒ぎに駆け付けた野次馬がアンチスキルやら救急車に連絡してくれた。

少し経つてから救急車が現れ、救命隊がでてきたのを見た途端、麦野は走りだした。

「お願いします！銀時を助けてください！！頼むから助けてよっ……！！！」

必死になって救命隊員にしがみつく。

「大丈夫！必ず彼は助かる……いい医者を知ってるからね」

隊員は麦野を宥めながら頭を撫でて他の隊員に指示をつける。
受けた隊員達は呼吸器具を銀時につけてタンカーに乗せて運ぶ。

麦野は泣きながらもそれに着いていくと、聞き覚えのある声、怒声の含んだ叫び声に振り向くと、

「かつ……垣根っ……！！」

信じられない顔でこちらを見ていた垣根が野次馬の中にいた。

垣根は麦野が気づいたと同時に走った。

「どうなればこんなことになんだよ……！」

「か、き、ね……」

この光景に戸惑いを隠せないでいると弱々しい声が聞こえる。

「麦野……」

今は詮索しないほうがいいだろうと考え、再び周りの状況を見る。そこにはガラクタと化した車や戦車の残骸。

（こんなことするってこたあ、アイツらを知っていたから最初っから狙ってたわけか……そうなるすりゃあ狙ってきた奴らは）

「クソツタレな研究者共の仕業か」

頭の中で整理し、結論を口に出すと、聞こえていた麦野は静かに頷いた。

そして垣根はあるものを見た。野次馬に紛れて怪しい行動をとりそそくさと立ち去ろうとしているグループがいた。

それを見た垣根はニヤリと少年らしからぬ程に口を歪ませた。

「麦野、お前はアイツと一緒にいる」

「……うん」

垣根の言葉に何か言おうとした麦野だが銀時が心配なため黙って頷き、救急車のもとへ向かう。

麦野が乗り込んだあと救急車がそのまま行くのを見つめて

「ったく、ゴミクズ共が余計な事しやがって……そんなに死にてえなら望みどおり俺が叶えてやるぜ？」

不気味に笑いながら、先程のグループが逃げていった方向にゆっくりと歩いていった。

そのころの木原は、もくもくとレポートをまとめていたが、三人がまだ帰ってこないのに気にし始めた。時計を見れば短い針は7を指している。

「オイオイ、もう帰ってきてもいい頃なのによ、あのクソガキ共は何してんだよ」

怠そつに文句を言っているが、内心は心配している。

(まあそのうち飛んでくるかもしれないから、もう少し待つか)

さすがそろそろくるだろうと思い、テレビをつける。すると、見覚えのある場所が写った。

画面にはアナウンサーも現れて報道している。

『緊急速報ですっ！先程、この場所で大きな爆発が起きた模様です！現在、警察も捜査してますが、今現在、原因ははっきりとわかっておりません』

そこに写ってるのは無惨になった車、戦車だったものの残骸に溢れていた。

「こんな目立ったところでドンパチとは、随分目立ちたがりなんだな
そいつらは」

木原は人事のように吐き捨てながらテレビを見て次のアナウンサーの情報を待つ。

『亡くなった方はおりませんが、一人の少年が意識不明の重体、もう一人の少女は怪我はない模様で二人とも救急車に運ばれました』
少年少女と聞き少し眉間に皺を寄せる。

『その白髪の少年は』

プツリとそこでテレビを消し、勢いよく外に飛び出した。

そして携帯を取り出してボ番号を押して電話をかける。

「俺だ……この事件を起こした奴らを猟犬部隊使って調べあげろ。
あとで連絡寄越せ。わかったな？」

その相手の返事を聞いたあとプツッと切り

「ハッ、やってくれるねえ！あームカつくは、殺したいほどムカつくは。やっぱ潰すには徹底的にしねーとなぁ？」

そう言った木原の顔はまさしく鬼の形相だった。

「失敗したか……」

路地裏にある隠れ家に入ったのは先程、野次馬に紛れていた研究者達。

彼らの周りには開発してあるだろう核爆弾、他にも現在開発している様々な武器など置かれている。

「原子崩しの隣に一方通行がいたのが誤算だったか……ならば狙うは超電磁砲しかあるまい」

「さっそく行動しますか？」

「ああ、速やかに頼む」

司令塔である男が言うと一人の研究者が尋ねてくると男は頷く。

それを見た研究者達は動き出そうとしたが、いきなり開発しているものに原因不明の爆発が起きた。

「な！？なんだ！？」

「わかりません！！何がどうしてか……」

司令塔ともに戸惑い始めた研究者達に声がかけられた。そこには

「よお、クソヤロー共」

扉側にもたれ掛かり、不気味に笑っている少年……垣根帝督がいた。

「お、お前、もしかして未元物質か！？」

司令塔の男は驚愕した。そんな反応を楽しむかのように「正解」と答えた。そしてもう不気味な笑いはなく、無表情で言った。

「それにしてもまあ聞いてたんだがよ、原子崩しをこんなのに利用しようなんてふざけてんのか？」

垣根の威圧に押されながらも「第二位のガキに関係ないことだ」と冷静さを取り戻しそう答えた。

「普通ならあんな第四位の三下がどうなるうが知ったこっちゃあいねーんだよ、むしろ俺がぶち殺してえとこだ。だがなあ、気にいらねー野郎から拾われた俺はアイツとそれにテメエらがやりやがった第一位はなあその野郎のおかげで出会った大切な仲間なんだよ。そんな仲間を傷付けたテメーらを許すわけにはいかねーんだよ」

出会って間もなかったが垣根はすでに三人を仲間だと家族だとそう思っていた。

時に銀時と皮肉をぶつけ合い、木原に怒られ、麦野に笑われる。

そんな生活が彼にとって既に心地好いものになっていた。

それを研究者に壊されるなど彼は許せなかった。

目の前の男に鋭く睨みつけ

「テメーら全員、俺がまとめてぶち殺してやらあ」

そう告げた。

「こ、殺せエエエエ!!!」

バアンと研究者達から放たれた無数の銃弾は垣根にスローモーシヨンのように向かっていった。

（これがアイツにダメージを与えた弾か？馬鹿みてえに撃ちやがって……だが）

あれが銀時に当たった普通の弾ではないと判断し、呆れた顔で見っていた。

「たしかに自分らより格段と上の相手に団体でせめてくるまではい行動だ。だが、そんな鉛弾で俺を殺せると思ってんじゃねーぞ、三下が」

白い翼を生やし、それで向かってきた弾を突風で弾き返した。

その返ってきた弾は研究達、司令塔の男に難無くあたった。垣根の演算で急所を外されていたが最早、致命傷。

「やっぱり簡単に死なれちゃあ、困るからなあ」

「なあ？　どういう死に方がいい？」

外見、天使のような少年に息絶えながらも全員怯えた。

「し、死にたくねえ！　すまん！　わかるかった！　このとおりだ……！　もうお前らには手は出さない！　頼む！」

司令塔の男がようやく声だして少年に懇願する。

「あ？　跡形もなく木っ端みじんになりたい？　オーケエオーケエ、んじゃあ望み通りに答えてやるよ」

だが、そんなものは聞かずに翼を大きく広げ

スドオオオオン

全員に制裁を下した。

その無惨な光景を眺めてから扉から出ると、外にはあそこに居なかった研究者達が逃げているのを確認した。

「チツ……めんどくせえな」

後を追って始末しようとしたが、研究者達の前に一台のステップワゴンが止まった。

「助けてくれ！」

研究者達は叫んだが、出て来たの完全武装した数人の者達。手には機関銃。

そのまま構え、研究者達に向けて乱射した。

研究者達は悲鳴もあげれずに呆気なく絶命した。

それから中からまた一人出てくる。

「まったく駆け付けたってえのに暴れられねーってのはどう言う事だよ、ていとくんよお」

その男は垣根の良く知る人物、木原数多だった。

「だからていとくんてのは辞めろてんだろっが！」

垣根は呼び名が変わってないことに叫んだ。

「うるせーな。こっちはなお前に先に潰されて苛立ってんだよ」

煩しそうに頭を掻き、何故か持ってたガソリンを死体にはらまいて火を付けた。

「えげつないもん見せんな」

「ハン、一つぶつ潰したガキが何言ってるんだか。オラッ、オメーも乗れ。銀時んとこ行くぞ」

シラッと言いかけた垣根に木原は呆れながら車に乗せて病院に向かった。

〜親が最強なら、子も最強?〜 (後書き)

木原クウウンまったく活躍してねえ!!

まあ木原くんだしな(笑)
次で四人の話は最後です。

↳素直になろうとしてもなれないのが人間↳（前書き）

これで過去の四人は終了です。

く素直になろうとしてもなれないのが人間く

時間はもう9時を回っていたが麦野はまだ起きていた。

救急車に乗り、病院についたあとは待合室で銀時の手術が終わるのを待っている。先程より落ち着いている。

(銀時……)

麦野は先程のことが頭から離れない。

お前は化け物じゃない一人の人間だ、自分みたいに汚れていない。

そのようなことを言われたのは本当に始めてであり、中々頭から銀時が離れていかなかった。

(クソっ!!何だよこれ!?何であんなこと言われてからアイツがずっと浮かんできやがる!)

この気持ちがあんなのかわからなかった。ただモヤモヤし、イライラし、嬉しさもあった。

(ありがとうなんてガラじゃねーつつうの!でもまあ……あ、ありがっ!やっぱ無理)

うーんと唸りながら悩みまくっているとランプが消えて主治医がこちらに歩いてきた。

麦野はそれに気付くとそれに目を向ける。

そこには蛙顔をして穏やかな表情でこちらを見ていた。

(ブフツ！？リアルすぎんだろおお！？)

あまりにも蛙に似過ぎたのか、吹き出すのを堪えながら聞いた。

「ぎ、銀時は？」

ブルブルと震えながらも何とか言って主治医を見る。

主治医は不思議な顔をしながら答える。

「彼ならもう大丈夫だ。腹の弾は当然の事。あと毒も盛られてたみたいだけど、全部取り除いたよ。これから病室に運びこむ。彼は今眠っているけど、傍にいても何ら問題ない」

そう言うと、そのまま向こう側へと歩いていった。

それに対して麦野はホッとして近くの椅子に腰を下ろした

そして看護婦がタンカーに乗せた銀時を運んできたのを見て、一緒に着いていく。

個室となっている空き部屋に入り、銀時をベットに寝かせて看護婦は「何かあったらナースコール押してね」と麦野に伝えて部屋を後にした。

麦野は内心、緊張していた。個室で寝ている銀時と二人っきりののだ。

(あああああ！どうすんのコレエ！？何？私はどうすればいいんだあ！？)

かなり同様を抑え切れない麦野はまたもやパンク寸前である。

先程とは展開が違うが。

なんとか耐えつつ、銀時の寝顔を見る。

「……かわいい」

素直にそう思った。そしてその白い髪を優しくなでたり、頬を抓ってみたりと遊びだした。

「んー……」

くすぐったいのか寝返りだす銀時。

「何これ。サラサラだし、プニプニだしやばいんですけど」

などと一人でテンション上げて触ったり抓ったりしてみる。

更には

(寝顔もかわいいんですけどおおおお！！！)

始めて銀時の寝顔を見て段々変態気味になってきているが気にしないでそのまま続けるが、眠くなってきたのか、ふぁーっと大きな欠伸をかました。

時計を見て、もうすでに夜中の12時を回っていたのに麦野は驚く。

「あゝダメだ眠い……もういいや。寝よう」

もぞもぞとベットに行つて毛布に入り目を閉じた。眠すぎて先程弄んでた人物がいるのを忘れて。

「なあ……どうすんだよこれ……」

「知るか」

だいぶ前から既に病院に着いていた木原と垣根はドアの隙間から覗いていた。

そして静かにドアを閉めた。

「アイツってあんなんなるの？」

「知らねーよ。初めて見た」

垣根の問いに木原は首を横に振つてそう答えた。

そして思うことは一つ。

（（あんなハイテンションな麦野に恐くて近寄れねー））
あきらかに興奮しているのが顔や行動であんなにわかるんだと改めて実感した。

「まあ考えても仕方ねー……入るぞ」

「ちよっ！！待てって！！」

面倒になった木原が中に入るのを抑えようとしたがもう遅かった。

ガラスと開いた時に聞いたのは、二人の静かな寝息だった。

「ったく、面倒事に巻き込まれてんじゃねーよ。こっちの苦勞の身にもなれってーの」

木原は呆れた声で二人の傍に行き、そつと頭を撫でた。

垣根はそれを見て安心した。あんな興奮している時の麦野に被害を受けるのが自分だと確信したからだ。

「垣根、帰るぞ」

「ああ、わかったよ」

まるで安心したかのような木原の穏やかな声に垣根は少し笑って共に部屋を後にした。

翌日、銀時は目を覚ました。

あたりを見れば、見慣れない天井に見慣れない部屋。わかるとすれば自分のところにある点滴。

「……病院か」

病院にいたことを把握し、体を起こそうとするが、びっちらとホルドされてあって身動きができない。

銀時は怪訝な顔でそれを見た。

「は?」

そこには腰に手をしっかりと回し、抱き着いてこちらを向いて寝ている麦野がいた。

「はアアアアアアア!?!?!?!?」

この状況にさっぱり理解出来なかった。

(いやいや、椅子に座ってベッドに前のめりになって寝るのはわかるよ? 一体どオなりやこんな展開になるンだア!?)

混乱していると、先程の音が煩かったのか目を開け、擦りながらこちらを見る麦野がいた。

目が合い、しばらくの沈黙。

「え? エエエエエエ!?!」

銀時と同じ反応した。

「ンで? 寝てた俺を暫く弄んどいて? 眠くなった時にはその存在を忘れていたと」

「う、うん」

昨日の病院での事を説明され、呆れた顔で銀時は言つと、よっぽど
恥ずかしいのか顔を真っ赤にして頷く麦野。

「あ、あのさ」

「あん？」

何か言おうと口を開こうとしている麦野を見る銀時。

「昨日はその、あああ、あり、あ、やっぱり言えるかあああああ
!？」

「うっふっ!？」

余りにも恥ずかしく、思わず銀時の顔面を殴った。

「いきなり何しやがるんですかア!? 麦野さアアアア!？」

「うっさい!!! せんくらい察しろ! 第一位!!!」

一方すぎる展開に我慢できず怒鳴った銀時だが、麦野の返しに気付
いて理解した。

「なんだよ今更? 飛ンでる時はあんなにす「クロスクロスクロスコ
ロスクロス……」いや、なんかすんません!!! だからビームだそ
うとしないで下さい!!! ここ病院ですからアアアアア!!!」

ニヤニヤとからかい混じりに言おうとしたが途中で遮られ、如何に

も危ないオーラを出して暴れようとした麦野を叫んで必死に止めた。

「はア……何で病院で疲れなきやいけねエンだよ……」

「うっさいバーカ」

漸く落ち着いたが、ゼエゼエと息を荒くしながらも呆れた声でうなだれる銀時にまだ少し紅い顔して苛立つ麦野。

それにフツと笑って

「まア、人間らしくていいじゃねエか。でかくなりゃあ、良くも悪くも人は変わっていくし、変わらねエかもしれねエ。だから今はそオやって馬鹿やって生きていきゃいいんだ。お前はお前らしく、有りのままでいる」

「ホントに馬鹿だお前」

銀時の言ってくれた言葉はかなり嬉しかったのか、それがまた素直になれなかった。

「そう言われなくても、そのつもりだっつーのよ」

ぶっきらぼうに言う麦野に

「ケッやっぱ素直になンねエか」

また笑ってそういいのけた。

く素直になろうとしてもなれないのが人間く（後書き）

はい、過去話は終了です。

次回は

く人達いつてたまにあるよねく

です。

く人違いつてたまにあるよね（前書き）

あゝ今はまだ三月、春休み前あたりと考えてもらって結構です。

黒子に関してはこれから住む寮に来ていて、美琴と知り合い、仲良くなつた的な感じで頼みます

く人違いってたまにあるよね」

「まあ、ざっとこんなもんかな？」

「……………」

いやあ良く喋ったなあと満足そうに言った麦野に、美琴は無言で返した。

余りにも壮絶すぎた話でもあったが一番驚いたのは麦野沈利の存在。

「ん？どうしたん美琴？」

「いやあ……………なんか沈利、めっちゃすごいわ」

キョトンと首を傾げるのを見てさらに顔を引き攣らせた。

「第一位と二位と渡り合えるなんて」

「まあ一緒に住んでたしこんくらいはしとかないとねー」

「アンタがある意味最強だわ」

美琴はテヘツとわざとかわいらしく笑った麦野に失笑した。そして時計を見ると

「それじゃあ私はもう行くわ」

もうすぐで昼休み終わるのを確認する。

「学生も大変ね〜」

そんな呑気な声を聞きながら手を振り、背を向けて急いで走って行った。

「さ〜て、私もそろそろ帰ろうかじゃー。仕事入ってきてないしねー」

麦野はそう言っつてベンチから立ち上がり、一つ背伸びをして帰路へと足を運ぶ。

「はあくそれにしてもこんなこといつまでやってりゃあいいのかなあ……アイツが知っていたら何ていうかね〜？」

そして、その”仕事”についてため息をはいて、その人物を浮かべて悲しそうな顔をした。

「でも、それでもアイツの為だったら……どこまでも堕ちていく覚悟はできている」

辛くても、悲しくてもこれは彼女自身が決めたこと。何の迷いはない。

大切な人であり家族を守るためにも躊躇うことなくその世界に堕ちたのだ。

麦野は自重気味に笑ってその場を後にした。

「あゝクソ、まったくイライラするぜ全くよオ。カフェイン……いや糖分だ、今糖分摂取だなア」

こんな町中で苛立ちながらブツブツと歩いてる銀時はかなり恐い。周りはビクビクしながら銀時に道を開けている。それを見て軽く舌打ちをした。

彼が何故こんなに苛立っているかというと、

「なんで俺アあんな事したんだア？助けて終わりで良かっただろオが。それよりも、この俺が人助けなンざ似合わねーっての」

昨日の不良に絡まれていた七人しかいない超能力者の一人、御坂美琴を助けたことを後悔していた。

遊びでやった行動は彼女に恐怖を与えて精神的に傷付けた。

「超電磁砲にはわりイことしたなア、今度会ったら詫びいれっとすつかねエ」

会ってくれるかわからねエけど。と苦笑混じりに言っただけのものフアミレスへと入り混む。

ウェイトレスに迎え入れられ、適当にそこらへんの席に座ろうとするが、ふと見た事がある常盤台の制服を着ている人物の後ろ姿が目に映る。

銀時は昨日の助けた御坂美琴だと確信して近付き、声をかける。

「よオ……超電磁砲じゃねエか」

「それはミサカの事でしょうか？と声をかけられた人を見つめて確認を取ります」

振り向いた少女は無表情で焦点は合っていないまま、こちらを向いて首を傾げながら答えた。

「……………あア？」

銀時は怪訝な顔でその少女を見つめた。

話し方やら焦点が合っていないやら頭の上にあるゴーグルのようなものがあるやらで疑問点がありすぎる。

「お前……………御坂美琴”だよな？」

とりあえず本名を言って確認を取る。

「違います。それはミサカのお姉様の事だと訂正します。それと……あなたは一方通行でよろしいですか？と逆にミサカは問い掛けます」

銀時は驚いた。御坂美琴の妹発言ではなく、一方通行だと言うことが見抜かれたことに。第一位となっても知っているのは研究員共くらいだろう。

「お前は……………」

なんでそれを知っている？と続けようとしたが言葉を遮られた。

「申し遅れました。ミサカは検体番号シリアルナンバー00001号です、とミサカはあなたに自己紹介します」

「……………は？」

いきなり訳のわからない自己紹介をされて困惑してしまった。

(検体番号00001号？なんだア？こいつア超電磁砲の妹だけじゃねエのか？それに…………00001号つこたア)

少し落ち着かせて頭を働かせる。そして出たのは……

「おめエみてエな妹達がいるって言うのか？」

妹達が複数いるという答え。

「はい、その通りです。とミサカは一方通行の頭脳に褒め讃えます。あともう一つ、ミサカはお姉様の遺伝子によって造られたクローンですが、何らかの異常によりレベル1の欠陥電気レディオノイズとなってしまうたのです。と肩をがっくり落とします」

無表情で全くそんな様子を見せない00001号に銀時は呆気にとられるが、すぐまた険しい顔をして言った。

「なんの為に第三位の遺伝子を使いお前達を造った奴らの目的はなんだ？」

「それは研究所に聞いてみては？とミサカは何も知らないふりをしてみます」

「チツ……口止めかよ」

銀時はこれ以上聞いても無駄だと思い、話しの方向を変えた。

「ンで？その00001号さんはどうして外に出てこんなところにいる？」

「研究所での調整が終わり、外出でもしてこいと言われて出て来たのですが……初めての光景で何したらいいのか分からず、とりあえずお腹が空いたのでファミレスと言うものに来てみました……ですが、そのような所持金はあまり持ち合わせてないのでと研究員のケチっぷりに顔をしかめます」

本当にしかめてんのかと思うくらいピクリとも動かない表情で言う00001号に苦笑いしかでてこなかった。

「その金の心配はいらねエ。俺が奢ってやつから何か頼め」

「いいんですか？」

ちよつとだけ表情が明るくなったような、そんな感じがしたが差ほど気にせずに「あア」と短く答え、メニューを渡した。

黙々とそれを見つめて何にしようか悩んでいる00001号を見て
(出会ったモンは仕方ねエから少しこいつに付き合ってみるか)

研究所については後回しで今の状態を処理していくことに専念しようと思っていた。

く人違いってたまにあるよね（後書き）

00001号の登場でした

なんか口調おかしいような気が……なんかすいません！

次回は

く知り合いに勘違いされるのは一番めんどくさい

です

く知り合いに勘違いされるのは一番めんどくさいく（前書き）

たぶん出て来るメンバーは予想つきますよね（笑）

出てない人らはこれから少しずつ出そうとしてますので。

「知り合いに勘違いされるのは一番めんどくさい」

それからは銀時も00001号もお互い食事を済ませていた（銀時はパフェオンリーだが）

そして会計をカードで済ませて二人はファミレスを後にした。

「一方通行の顔に似合わず甘いものばかり取ってますね、とミサカは先程のことを思いだしながら尋ねます」

「最初は余計だったの。俺はコーヒーと糖分さえありゃあ十分生きていける」

「病気になりますよ？とあなたのその生活に心配しつつ、苦笑してみます」

「明らかに心配してるようには見えねエけどな。そんなもんはベクトル変換すりゃあ、何の問題もねエよ」

「もう何でもありですねとあなたの能力のチートさに驚きます」

またミサカ00001号と話しながらも何の目的もなく歩いていった。

「ところで一方通行」

「ああ？ってか能力名で言うのはやめろ。俺には坂田銀時ってエ名前があんだよ」

「坂田銀時…ですか、変わった名前ですねとミサカは珍しい名前に興味を持ちます」

「お前のその喋り方が珍しいんだよ」

「結局、これからどうするのですか？」

「スルーすんな。普通に標準語で喋れンじゃねエか」

なんとなくイラツとしてきている銀時だが、そこを何とか抑える。

「どオするつてもなア……ファミレスかコンビニくれエしか行かねエしな」

「ぼっちなんですねとミサカは笑いをこらえながら……ぷぷっ」

「オーイいい加減にしねエと銀さん怒っちゃいますよオ？それにぼっちじゃねエし、ダチくらいいるつつうの！クソメルヘンとかビームババアとか……やっべエそれしかでてこねエ……」

00001号の憎たらしい態度に顔をヒクヒクさせながら言っていたが、自分で言っただけ悲しくなってきたのか、片手で顔を隠した。

「それでもいないよりはマシですよ？とまだ堪えながらあなたをフオローします」

「俺を馬鹿にしてるのがよオくわかったよ」

中学生のクローンに弄られる第一位ってどうなのよ？と心の中で呟きながらガクツと肩を落とす。

それを見兼ねた00001号は声をかけた。

「あなたの言っていた”クソメルヘン”と”ビームババア”とはどういう人達のでしょうか？とミサカはあなたの友達に興味を持ちます」

それに対して銀時は顔を00001号に向けて少し悩んだ結果、正直に答えた。

「まア、ダチとかどっちかってエと、家族みてエなものだな」

「家族……ですか」

若干、しみじみと話した銀時に00001はボソツと繰り返した。それを気にせず、そのまま続ける。

「俺達はある男に拾われてな、それまでくだらねエ実験させられたのが嘘だったみてエに楽しかったぜ。まアそれなりに問題はあったけどな」

穏やかな顔で語った銀時に00001号は何か引つ掛かっていた。

「だった……？」

「別に死んだとかそオいう事じゃねエよ？ただ、研究員として飛び回ってるだけでここにはいねエってこった。それから別々になってるわけ」

過去形だったのが気になったのだらうと思い、銀時は少し笑い気味にそう話した。

「てかさア、お前は研究所に帰ンねーのか？」

「まだ調整には時間があるのでとミサカはまだ暇だということは一
ピールします」

こうやって喋りながら町を歩いてるが、もう結構な時間になってい
る。

銀時はハアとため息をついた。

「俺と居たって楽しくねエだろオ」

「いえ、ミサカはあなたといろんな話しができたので楽しかったで
すよつと素直な気持ちで言葉に表します」

「そオかい」

銀時は少し嬉しい気持ちがあつた。木原、垣根、麦野にもこんなに
親しく誰かと話せることが嬉しかったのだ。だから素直に楽しかつ
たと言つた00001号に照れたように微笑んだ。

だが、00001号の顔は相変わらず無表情だがどこか暗い感じに
なつていた。銀時もそれを感じていた。
そしていきなり

「あの……なんでミサカ達が造られたか知りたいですか？」

そんな話をふつてきた。

「……………気にはなるが」

ただならぬ雰囲気、銀時は嫌な予感がしていた。

「ミサカが生まれた理由は「な」に女の子と一緒に歩いてんだ？デートか？デートなのかこの野郎」……」

00001号の声は遮れ、前方から歩いて来るチャライ男が話し掛けてきた。

「あア？女といたただけでデートになんのか teme は。頭の中までお花畑になっちまったンですかア？垣根くウン？」

チャライ男、垣根に銀時は呆れた顔で言った。

いつもどおりの事なので垣根はスルーするが、何を思いついたのか携帯を取り出した。悪い笑みを浮かべて。

「あ、もしも俺だ。銀時が女連れて歩いてんぜ？あ？了解した」

シリアスな展開が一気に崩れだし、00001号は啞然と立ち尽くし、銀時は顔が真っ青になった。

「なア……まさか電話した奴って」

「ああ、麦野だよ」

更にそれを聞いてダラダラと大量に冷や汗が流れ出した。

そしてドドドドドドッと遠くから砂煙でも舞っているような勢いでこちらに何かに向かってきた。

「ぎん、と、きイイイイイイイ！！！！」

「ぎゃアアアア！？なアーンでこうなるンですかア！？クソメルヘン、後で覚えとけよオ！！！」

「待ちやがれ！銀時イ！！！」

ダダダダダと放たれた粒子を空へ跳ね返しながらの麦野からの逃走劇が始まった。

「あーあー後が大変だなあこりゃあ」

その光景を見ていた垣根がゲラゲラと笑って見送っていた。

「……………えーと」

「ん？」

唖然としていた00001号はようやく我に帰り、垣根に声をかけた。

「あなたがアクセ…………坂田銀時が言っていた”クソメルヘン”って言う方ですか？とあの人の名前を言い直しながら尋ねます」

「いや、クソメルヘンなんて言う名前持ってる奴なんていないからね？俺は垣根帝督ってんだよ」

垣根は苦笑しながらそれに答えると00001号はその名前に聞き覚えがあった。

「あなたが未元物質でしたか」

「あ？なんだ、知ってんじゃないか」

能力名を言われ少し驚いた。
00001号は更に続ける。

「研究所で何回か聞いたことがあるので、とミサカは答えます」

研究所という単語を聞いてピクツと反応した。

「研究所ねえ……お前は何か俺らに関係してんのか？」

そう尋ねると、首を横に降って答える。

「実際は坂田銀時だけのための実験だけに生まれた人形なのです、
とミサカは正直に答えます」

顔色何一つ変えずに答える00001号に垣根は険しい表情をする。

（研究所は一体、アイツに何させようとしてやがんだ？木原のいね
え今、何を企んでやがるか知らねえがアイツなら録な事は断るか）

銀時の性格を知っているため垣根はそれで思考を止めるが、何かが
引っ掛かっているのを無理矢理押さえ込む。

「それにあの人を追っていった方が”ビームババア”という方です
か？と先程の女性を気にかけます」

「それを本人の前で言ったら、跡形もなく消されるぜ……奴もレベ
ル5の一人、麦野沈利だよ」

「“一方通行”に”未元物質”、それに”原子崩し”ですかとミサカは三人を拾った人物に驚きを隠しきれません」

第一位、二位、四位が揃ってるのは誰だっけと驚くだろう。

「銀時から聞いてたのか。まあ俺も奴らも何かしらソイツに惹かれてたんだよ……あんなヤクザみてーな顔してっけどな、温い生活が当たり前になっちまってる」

(まああとは裏の仕事さえなけりゃあ、完璧だったんけどな)

垣根は今までの事を思いだしながらフツと笑った。

00001号は心の中で悔やんでいた。もし垣根が偶然とは言え、間に入っていないければ当日知る予定だった実験内容を銀時にすべて吐いていただろう。

(ミサカは造られた人形なのに、どうしてこんな苦しい気持ちになるんでしょうか?)

この気持ちは何なのかわからないままでいると

「ハア……ハア……たくお前、加減つてもン考えるよ……」

「う、うるさい！大体テメエが悪いんだよ！」

いつの間にか銀時と麦野が息を切らしながら戻ってきた。

「随分と長え鬼ごっこだったな」

「鬼ごっここの話じゃねエだろオが……」

「だろうな」

からかい混じりに垣根が話すと銀時は呆れながら答えるのに対して納得した。

「でさあ……何で銀時が美琴というわけ？学校行ってたんじゃなかつたっけ？」

ようやく00001号を確認し、昼休みの時にいた御坂美琴だと思つて麦野は問い詰めた。

「ああ、こいつ超電磁砲じゃねエ。クローンだよ」

それに対して銀時はアツサリとばらした。

垣根も頷いたが、第三位がこんなガキだとは思わなかった。

「え？クローン？」

少しキョトンとしてしまった麦野に00001号は二人と同じように説明した。

「へえー銀時用に生まれた超電磁砲クローンねー……全く録な事考えてないわね」

麦野も垣根と銀時同様な反応をした。

「そオいやアお前、俺に言いかけてたよな？」

「……………」

00001号は内心戸惑っていた。自分で言いかけてたのに今となつてはすで言うか、言わないか迷っている。

(これは一体……？調整ミスでもあったのでしょうか)

やはりどうなっているのかさっぱりわからず、無言のまま立ち尽くした。

「まア……言いたくなくなつたつてんなら無理しなくてもいいぜ？どっちみち研究所行かなきゃいけないーんだしよ。それに迷つてるつてんなら、それが人間だつて証拠だよ」

銀時は無言のままにいる00001号にそう優しく言葉をかけた。それには二人も頷いた。

「……………ですが、ミサカは「だからどうした」……………え？」
00001号が何を言うかわかつたのでそれを遮つた銀時。

「例え、お前らがたくさんいようとものな」

「お前という人間は一人しかいねーんだよ」

「何人造られようがアンタに換えなんてもんはないんだよ」

「……俺(私)達と何も変わらねえ人間だつて事を忘れるな」「」

初めて00001号の表情に変化が見られた。

大きく目を開け、いかにも混乱しているような顔。

「そんな顔できりゃあそのうち自然と笑えるかもな」

銀時は先程と同じような笑みでそう言った。

「……ミサカはそろそろ時間なのでと静かに呟きながら立ち去ります」

そうかと銀時が言った後、また00001号は無表情に戻って去って行った。

「じゃあ俺達も解散ってことで」

少しだけ見送った後、自分もマンションへと足を向けたがガシイと常に反射を切って歩いているので両肩を二人の手によって捕まれた。

これは二人もわかっているからそう行動した。

「あの、麦野さん？垣根くん？何で肩を掴んでのかなア？」

「久しぶりに三人で一つ屋根の下で騒ぐのもいいんじゃないかなと思っただけ」

「って事で案内よろしくね」

ニヤニヤとしている二人に銀時はガシガシと頭を掻いて

「わアーったよ。ただ壊すんじゃないぞ」

そう答えた。

く知り合いに勘違いされるのは一番めんどくさいく（後書き）

次は話しが進みます。

くヒーロー登場ってなんか格好いいけど、最強の前ではとても情けないく

です

補足。

レディオノイズはLv.1設定にしてましたが、

1く10000号がレベル1く2

10001く20000号が2く3くらいでお願いします。

く意思なんてのは誰にだってあるく（前書き）

少し飛んできますがそこは気になさらずに？

く意思なんてのは誰にだってある」

少し時は流れ、実験当日。

銀時には少し早い起床っと言ってももう12時を回っているが、あの時電話で言われた事を思いだしてマンションから出て鍵を閉める。そして目的地へと歩きだす。

その前まではずっと三人で毎日騒いでいたのだ。

「ったくよオ、まさかずっと来るとは思わなかったぜ……」

垣根が制服を来たまま、酒を店員に脅して買ってきたものを飲んで騒いだり、ハイテンションになった麦野が銀時の部屋を壊したり（金は腐るほどあるため、もう修復されている）、などと様々だ。

「腐るほど金あんのも、どオ使えやいいかわかんねーモンだなア」

前世では考えられなかった生活に自然と笑みが浮かぶ。

「新八、神楽は今どオしてンのかねエ？」

やはり記憶は残っているのです、二人の事が気になって仕方なかった。

「チツ……死んだ以上、何もしてやれねエが……あいつらが楽しくやっつてることを祈るしかねエな。今の俺は一方通行としてこの世界を死ぬまで守ってやるだけだ」

切実に二人の無事を祈り、今やれる事を宣言した。

そして銀時が立ち止まったところにあるのは今、世話になっている研究所。

中に入ると

「よく来たな、一方通行」

この実験に最も関わりがある人物、天井亜雄あまいあおがいた。

「何の実験なんだ？」

本来の目的である実験について問い掛ける。

「絶対能力進化計画」（レベル6シフトプラン）。レベル6に一番近いお前のための実験だ」

「レベル6だア？」

レベル6になれる実験と聞いて少し顔を険しくする。

「それまで苦労したよ。結局は”樹形図の設計者”（ツリーダイアグラム）なんて機械に頼ってしまったがな」

樹形図の設計者。

正しいデータさえ入力すれば未来予知もできる優れたもののコンピュータ。

それを使ってでたのがレベル6になれる方法。

「その内容は？」

それを聞いていた銀時は無表情で問う。

「それは、20000通りの環境状況で超電磁砲のクローンである
量産型能力者を20000回殺すことだ」

それを聞いた瞬間、頭に何かの映像が過ぎる。

数人の同じ顔の死体。そして醜くなったそれを嘲笑っているのが本
来の自分の姿だろう、写真で見たのと同じ一方通行の姿。

(そオいうことかよ!?クソツタレ!!)

もうこれで過去の過ちがわかった以上、怒りを覚えているがそれを
抑える。

「なんだよそりゃあ?ンじゃあそいつらは俺に殺されるためだけに
生まれたただの実験動物ですって言いてエのか、テメエらは」

「なんだ、会っていたのか。そうだ、あいつらはその為に生まれた
玩具だよ」

天井はすでにその存在知ってるように言ってきた銀時に驚いたが、
また淡々と言い放った。

それを聞いた銀時は天井の首を掴んで叫んだ。

「玩具?あいつらが玩具だってエ?俺らと何ら変わらねエのに、目
的がどうであれちゃんと生きてンのに!そんなふざけた言葉で済ま
せてンじゃねエ!」

「ぐ……カハッ……」

ミシミシと掴んだ手に力が入り、天井は抵抗しているがそれには及ばない。

「やめなさい、銀時」

唯一、研究員の中で銀時を名前で呼ぶ女性。

「芳川……」

研究所で木原とともに何かと世話になった芳川桔梗よしかわきぎょうだった。

「首から手を離しなさい」

「チッ」

銀時は仕方なく天井を投げ捨てる。その辺の机にぶつかった天井は気絶した。

「お前エも関わってんのか？」

「ええ」

銀時の怒気の含んだ声に動じず、短く返した。

「俺はそんなクソツタレな実験やるわけねエだろが」

「……………そう」

芳川の意外な返事に目を細める。

「これは一応延期ってことになるけど、それでいい？」

「延期なンざしたって俺の気持ちは変わんねエけどな」

「あら、じゃあ妹達の命も長引かせないといけないわね」

銀時の言うことがわかってるかのように優しく言った。

「お前……」

「もう今日は帰りなさい」

「……………」

それ以上言うなとそういう雰囲気を出した芳川に銀時は何も言わずにその場を跡にした。

「ごめんなさいね銀時……私じゃどうにもならないこともあるのよ。けどあなたなら……………」

その背中を見つめながら言いかけて終わらせた。

「はア……クソツタレがア……いつそ研究所そのもの消し飛ばしてエが、そんな事すりゃあ……妹達がどっちにしろ死ぬってかア？笑えねエな」

「上の連中の目的は何のためにそこまで俺に執着してやがる？」

考えてもまとまらずに不機嫌ながらも人混みのいない、誰も通りそうにないところを歩く。そしてピタッと立ち止まり声をかける。

「オイオイ、話が違っじゃねエか……延期って聞いてたんだが、どおしてそんな物騒な物もって突っ立ってんだア？000001号？」

そして前から姿を現したのはゴーグルを装着し、機関銃を持ったミサカ000001号。

「あれは嘘です。延期なんて研究所はこれっぽっちも考えていないでしょうと冷静に分析してみます」

何の変哲もなく言っただけのけると銀時は溜め息を吐いた。

「まったく、どおしてこうも連中はせっかちなかねエ？000001号ちゃん？」

「……………もう少しで実験が開始されますがよろしいですか？とミサカは被験者、一方通行に確認します」

「まあたスルーですか。その前に一つ聞いてエ事がある」

また前みたいにスルーされたことに顔をしかめながらも問い掛ける。

「なんででしょうか？とミサカは実験開始時刻である事を告げながらもあなたの質問を承ります」

「お前、本当はまだ迷ってるんじゃないのか？」

「…………この状況で何を言ってるんですか？迷いなんてものはないからこうやってあなたと実験を開始しようとしているのではありませんか、とミサカは一方通行が何故このような事を聞いてくるのか疑問に思います」

00001号は銀時がこのような質問してきたのかわからないでいる。

「んじやなんでスルーしないんだ？」

「……………」

また銀時は問い掛けるが00001号は答えない。それでもまだ続ける。

「さっき見てエに、スルーして俺に攻撃してもいいんじゃないのか」

「……………うるさい」

語尾を忘れ、いつもより低い声で言う。

そして機関銃を構えて銀時に向かって発砲した。

だが、それは銀時によって辺りに散らばっていった。

「ハッ、言われてから仕掛けても遅いんだよ」

「テメエはテメエ自身の意思ってモンを持ちちまったんだよ」

「……ミサカに意思など存在しません、と否定します」

00001号はこんな事は有り得ない事であり、否定したが

「ならどオして続けて仕掛けてこない？」

銀時は問い詰め続ける。

「それは……」

00001号は詰まった。

意思はないはずなのに何故攻撃できないのか？何故こんなにも言葉が出てこないのか？段々と頭がパンクし始めてきたが、浮かんできたのはこの自分を人間として接してくれた三人の姿。そして大切な事も教えてくれた。

麦野沈利、垣根帝督そして目の前にいる坂田銀時。

それが浮かんだ瞬間、何を迷っていたのか、そして今自分はどうすべきかはつきりとわかった。

「ミサカは……ミサカは……本当は実験などしたくないです！貴方達のせいで死ぬのが怖いです……まだ生きたい……貴方達とまだ一緒にいたい！と迷わずあなたの目をまっすぐに見つめて自分の意思をぶつけます」

ようやく出た答えに迷いはなくぶつけると銀時は優しげな笑みを浮かべた。

「そオカ、お前の望みどおり俺が叶えてやらア…そのために実験を受けてやるよ」

殺すのではなく救うために実験を受ける事を決意して00001号の目の前に行くと言をそつと撫でた。

「あ、アクス」銀時でいい」……銀時」

名前で指定され、心なしか顔を紅くしながらも銀時に告げた。

「ただこれで終わりつてのもなア……ちつとフリイが眠つててもらつていいか？」

終わりとしていいが実験としてはこのままではまずいと思い、バツの悪そうな顔で00001号に言うと、コクつと頷いた。

そしてそのまま手を滑らせおでこに当てて神経を麻痺させる。

ドサツと倒れた00001号。

銀時はフウつと一息入れて考える。

(さてさて、こんな感じでやってけばいいよなア)

「まアばれるだろオカ、問題はそれじゃねエ」

それは別に不安があった。

「俺の精神が持つかどうかだな」

銀時は精神状態を保てるかどうか心配だった。

「それでもやってやるオじゃねエかクソツタレ」

意地でも成功させることを誓い、00001号を背負っていこうとするが

「何やってんだお前エエエエ！！！」

「ああ？ぐあつ！？」

誰かが割り込み銀時を殴りつけた。

殴られた銀時は余りの威力に吹っ飛ばされた。

(グッ！反射が効いてねエだア！？なんなんだよ！？ソイツは！！)

突然殴られたこともそうだが一番は反射が効かなかったことに驚愕した。

その殴ってきた相手を見つめると、そこにはツンツン頭で、自分と同じくらいの歳である少年がこちらを睨みつけていた。

〜意思なんてのは誰にだってある〜（後書き）

勝手ながらサブタイトル変更してずらしました。

次が

〜ヒーロー登場って何かカッコイイけど、最強の前だとなんか情けない〜です。

〜ヒーロー登場ってなんかカッコイイけど、最強の前だとなんか情けない〜（前

上条VS銀時？です

〜ヒーロー登場ってなんかカッコイイけど、最強の前だとなんか情けない〜

「なアーンなアーンですかア？ テメエはよオ？」

銀時は立ち上がり、そのツンツン頭の少年を見た。
そんな問い掛けを無視して幾分ドスの効いた声を上条当麻^{かみじょうとつま}は銀時にかける。

「何してんだって聞いてんだよ！！このクソ野郎！！」

そして右手を強く握りしめて銀時へと走り出した。

「そオかいそオかい、そつちがその気ならやってやるよ！！」

そう判断した銀時は片手を上に挙げると手始めに小さなプラズマを造りだして上条に放り出す。だがそれを避けず右手を前にだして

キューン

そのプラズマを打ち消した。

「!？」

銀時は驚いて反応が鈍る。上条はもう目の前に来ている。

「うおおお！！」

右手を振るって

バキィと二発目が銀時の顔面を捕らえた。

「グッ……………」

再び地面に倒れた銀時。

その間に、上条は00001号をなるべく安全な場所へと運び込み、壁のあるほうへともたれ掛かせた。

「オイ！！しっかりしろっ！！」

声をかけたが反応はない。

手首を持って脈拍を調べ、まだ生きてる事を確認してホッと一息つく。

すると前から銀時が口元の血拭って近づいてくる。

「お前さア、何なんだよ？その右手はっ！？」

そういつた直後に激しい頭痛が銀時を襲った。上条はいきなり頭を抱えてしゃがみ込んだ銀時を不思議そうに見た。

またあの時とは違う映像。

見えたのは10032回目の実験。そして乱入してきた超電磁砲の少女とツンツン頭の少年。

そしてそのわけのわからない力”幻想殺し”（イマジンプレイカー）を宿した右手で終わらせたのはその少年。

その少年が現在目の前にいる。

「ククク……………そうかい、テメエが”ヒーロー”ってわけかい。この

クソツタした”悪党”を倒しにきたってかア？」

自分になる前の一方通行がこの少年に敗れて実験が終了したことを漸く把握できた。

「そんな大層なもんじゃねーよ」

上条は銀時を睨みつけた。

「俺はただ目の前で人が傷ついて黙って見過ごすことができねーお人よしなだけだ」

「クカカカカツ！！お人よしねエ……目の前にいるのが、学園都市最強の一方通行だっって言ってもお前は見過ごす事はできねエって言えんのかア？」

上条の言葉を聞いて銀時は敢えて試した。

答えは分かっているとしてみだ。

それがその通りになった。

「例え目の前にいるのが最強だろうがなんだろうがその子を助けるまで俺は逃げない！」

「そうかア、俺はテメエみてエな馬鹿は嫌いじゃねエ」「」

予想通りの言葉を出してもらって銀時はまた笑った。だがすぐに真剣な顔をする。

「だがなア」

スツと銀時が姿を消す。そう、一瞬で上条の前まで移動した。上条は反応が遅れて身構えた既に手遅れ。

バキイ！！

上条の顔面に拳を当てた。

「ガハツ！」

勢いのあまり吹っ飛ぶ上条。

それを見ながら銀時は告げる。

「俺アここでまだ負けるわけにはいかねエンだよ」

木刀を肩に担いでギラリと紅い目を光らせ、更に続けた。

「能力者は能力がすべて、だなんて思ってたんだよ？」

「くっ………テメー！！」

起き上がり上条は向かってきた。

「テメエの右手は何か知らねエが能力が通用しねエのはわかった…
…用は能力を使わなければいい話なんだよな！」

必要のない反射を切り、上条が殴り掛かってきたその右手を掴んで

「これでおあいこだ、クソボケ」

同じように二発目を食らわした。

「がつ!!?」

上条はまたも吹っ飛び、壁へ激突する。

痛みに耐えながら何とか立ち上がっていると

「なア知ってるか？木刀でもよオ……」

ズガアアアン!!!

上条の顔面スレスレの横で壁にでかいひび割れが実現した。

「刀みてエに人をぶっ刺せる力を持つてンだぜエ？」

放った本人はケラケラと笑いながら近付く。

上条は大変ことをしたのだ。

今の銀時は同じ無能力者。だが、桁違いな身体能力 を持ち、自分を追い詰める白い鬼のような存在。

能力を使用してもらわないと右手は何の役にも立たない。

現に彼は能力、身体ともにずば抜けている最強の存在。

ここでやっと敵うはずがないと理解した。

今思う事は……殺されると言う恐怖心が襲いかかり、自然と体が震えた。

それと

「くっ………！ビリビリ！」

あの少女を助けたのに震えている自分を情けないと思っている。

「チツ………そいつは超電磁砲じゃねエよ」

00001号のほうを見て”ビリビリ”と発したのを聞いて眉を寄せて訂正した。

「何？どういっ………」

「メンドクセエからもつ寝てる」

上条はそれに反応して問おうとしたが鳩尾に一発噛まされ、そのまま気絶した。

「たくよオ、出てくんの早過ぎなんだよ………」

銀時はため息をついてこの少年をどうするか考える。

(どオセ何らかの形でまた関わってくるんだろオ。メンドクセエが今日の事だけ記憶を消すか………)

まとまったところで先程00001号にやったように記憶抹消させる

ために上条の頭に触れる。

(抹消完了。演算解除つと)

作業は終了し、銀時は突き刺さっている木刀を引き抜き、00001号のところまで行く。

「その時になったら、よろしく頼むぜ？」ヒーロー”くん”

気絶した上条に向けて放ち、彼女を背負って歩いていった。

だがまたもや気配があるのを感じて立ち止まる。今度は複数。だがこの感じは00001号と似た感じである。

「一気に実験を始める気ですかア？妹さん方よオ」

銀時がそう言った直後に5人ほどの欠陥電気達が姿を現した。

「ヒーロー登場ってなんかカッコイイけど、最強の前だとなんか情けない」(後)
さてさて

今回は

「知らなくていいことも耳に入ってくるのは仕方がないこと」
です。

ちょっとした次回予告

「ねえ？」

「あ？どうした？」

「“第一位”が面白い事してるみたいよ？」

少女が手にしているものは数枚のレポート。それを少年に見せた。
内容を見た瞬間、思いっきり目を大きくした。

「！？そういうことだったのかよっ！！」

そしてこの少女の手にも。

「ふけてんじゃないわよ！！なんであなたは……！！このつ馬鹿銀時
っ！」

”これ”に関わっている少年を怒鳴り叫ぶ。

く知らなくていいことも耳に入ってくることは仕方がないことと（前書き）

長くなる予定です。

く知らなくていいことも耳に入ってくることは仕方がないこと

銀時は現れた妹達に目をやる。

「ンで？お前らは何しにきたわけ？」

「あなたが肩に担いでいる00001号を回収しにきたのです、と芳川の指示できた事をミサカ00002号は答えます」

芳川ねエ……と00002号の言葉から出てきたのを繰り返す銀時。そこで携帯に反応があった。手にとって開くと、『芳川』と表示されていた。

「なんだ…？」

『妹達は着いたかしら？』
余りにも落ち着いた声に銀時は疑問に思ったが、「あア」とだけ答え、芳川にきつく聞いた。

「つーか回収してどオするつもりだア？」

『安心して。処分とか考えてないから』

「あア？」

『実はね、00001号の他にもね意思が芽生え始めてるのよ』

「どオいうこつたそりゃあ？」

銀時はわからないと言った顔で聞いた。

『ミサカネットワーク…まあ簡単に言えば、妹達の電気操作能力を利用したテレパシーってところかしらね。つまり全妹達に繋がってるわけだから貴方がやってることは知ってるのよ』

「これまた…面倒なもん造りやがってエ」

ハア…とため息をつく銀時に対して芳川は穏やかな声で

『あら？でもそのほうがやりやすくていいじゃない。転々と事が進むし』

「人事だと思いやがって…」

『こつちは何とかするから。銀時はきちんとこなせばいいだけよ』

「わかってんだよ、んな事はな…ただ」

『貴方自身のこと？』

「あア…そつだよクソが」

『……まあ貴方にも考えがあるのでしようけど、無理はしないでね
……あなたの場合に能力が強すぎて”自分だけの現実”パーソナルリアリティに何らかの影響を及ぶことがある』

「強すぎる能力ほど暴走するって事か」

『そういう事。それは垣根くんにも言えることよ？二人とも、レベル6に近い存在だから』

『貴方が暴走しちゃったら学園都市が消えてしまうほどになったら大変どころの話じゃないわよ』

「そりゃ恐いわな」

銀時は何となく覚えがあつた。昔、自分と麦野が襲われた事件。大きな黒翼の出現による暴走。それを思い出して顔を歪める。

坂田銀時、垣根帝督。

”一方通行”と”未元物質”の暴走は都市が消えても何ら問題は無い。

少し間が開いたが、銀時は口を開く。

「俺ア中止に持ち込める手は考えてある。時間はかかるがやるしかねエ。それまで持ちこたえてやる」

意思は変えるつもりはない。銀時はキツパリと言った。

『そう…頑張つてね』

芳川がそう言った後、電話を切った。パタンと携帯を閉まったあと妹達を見た。

「今日の実験はこれで終わりか？」

そう言つと

「はい」

と00002号がそう返した。

「そオかい」

それだけ言つと背を向けて帰ろうとしたが、目の前で倒れている上条に気づいた。

「あゝついでにこいつも適当に処理してくれや」

「了解しました、と00002号は代表して頷きます」

それを確認したあと立ち去ろうとするが「あのっ！」と大きな声がかかって再び足を止める。

「どオした？」

首だけ動かすと妹達がかすかに表情が柔らかくなってる気がした。

「あなたには感謝しきれないほど…」

途中で吃ってしまったのがまどろっこしいのか、銀時が口を開いた。

「感謝なんていらねエ。まだまだただけどな、俺アお前らの笑顔を見れるだけで十分だ。そのためだったら何だってしてやる」

銀時もニツと笑ってまた歩きだしていった。

それを見ていた妹達は

「坂田銀時……ですか、とあの人の名前を00002号は呟きます」

「やはり変わった人ですね、と00003号は掴みどこのない人だと実感します」

「あの人の意思を踏みにじらないように頑張らなくては、と00004号は張り切ります」

「それにしてもあの笑顔は反則ですね、と00005号は少し胸の高鳴りが収まらない事を吐露します」

それぞれ違う反応を見せているが、坂田銀時の意思を守ることだけは一致していた。

「さて、00001号と一般人を運びますかと00002号はこの場を速やかに立ち去ることを三人に告げます。」

「はい」「00002号に賛同したあと行動に移し、この場を立ち去った。」

実験中止まで残り10031回。

「ねえ」

「あ？なんだよ」

翌日の朝。とある隠れ家で二人の男女がいた。

「貴方宛てにきてたわよ？勝手に見ちゃったけど」

少年に声をかけたのは派手なドレスを来た少女。

「俺宛てだ？つーか何勝手に見てんだよ…心理定規^{メジャーハート}」

少年…垣根が少女にそう言った。

垣根と一緒にいる少女は心理定規。人の心の距離を自在に調整できたりすると、使いようでは恐ろしい能力だったりする。

「ふふっごめんなさい。個人宛てでくるなんて珍しいから、興味本意でね」

「チッ」心理定規が笑いながら話すのを舌打ちした。

「それにして面白い事してるわね、”第一位”は」

ピクツとその言葉に垣根は反応した。それをみて面白おかしくしな

がら「はい」と送られてきたものを渡した。

それを見た垣根は思いつきり目を見開いた。

「な……なんだよこりゃあ？こいつぁ本当なのかよ！？」

「たぶん本当よ？だってこついうの送れるの上の連中だけでしょ」

あつけらかなに言う心理定規にも腹が立ったが、一番の理由はこの紙に書かれてる内容。

「ちっ」

「あらっ？どこ行くの？」

心理定規は問い掛ける。

「散歩だ、クソ野郎」

そう答えて隠れ家から外に出歩いてった。

「はぁ……暇だにゃー……」

麦野沈利はファミレスで暇をもて余していた。

銀時のマンションに行った方がいいが鍵かけてあり誰もいる気配はしなかった。

電話しても、メールしても応答はない。

「あの野郎いい度胸じゃねーか……………」

これはもうブチコロシ確定ねだとかブツブツと呟いている姿はとて
も恐い。

そろそろ周りの視線も痛いのか立ち上がると携帯がなった。

携帯を開くと垣根の名前がでていた。

麦野は前にある出来事思い出し、顔ヒクヒクとさせる。

(まーたあの野郎は女連れてんじゃねーだろうな?)

そう思いつつも出てみると

『麦野、お前直々に手紙こなかったか?』

「はあ?」

垣根の言う手紙に見覚えがないため電話越しに首を傾げた。

『お前…今どこにいる?』

「いつものファミレスだけど?」

『ちよつとそこで待ってる』

垣根がそう言うとプツツと切れた。

深刻そうな声に斐野は顔をしかめていた。

「面倒くさいことでも起きたのかね」

何にせよ、とりあえず自分が座っていたところで待つことにした。

「ん？ここは……？」

「病院だよ」

上条は目を覚ますと見覚えのない天井にボソツと言うと近くで声が聞こえた。

そこにはカエル顔をした医者が出た。

冥土返し（ヘブンキヤンセラー）。

死んでなければどんな状態でも治すことができるんじゃない医者だ。

「あの、どうやってここまで…」

「一般人がね、君を見つけて連絡してくれたみたいだね。まあ気絶してただけで、そんなに外傷は見られなかったからすぐには退院できるよ。それにしてもぐっすりだったね」

もう日が変わってるよ

話を聞いて上条は

「そうですね」

それだけ答えた。

「それにしても、昨日起きた事は覚えているかい？」

冥土返しからそう聞かれて思いだそうとしたがなかなか思い出せず首を横に軽く振った。

「脳にダメージは見られないが恐らく何者かが意図的に与えたみたいだね」

「まっ家に帰って休むといい」

それだけというと病室から出て行った。

上条はハアとため息ついた。町を歩いていたはずなのに、気がついた時には一日たっていて更には病院にいる。上条はそれを一言で纏

めて呟いた。

「不幸だ……」

「よっ」

「やあーっと来たかあ。つーか飛んでくればこんな待たずに済んだのに。つーか飛んでこい」

カランカランと出入口から姿を現したのは垣根であり、麦野は手を振った。

それに気付いた垣根はそっちに行くのとドサツと座って返事をすれば上記のように返された。

「だって奇妙に見られるし」

「それ今更でしょ。ただメルヘンが飛んできるとしか見られないわよ」

「自覚あつから言っただよ」

そんなふざけた会話から一気に真面目な顔をした垣根に麦野も引き締める。

「こりゃあ相当やつかいだぞ」

ほらっつと封筒を渡される。

中をとりだすと何か書かれてる紙がある。

それを見た瞬間、垣根と同じような反応を見せる。

「何よこれ、冗談…よね？」

「俺もそう思ってたよ……」

「アイツがそんなことするわけが……」

まだ信じられない顔をして紙を見ている。

「それだけじゃねえ……下をしてみる」

「え？」

垣根の言われた通り、下の方に視線を落とすと更に驚愕した。

「どづいうことよ!?!?これ!?!?」

バンとテーブルを叩いて垣根に迫る。

「俺だってわかんねーよ。ただそれは俺らにはわからねえ何かがあるってことだろ」

「何を隠してるっていつのよ……っ!?!」

至って冷静に言う垣根に対して麦野は収まりが着かないようだ。少

し周りがざわめいている。

「落ち着け……とにかく俺らがやることはまず情報収集だ。これだけじゃ足りない過ぎる」

「……そうね」

垣根に言われてハツとしたのか麦野は大人しくなって座り直した。

「だとすればだ……行くところは一つしかねー」

「まさか……」

「ああ……研究所だよ」

そして二人が行くところは決まった。

麦野は怒っていた。垣根も怒りの声はだしてないが相当頭にきているだろう。

「ふざけんな……あの馬鹿銀時!!」

それでも押さえているのだろうが、麦野の怒声は店内に響き渡った。

垣根は静かにそれを見ていた。

封筒内容。

第一位『一方通行』、坂田銀時による絶対能力進化計画。

第三位のクローンレディオノイズ量産型能力者20000体を20000通りの環境状態で戦闘し、殺すこと。

それにより坂田銀時は絶対能力者（レベル6）になることができる。

現在実行中。

そして彼の中に眠る『白夜叉』覚醒の煮込み有り。

く知らなくていいことも耳に入ってくることは仕方がないことゝ（後書き）

長めなような普通なような…

次回予告は下手なんでしないことにしました（笑）

くチャラ男とヤンデレとビリビリは考えることは同じく（前書き）

垣根、麦野、芳川、あとから美琴が加わってきます。

この回、銀時とクローンは名前だけです。

「チャラ男とヤンデレとビリビリは考えることは同じ」

垣根と麦野は研究所へと向かっているが二人は無言。重い雰囲気のまま歩いていった。

「……………」

周りはその雰囲気になんて耐え切れず適当にその辺の店にそそくさと入っていく。

そしてしばらく経って研究所についても無言を貫く。中に入っていくとそこには一人の女性が書類を手に目を落としている。

その二人に気付いて意外な顔をした。

「あら？珍しいお客さんねえ」

「よお」

「久しぶりね。芳川」

その女性、芳川はフツと笑って「久しぶり」と答えた。

「お前一人か？」

「ええ、そうよ」

約一名部屋に縛り付けてあるが存在を否定した。

「なら話しやすい。これはなんだ？」

そう言つて垣根は芳川に封筒を投げた。

芳川はその封筒の中を見て「ああ」と頭を手で押さえて

「出回つてしまったのね……」

と諦めた口調で言った。

「……本当にあいつはこれを今やつてんだな？」

「ええ、やつてるわよ」

垣根の低い声にも何事にもなく答えるとグイッと白衣の襟を捕まれた。

「テメエ！！ふざけんじゃねーぞゴラあ！！それを仕向けたんはてめーら研究員共じゃねーか！！」

掴んだ本人、麦野はこれ以上ないほどの叫び声を芳川に向けた。

「そうね、確かにあの子にこの実験を仕向けたのは私達よ。でもそれを知つた上で受けたあの子もあの子よ」

「っ！テメエ！」

「やめろ、麦野」

ギリギリと齒軋りしながらも芳川を睨みつけてより力強く襟を掴んでいると、垣根に止められた。

「っ！なんで止めんだよ！？」

麦野は荒げて垣根の方を向くが、至って冷静な垣根に苛立って睨みつける。

「まあ待て、確かに仕向けたのはお前達だか、芳川。お前はどっち側だ？仕方なく参加したのか、それとも好意的にやったのか」

そんな麦野を無視して芳川に真意を探るように聞いてきた。垣根の言葉に何か思ったのか麦野はようやく芳川を放した。

「それを聞いてどうするの？」

「答えによつちやあ愉快的なオブジェにするかは俺次第だ。本当のとこ俺に殺させないで欲しいってのが本音だがな。それにお前の性格上、好意的に参加した風に見えないからな」

垣根の言うことに芳川は少し驚いた。

「……………」

麦野は黙ったまま聞いている。

しばらくすると芳川は口を開いた。

「上か関わってちや嫌でもやらなくちゃいけないことってあるのよ
自分に甘いから、と付け足せば垣根は呆れた顔していた。」

「ところでやっぱりもう00001号はいねーのか？唯一、俺らといた00001号は銀時に消されたのか？」

「あなた達も会っていたのね？」

芳川の問いに二人は頷く。

「そう……実験は昨日開始されたけど…彼は殺してなんかいないわ」

「「！！！」」

芳川はそう続けた。二人はビックリしたが少しホッとした顔をする。

「なぜだか知りたい？」

どこかしら顔を緩ませる芳川が二人に聞く。

麦野はチラッと垣根を見るとそれに気付いたのか頷いて

「ああ」

と答えた。

「それはあなたたちのせいでもあるのよ？ほぼあの子が大半だと思うけど」

それを聞いて何となく覚えがある気がしたので苦笑した。

「人間としての意思をもたせちゃったのだからね。それは全妹達にもね」

「…そうか。それを聞いただけで満足だがな」

垣根は満足そうに笑った。

(っーかあれ？私、空気じゃね？)

麦野も笑っていたが若干、微妙な立場に顔を引き曇らしていた。

「だけど、実験は終わらない」

「「は？」」

だが、芳川の一言に二人は声が重なった。

「結果はどうであれ、最初っから中止になるのは何かと問題なのよ」

更に芳川は続ける。

「つまり実験中に何かしらのアクセシデントがない限りね」

「例えば？」

今まであまり喋っていなかった麦野が口を開く。

「例えば第一位が負けるとかね」

それに芳川はとんでもない答えを返した。

「無理すぎでしょ」

「あら？銀時は手は打ってるらしいわよ。時間かかるみたいだけど」

空笑いしかでてこない麦野に平然とした風に言った。

「それは俺らがやるってのは？」

黙っていた垣根がそう言ったのを麦野は「え？その方向でいくの？」と驚いている。

「ありだと思っけどあまり大打撃を受けると思わないわ。それに垣根君、あなたにもレベル6になれる素質はあるのよ？」

「……興味ねえな」

レベル6なんて言葉を聞いても呆れるだけで面倒くさそうに答えた。

「ふふっあなたもあの子も似てるわね」

「一番嬉しくねえな」

その態度に芳川は笑っただけだった。

「それじゃあ…他の方法は？」

麦野が改めて聞く。

「そうね……一番中止になる方法は無能力者に負けるってところかしらね」

ありえないけどと芳川は微妙な顔した。

「ちっ…せめて銀時が考えることさえわかりればな」

「あの野郎、メールも電話もシカトしやがる…」

垣根は頭を抱え、麦野は思い出してまた苛立ちだした。

(私からかければ出るのだろうけど、まだ段階が早過ぎる)

芳川はまだ早いと重い、このことは口に出さないようにした。

「仕方ね」。殺してねってだけでもわかったんだ。おい麦野、出てから考えようや」

名前を呼ばれて、垣根に「はいはい」と返事した。

「でも、彼の精神が壊れる前にはなんとかしてほしいわ。たぶんもたなくなってくるから」

「人任せかよ……。つたく、そんなときは意地でも止めてやるよ」

あまりの言い分のため息がつきそうになったが、答えるだけ答えて麦野とともに研究所から出ていこうとしたが、何かを思い出してまた芳川のほうに振り向く。

「そつえば、芳川。」 白夜叉” ってなんだ？」

それには麦野もハッした顔をする。

だが、芳川は

「それはわからない」

とだけ言った。

それに対して「ふーん」と相槌打った。

「まあいや。んじゃ俺らは行くは」

「じゃあな」

そうして二人は研究所を出ていった。

「”白夜叉”ねえ……」

芳川も初めて聞く単語に首を捻らせる。

そしてまた紙のほうをみる

白夜叉覚醒。

一体これは何なのか。

「……………」

ただ言えることは”良いこと”ではないのは確かだろうと確信した。

「……………でも気にはなるわね」

やはり触れてはならないのだろうと思うほど気になる芳川は携帯を開き、ある人物に電話をかける。

あの三人に最も関わりある人物なら何か知っているのではないかと

重い、その番号に発信した。

そして何コールかしたあと、『もしもし』と聞こえてきた。

「久しぶりね……ちょっとあなたに聞きたいことがあるんだけど」

『よお元気か？あいつらはどうしてる？ってか用件はなんだ？』

電話越しに聞こえる懐かしい声にクスツと笑って「ええ。あの子らも元気よ」と伝え、すぐに真剣な顔をして本題に入った。

「……あなたなら知ってると思ってるね」

『そうか、そりゃあよかった。それにしても、随分歯切れ悪いな。』

…厄介な事じゃねーだろうな』

男の方も嬉しそうにしてたが、芳川の歯切れの悪さに声を低くする。

「あの子……銀時の中に眠っている白夜又ってどういふこと？」

それを聞いた男は

『……………』

何も話さなかった。

「……そんなに言えない事？それとも知らないとか？」

芳川は沈黙に耐え切れずに聞き出した。だが、

『言っておくが……お前らは知らないほうがいい。それがお前らのためだからな』

そういつて一方的に切ってしまった。

「……………」

パターンと携帯を閉じてしばらく考えていたが、知ってる男でさえそう言ってきたのだからよっぽどの事なのだろうと思っていた。

芳川はハア…とため息をついて

「まずは実験ね……………」

と後回しにした。

入学式も終えて、あのルームメイトの魔の手を退けて、御坂美琴はまたいつもの公園に来ていた。

そして考えることは自分を助けた第一位。

麦野から話を聞いて興味が沸いているのだろう。そしてまだ見ぬ、

一つ違いな順位だけなのに圧倒的な差がある第二位にも。

「あいつよりも、まさか第一位と二位にこんなにも興味がわくなんてね……」

あのすべての異能力を打ち消す右手を持つ少年を浮かびながらも苦笑した。

それにしてもどうにかして会ってみたいと思っていると、ふと気づいた。

「沈利の番号聞いてて良かった」

この前に麦野と話しているときに番号を交換していたの思いだしてすぐにかけてみた。

「ん？」

麦野と垣根はまずどうすべきか考えながら歩いていると携帯が鳴った。

「お前じゃねーか」

垣根がそう言つと携帯を取り出すと

「あ、美琴じゃん」

この前会つた美琴からかかつてきた事に少し嬉しそうに出た。垣根は聞いた時ある名前に思い出そうとする。

『もしもし、沈利？』

「はいはい、沈利だにゃーん、どうしたのかなー？」

そしていつもの口調で対応する。

『沈利達の事もっと知りたいし、三人に会いたいなあ、なんて思つて』

なんだか恥ずかしそうな美琴の声に麦野はかわいいなあと思いつつ、三人という言葉に首を傾げる。

「三人？」

美琴にそう聞き返すとすぐに返ってきた。

『うん、坂田銀時もそうだけど第二位にも会つてみたい』

そのことになるほどねつと納得したが、状況が状況のため複雑そうな顔をする。

「あー、銀時は今無理だけど第二位は大丈夫よ」

いきなり自分の事を言われて垣根はキョトンとしたが横槍はしない。

『わかった。今あの公園にいるんだけど、来てくれない？』

話の流れから何となく予想していた麦野は少し考えたが、すぐに返した。

「そう、今から行くわ」

『わかった』

そう聞こえてくるとプツツと切れた音がした。

「おい」

電話が終わったのをみて垣根は声をかける。

「何？」

麦野はフウと息をついて真剣な顔で反応する。

「誰だ今の？てか何で俺やアイツがでてる？」

垣根は何故、自分と銀時の話題がでてくるのがわからなかった。

「この前仲良くなってね。あんたなら聞けばわかるわよ？」 御坂

”美琴って子よ”

麦野は御坂を大きく強調して説明した。

「御坂…？ってまさか!？」

垣根は漸く気がついて驚愕した。

「ええ。私達が会ったクローンの”オリジナル”よ」

「なんつータイミングだよオイ……」

電話をかけてきたのが第三位の超電磁砲本人だとわかって頭をガシガシと掻き乱した。

「いずれ覚悟は決めないといけないんだがらグジグジ考えてる暇もないでしょ。それにあんたも行くでしょ？」

麦野の言ってることは確かだ。考えている猶予などあまりない。

垣根は黙って頷くしかなかった。そして面倒くさそうにフアサッと白い翼を広げてガシッと麦野の腕を掴んで引き寄せる。

「え!?!ちよつと!?!」

いきなりの行動に麦野は驚いてるがそんなのは関係ない。

「人目なんざ気にしねえ。さっさと行くぞ」

フワッとそのまま地面から離れはじめた後は一気に加速して飛び上がる。

「ちよつ……いきなり飛ぶなああああああ!?!?!?!」

麦野は抱き抱えられたまま怒鳴り散らした。

場所は戻って公園。

美琴はぼーっとベンチに座ってこれから来る麦野を待っている。すると、上空から何やらこちらに近づいてくるのが見えた。それを見て大きく目を見開いた。

「人……？」

人間が背中に翼広げて空を飛んでる。いくら学園都市であってもこんな光景は見たことがなかった。

それはだんだん近づいてくることに低空飛行になり、公園へと着地した。

「よお。初めましてだな、第三位」

啞然としている美琴に近づいて声をかける垣根。

降りてから何やらブツブツと呟いている麦野は無視した。

「もしかして第二位？」

声をかけられて正気に戻って垣根に聞いた。

すぐに返事はもらえた。

「ああ、俺が第二位で未元物質の垣根帝督だ。よろしくな超電磁砲」
美琴はそれを聞いて少し顔を歪めた。
知っているのなら麦野に聞いているはずだと確信している。これで名前を呼ばない男は三人目。

どっかの白髪にはクソガキ、どっかの無能力者にはビリビリ。そしてこのチンピラには超電磁砲ときたもんだ。さすがに不満は顔にでる。

「……御坂美琴って名前があるんだけど」

「あ？んなこたあ知ってるが？」

なんとなく美琴を見て垣根はわかったようにニヤニヤして当然のように答える。

バチバチと髪の毛から帯電させる美琴を見た麦野は話を変える。

「まあまあ。ていとくんはそれぐらいにしなさいって。それにしても丁度良かったわ、こっちも話すことがあったしね」

こちらの本題に入りそうな麦野に垣根も表情を変える。

「？」

こちらとしては興味があつて会ってみたいだけだったが、あつちにはどつやら話があることに美琴は首を傾けながらも聞く体制を取る。

「お前に見せたいものがある」

そう言った垣根は封筒を渡す。

受けとつて中身を見た美琴の反応はやはり二人にとって想定内だった。

美琴は震えながらも二人を見た。「これはどういうことだ？」とでも言うように。

それに答えたのは麦野だった。

「私もそれ見せられた時、かなり驚いたわ。まさかアイツがこんなことしてるなんてね」

それに続く垣根。

「まっ俺らもクローン一人と接触しちまってるわけだし、それは本
当の事だ」

美琴にとってはこんな恐ろしい事が実際起きてしまったのだ。震えが止まらない。それに声も出なかった。
「だけど」

そんな時、麦野が言葉を発した。

「一人も殺してない」

「……………え？」

震えていたため思わず上擦ってしまった。

「殺してないのに実験は行われている。どうしてだと思っ？」

殺してない？それなのに実験が続いてる？いくら第三位で恐怖に呑まれてる以上、頭がうまく回らない。

美琴が横に首を振る。

「アイツは妹達を救うには実験に参加しなければいけない理由があるのよ」

それはアイツに聞かないとわからないけど、とどこか呆れたように言った。

「いずれ銀時だって壊れる。その前に止めなきゃならねえ」

そして確信持って垣根は言う。

「まっ無能力者に負けるってのが一番効果的らしいが……」

空笑いの垣根だが美琴には心当たりがあるらしい。

第一位を止める事ができる無能力者を。

ただどこれは自分の問題なのだ。検討はついている。こうなったのは昔DNAを提供した当事者だから。

それをあの少年を巻き込ませたくない気持ちが大きい。

「なあ」

そんな事を思っていると垣根から声がかかる。

「俺達を信じてんなら、協力してくんねーか？」

その二人の真剣な顔に嘘をついてると思えなかった。だが、今の自分には即答できる状態ではなかった。

「少し……考えさせて……」

なんとか振り絞って声をだすと垣根は頷き、

「……協力してくれんなら麦野に連絡してくれ」

そう伝えた。

コクンと頷いてフラフラとベンチから立ち上がって歩いていく。

「……送ってこうか？」

麦野が心配そうにするが、

「今は……一人で歩きたい……」

一回立ち止まってそれを拒否し、また歩きはじめた。二人は美琴が歩いていくのを黙って見届けた。

女子寮に住んでいる美琴には門限がある。外はもうつす暗く、そろそろその時間になりそうな時間帯である。

早く帰らないとあの怖い寮官が立ちほだかるだろうと思いつつも足取りは重かった。

そんなときによぎったのは銀時の自分を追い詰めたときの哀しい目と表情。

去って行くときの背中も哀しい感じがした。

美琴はやっぱり二人が言っていたのを信じたいと思いつい決意を表す。

だが、それは二人とは違う決意。

「これは私の責任であり、義務なのよ！あの人達には迷惑かけたくない」

だったら

「私一人だけでも第一位を止める！」

そう言っつてまずは寮へと向かった。

それが新たなる暴走を招くことを知らずに。

くチャラ男とヤンデレとビリビリは考えることは同じく（後書き）

この話が長くなってしまった（笑）

電話の男は……わかりますね？（笑）

くチンピラなほど怒ると目茶苦茶怖いく(前書き)

あの方が激怒します。

くチンピラなほど怒ると目茶苦茶怖い

先程、芳川から電話が入って対処していた男、今研究所で木原数多はデスクに座って頭を抱えていた。

「芳川があんな電話よこすってこたあ、あっちにもやっぱ届いてたのかよ」

ハアとため息をついてうなだれる。

「あのガキ共も知ってるってことだよな」

上直々に送られてきたものは暗部だけかと思っていた木原はチツと舌打ちした。

ガキ共……つまり垣根と麦野の事。木原はあの二人が暗部に堕ちてきているのは知っている。

小組織『スクール』のリーダー垣根帝督に、『アイテム』のリーダー麦野沈利。

この二人が何故暗部に堕ちてきたのかもわかる。

何せ『獵犬部隊』のリーダーやっている自分もそうだからだ。

すべてはあの銀時のため。

垣根や麦野以上に苦しんできた少年。

本当は二人にも堕ちてきてほしくなかった。自分だけでいいと思った。

『何言っつてやがる。どんな闇に堕ちようが埋もれようが関係ねえ。』

こんな俺達でも光の世界を十分に味わってんだ、あんたには感謝してんだよ』

『それに私達以上に闇を持つてるわけなんですよ？アイツは。だったら、いつでもあつちにいられるように護ってやらないと』

『『^{テメエ}自分どんなになっても護ってやる』』

それが二人の決心だった。

だが、その二人は銀時の正体を知らない。知っているのは、

木原、当の本人、そして学園都市に君臨している統括理事長の三人のみ。

「くそつたれが、あんなもん見せられたら信じるしかねえだろうが

……」

木原は真実を知ってしまい、さらに深く頭を抱えた。

「一方通行に憑依したってやつが銀時そのものってかあ？」

そして芳川の前に行われたやりとりを思い出す。

不気味にそびえ立つ統括理事会の本部と言える窓のないビル。都市伝説とされているが実際にしていた。

呼び出された木原は案内人に連れられてそこにいる。

目の前にいるのは大きなビーカーの中にある液体に入っていて、逆さまに浮かんでいた。

アレイスター「クロウリー」。

男が女かわからない姿をしている。

そのトップが木原の目の前にいる。

「で、何の用ですかあ？アレイスター。こちらそんな暇じゃねえんですけど」

面倒くさそうにして木原は連れて来させたことを聞く。

「ふむ、今回はその例の実験についてとその坂田銀時についてだ」

アレイスターは説明する。

「絶対能力者進化計画だろ。それと銀時が何だつて？」

「その実験はレベル6にさせるものだけではないということだよ」

「……………白夜又つてんのが関係してんのか」

レベル6の為だけでないのであればあとはそれしかないと思
った。

「そうだ。それでわかったんだが、実に彼は興味深いよ……その白夜叉と言う実体をね」

「……………」

木原は黙った。やはりアレイスターは知っている。

アレイスターもそれを読み取るのはたやすい事。

「親である君が知っててもおかしくはないだろうと思ってね。見てみるかい？君が知らない彼が送ってきた壮絶な”前世”を」

「……………は？」

前世？何言つてやがるんだこいつは？とでも口に出そうなほど間抜けな顔をしてしまった。

そうしているうちにアレイスターの周りに写っていた学園都市の全区の映像が消え、新たに映しだされる。

「なっ……………!？」

彼は銀時の全てを見て絶句した。

「糞が。何だっつてんだよ！俺に後はどうしろっつーんだよ……」

そして今現在、それを思いだしていたらいつの間にか自分は苦虫でも潰したような顔をしていた。

映し出された銀髪の少年が男に拾われ、ある二人の少年に出会ったこと。

そして男との別れ、得体の知れない化け物をズバズバと切り捨てていく成長した少年。

銀色の髪に血を浴び、戦場を駆ける姿はまさしく”夜叉”だった。

その男の名は”坂田銀時”。

アレキスターが見せたのはここまでだ。白夜叉の部分だけを映したのだろう。

木原は映像が消えていくまで銀時と言う男を見逃さなかった。

アレキスターは言った。

『実に面白い話じゃないか。大人となった彼はもう亡くならし
いが、その魂が次元を越えて憑依してしまうとは』

『そもそもパラレルワールドが存在するのも摩訶不思議な話じゃな
いか』

『私はもう実験なんてものはほんの一部でしか考えてない。第一候
補は彼そのものなんだ』^{メイン}

『“一方通行”となった”坂田銀時”がこの世界でどんな物語を見せてくれるのか楽しみでしかたないのだよ』

非科学にもほどがある。アレイスターの言葉が木原を苛立たせる。

チツと舌打ちして頭を切り替える。

「まずは実験だ」

さっきまでいたところでモニターの映像を見ていればわかる。奴は一人とも殺していない。そして事が大きくなる前にと垣根達も動いている。そして超電磁砲も。

「まず問題なのは超電磁砲か……」

単独で説得しようとしているのだからそれが木原を悩ませる。その結果、

「俺も……出向くか」

銀時達がいるであろう学区に足を向けることにした。そしてニヤリと笑って

「アイツにサプライズ起こしてやっかね。起きるとしたら昼ぐらいだろうな」

楽しそうに自分の使っている部屋へと向かった。

「ハア……」

まず目を覚めましてため息一つ。銀時は時計を見ると昼の12時を過ぎていた。

昨日の実験で一気に2、300人程行ったためまだ疲れが残っている。

そこへマナーモードしていた携帯が震え始める。

画面には非通知と出ていた。

銀時は無視しようとしたがいつまでも切れそうになかったため、仕方なく出てやった。

「もしもしイ？」

『よお、元気かな？銀時くん？』

不機嫌になりながらも応答して相手の声を聞いた瞬間、驚愕して思わず大声で叫んでしまった。

「木イイイ原くウウウン!？」

『オイオイ。あんま叫ぶなや。耳いかれちまうは』

まさかの木原にただ啞然とするしかなかった。

『オイ、銀時イ?』

木原からの声にハツとして答える。

「あ、あア……」

『ククツ非通知したかいがあつたなあ。おもしれえ、おもしれえ。お前の顔が想像できるは』

くつくつと笑いを堪えて『非通知で正解だったな』などと吐かしている。

「何なんですかア?いきなり電話よこしやがってエ……ふざけただけじゃねエンだろ?」

木原のふざけた行動に呆れはしたが、冷静を保ち、何故急に電話したかを聞く。

『まっおふざけはそこまでにしてっ』

そこまで言っで一息つく。

『テメエの行動はすではれてる。何でわかるか?』

「……………俺がよっぱど貴重なのか」

行動がばれる事は予想していたのであまり動じない。

『それもあるがな。一番の理由は理事長様はお前の元々の存在を知ってる。前の世界で何をやってたかをな……俺もな』

「!?何を言つて、やがんだア？」

それを聞いた瞬間、紅い眼が揺れた。

『攘夷戦争。お前がいた世界で起きた戦争だろ？あんな化け物相手を斬つてく本物の銀時見て、ビビったは』

「やめる」

木原は震える銀時を声を聞いても止めない。

『その容姿で斬りまくつて、伝説の白夜叉と呼ばれた。それが teme なんだろ？』

「や、め、ろ」

『味方からも敵からも化け物扱いされて、それでも teme は戦つた』

『人としていられねえなら化け物として生きてくつてかあ？』

銀時はもう聞きたくなく、大声で叫んだ。

「黙れよ…やめるよ…それを知つて teme はどう思つたんだよ!! 前世も今世もこんな化け物で!! あア…そうだよ! あの時代にあの容姿で親からも人として見てくれねエまま捨てられて…!! やつと信頼できる先生や奴らと出会えたと思つたらこれだ! 大人になつたつて変わりやしねエ。もオ救いようがねエンだよオオオオ!!!! ククツクハハハハハハ! 木イイイ原くんよオ、幻滅したか? こんな化け物拾うんじゃない、気色ワリイモン背負わせんじゃないエ

つてよオ!!!」

声がガラガラになっても叫ぶのは止めなかった、いや止めれなかった。

「テメエ本気で言ってるのか？」

「……あ？」

黙って聞いてた木原はようやく口を開く。怒気を含めた声で。

「昔、俺に向かってこう言ったよな。大切なもの守れるような、そんなテメーの魂守れるようなそんな人間になりたいってよお。それなのに今のテメーは何だ？くだらねえ戯れ事吐かして、過去に捕われて、勝手に一人で抱え込んだただのクズ野郎じゃねえか。そんな野郎が何かを守れると思ってるのか!？」

今度は木原が大声で怒鳴った。

「テメエは馬鹿だ。俺やイツら二人がそんなことでテメエを捨てると思ってたのか? いいか? 白夜叉だったからどうした、化け物だからなんだ、俺達はそんなもん差別なんかしねえ。過去を忘れるとも言わねえ。一人で抱えるな。辛かったら俺達が支えてやる。背負い切れなかった分、俺達が補ってやる。『白夜叉』だろうが、『一方通行』だろうが、テメエはテメエだ。だからよお、守りてえもんが今あるんだろ? だったら!!! 言った事實き通してテメエの魂、俺達に見せてみるや!!!」

木原は今までにないくらいの怒声を銀時に放った。

これほど怒った声を聞いたのは始めてだろうか。
落ち着いたのか普段の声で話した。

『俺はなあ、後悔なんざしてねえ。俺自身が望んでテーマら拾ったんだ。途中で捨てたりするわけねーだろうが。最後まで面倒を見てやる。ガキはガキらしく親に頼って甘えてやがれっつー話だ』

普段の声のはずなのになんとか優しく感じた銀時は

「アア……ありがとよオ……」

涙が出そうなのを堪えながら答えた。

そして電話を切って

「クソツタレが……勝手に親面してンじゃねエよ」

吹っ切れた顔で呟いた。

そして今日の実験の時を待つのみ……と思ったが、インターホンが鳴った。

「ンだア？つたくめんどくせエな」

そう言いながら怠そうに玄関に向かい、ドアを開けると

「こんにちは、とミサカはすんなりと出て来てくれた銀時に挨拶をします」

「いや、なんで??？」

00001号だるうみサカがいた。

くチンピラなほど怒ると目茶苦茶怖い（後書き）

少し前の話とか軽くなおしてました。

第五位は心理掌握の食鋒さんだったことに今更気づきましたよ……

天井くん放置ですね……そのうち書きます（笑）

く厄介事って一つじゃ収まらないく(前書き)

はつきりいって時期的にバラバラでやってってます。
んでもって急展開だったり…

「厄介事って一つじゃ収まらない」

「とりあえず、お前000001号か？」

いきなりここに尋ねてきたミサカに驚きながらも検体番号を聞く。

「正解です、と当ててくれた事に嬉しくなります」

頷きながら答えてくれた000001号に銀時は更に聞く。

「何か用か？つーかよくわかったな。俺ンとこ」

「芳川から教えてもらったので。用件は悪いニュースです、とミサカは苦い顔しながら答えます」

その悪いニュースと聞いて銀時もしわを寄せる。

「何が起きた？」

「天井亜雄が上位個体を連れて逃走しました」

「……………はア!？」

000001号が答えたと同時に天井の逃走と聞いて大声を上げた。

「部屋に縛りつけていたハズだったんですが、甘かったようです。芳川とミサカ達をうまく盗んで逃げたようです。と芳川やミサカ達の不甲斐なさを戒めます」

「次から次へと問題ばかり持つてきやがってエ……」
そして苦い顔して説明する00001号に嫌気が差した銀時は彼女が発した「上位個体」という存在が気になった。

「上位個体ってのは一体何なんだよ？」

それに対しても彼女は説明し始める。

「上位個体：正確には検体番号20001号。実験の最終ロットとして生まれた固体で、打ち止め（ラストオーダー）と呼ばれる固体です」ピクリと銀時は反応した。そして何かがおかしいと感じた。

「オイ、実験達成てのは俺がお前ら」20000人”ジャストを殺すことで絶対能力者になるんじゃないのかよ。何でもう一人製造されてんだよ？」

そう、銀時が20000人を殺す予定の実験なのだ。なのに20001人というのが疑問で仕方がないのだ。

「表沙汰ではそうでしょうねとミサカは納得します。現に彼女は実験に必要な個体なのでから」

「ハア？」

訳が解らなかった。実験に関わらないのなら何故？とそこまで考えて頭をガシガシと掻き回した。

それを見て苦笑しながら00001号を続ける。

「ミサカネットワーク。あなたはもう知ってますよね？と解りきった質問をしてみます」

「ああ…芳川から聞いたよ」

たしかに解りきってる事だと思い、頷いた。

「ですが…実験に休みはありません、と状況関係なく言いのけます」

そして極普通に話す00001号に「それはそオだろうな…」と呟いた。

そして何となしに携帯を取り出して何かをふと思い出した。

（あれ？何か見落としあったような……芳川の前に誰かから電話やメールきたような？）

そして着信履歴と受信箱を見て固まり、唐突に冷や汗がどっと流れ出した。

（やべエ……完全に俺死んだ…）

「どうかしたんですか？と携帯を見た後そのまま動かない銀時を少し心配しながらも声をかけます」

00001号の声に漸く反応して

「いや……何でもないです…ハイ」

ぎこちなく答えた。さも不思議がっていた彼女を「いいから行くぞ」と顔を真っ青にしながら外に出ることを促す。

「どいへん？」

「天井が何をするかは知らねエが、まだ時間あんだろ？実験だつてあるしよ」

ちよつと付き合えと付け足して、手を引つ張った。

00001号の顔が赤くなっているのを気付かずに。

銀時が思うのはただ一つ。

(麦野には会いませんように麦野には会いませんように……………)

麦野からの電話、メールを知らず知らず無視していたのだ。あの麦野の性格上、穏やかに済ますなんてできるはずがない。

銀時は心の中で、会わないことを復唱しながら祈っていた。

だが虚しくも、それは敵わなかった。

無残にも会つてしまふのが現実だった。

暫く歩いていると、それはいた。

だが、麦野ではない。

「真昼間から実験再開か？銀時？」

「うっわ……………まじかよ……………」

現れた人物に顔を歪めた。00001号も声を出していないが、銀時と同じような顔をした。

そこにいるのはやっぱり知っている男だ。

「クローンもそんな顔するってこたあ、お前000001号だな」

その男はそう断言した。それに000001号は答えた。
そこには真っ直ぐに真剣な顔で見つめた

「垣根帝督……………」

麦野の次に会いたくなかった垣根帝督がいた。

く厄介事って一つじゃ収まらないく（後書き）

打ち止め「ミサカの出番は次からだよ！ってミサカはミサカは次回に回ったことを憤慨しつつも、今度こそ出番がある事を宣言してみたり！」

ってこと今回は短くなりましたが終わりです。

次回は一応長くなる予定です。

「悪党に常識は通用しない」（前書き）

ていつくんがでしゃばります。

「悪党に常識は通用しない」

垣根はいつもどおり外を出歩いてきた。ここ最近仕事はない。たがらここ2、3日は実験のこと考えていた。そして今日でできたのは本当に良かった。

何せ、その原因が目の前にいるのだ。

しかも二人揃って。

「よお。会いたかったぜ、クソ野郎」

垣根は悪戯つぽく笑った。銀時は更にげんなりとしてぼったり会った垣根の冒頭の言葉が幻想であることを信じながら惚けだした。

「何の用ですかア？こっちはそんな暇じゃないんだよなア」

「そりゃあ知ってるぜ？これから実験でテメエが何をするかをな」
現実には甘くなかった。垣根の言葉で銀時が信じた幻想は砕けちった。

「それに麦野も知ってるし、第三位もこの事は知ってる。まあ俺達が教えたんだがな」

「なんだと……っ！？」

第三位が知っていると聞いた瞬間、またもや頭が痛みだした。00001号もオリジナルである超電磁砲に知られていることに驚いている。

「クソっ…余計な事しやがって！」

「余計な事だあ？テメエなめてんのか？」

冷や汗をかいて頭を押さえている銀時を気にせず、垣根は雰囲気を変えて話し出した。

「これは超電磁砲が一番関わってるんだ。知ってなくちゃいけねえ。なのにテメエは、何で一人で抱えこもうとしてるんだよ」

少なからずとも怒ってる雰囲気をだす垣根に銀時は頭痛に堪えながらも答えた。

「そんな事わかってンだよ…：さっき木原から電話きてな…：それで俺はすっきりしたハズなんだよ」

「何？」

垣根は驚いた。木原が銀時に電話をしたことを。そしてそれを理解した。

(やっぱりあいつも動きだしたか…)

そう判断した。

「だけだよオ。何でだろうな？」

また銀時が話し出していたので聞く体制をとる。

「その名前を聞くと頭が痛エンだよ…！俺はあいつを一回傷つけち

まってるだけこんなにも俺は辛くなっちまってんだよ!!」

それを聞いてようやく垣根、そして00001号は銀時の容態に気づいた。

「！オイ!!」

尋常じゃない程の汗を流して、頭を押さえているのをみて近づこうとしたが、

「く、来るンじゃねエ!!!!」

ダン、と足に力を入れ、地面を蹴り上げてその場が一瞬にして消え去った。

「クソっ！ アイツの一番の爆弾は超電磁砲だったんじゃねえか!!」

垣根は自分のした事を後悔した。良かれと思った事が彼を追い詰めた。

「00001号」

「……はい」

「……頼みがある」

「何でしょうか」

垣根は00001号に頼みたい事があった。

「そのミサカネットワークだったか？それでアイツ探したりできねえか？」

00001号は頷いた。

「このミサカはネットワーク自体切断されていますが…芳川に頼めば何とかなるかもしれませんと今現状を告げます」

「そうか。そつち頼んだは」

垣根は銀時探しを彼女に頼んだ。

「あなたは…」

「どうするんですか？」と言う前に

「俺は……超電磁砲んところに行く」

垣根はそう言い、反応を見る前に翼を広げて飛びだした。

「原子崩しには言わなくていいんですか……」

聞こえてはいなくても00001号は呟いていた。

「ハア…………ハア」

10歳くらいの小さな少女は毛布一枚身に纏い、都市中を走り回っていた。まるで何かから逃げるように。

「早く！あの人に…………あの人達に会わなきゃってミサカはミサカは…………」

語尾に「ミサカ」とつける少女は必死に走った。

がむしゃらに走っているため、前に人がいるのが気づかなかった。

そして、ドンとぶつかり、ドテツと尻から倒れこんだ。

「いたたた…………」

「ちよつと大丈夫？」

そこにいたのは

「あなたは原子崩し？ってミサカはミサカは尋ねてみる」

「何で知ってんの？」

麦野だった。

「っていうかミサカって…………」

「うん、あなたの思ったとおりミサカもクローンなの。検体番号20001号で打ち止めって言うんだよってミサカはミサカは説明してみる」

麦野は驚いていた。こんな小さな子まで製造されているとは思わなかった。

そしてそれが偶然、目の前にいる。

「それで私にどうしろっていうのよ…」

ため息をついていると、打ち止めが声をだした。

「あのね、あの人達の所に連れてってほしいなってミサカはミサカはお願いしてみたり」

「どうしてよ？」

麦野が聞き出すと、打ち止めが知っている経路を話し出した。

天井という男が自分を連れ出して逃走し、その男からも自分が逃げ出した事も。

そしてあつちでも問題が起きた事。銀時と00001号が垣根と接触して、垣根が放った爆弾”超電磁砲”を聞いて銀時が逃走して行方不明。現在、全ての妹達がミサカネットワークによるテレパシーで伝わり、捜索中。

垣根は超電磁砲である美琴に接触するために常盤台中に向かっていく事を。

「……私がちよつとの間知らないうちにそんなことになってるのね」
麦野は驚愕というよりも怒りの方が強かった。

「あとね、ミサカには時間が余りないのでってミサカはミサカは告げてみる」

「どついうこと？」

打ち止めの時間がないという言葉に引つ掛かった。

「ミサカの頭の中にはウイルスが打ち込まれていてね、何だかグラグラするの。だからこうしているうちに早くあの人をあの人達を止めなきゃいけないのってミサカはミサカは……」

「そんな必要はないさ」

彼女自身の事を必死に話している途中、誰かが遮った。

「あんた誰よ？……打ち止め？」

いきなり現れた男に麦野は聞こうとしたが、打ち止めが服を引つ張ってブルブル震えているのに気づいた。

「何、そこにいる上位個体を引き渡せば何もしない」

男の要求は打ち止め。

つまりこの男が

「あんたが天井か？」

「そうだ」

天井だと判断した。

「……………（どうして、どうしてこうなっちゃったのかな）」
美琴は授業には集中できずにいた。

『君の能力で人々を救えるかもしれない。だから、協力してくれな
いか？』

『うん！』

まだ小学生だった美琴は研究員達の言葉を信じていた。

だから協力してDNAを提供した。

それがまさかこんなことになるうとは本当に予想していなかった。

それがあの男を苦しめてしまった。

第一位だからこの実験に選ばれた坂田銀時。

「……………誰か助けてよ！」

美琴は泣きそうになりながらも誰にも聞こえないように小声で呟いた。

その時、窓側にいた一人の生徒が先生に向けていきなり叫んだ。

「先生！校門の所に誰かいます！」

それは先生や生徒、そして美琴も反応した。

窓側に集まって見てみると、驚愕した。そして勢いよく教室を飛び出した。

「ちよっ！御坂さん！待ちなさい！！」

先生の制止の声ももろともせず。

走って、走って、漸く校門に辿り着くと、茶髪の男がいた。ホストじみている尚且つ自分より一つ上に立つ男。

「会いに来たぜ、超電磁砲」

垣根は美琴が走ってきたのを爽快に見て言った。

「……………何しに来たのよ。未元物質」

息を切らし、前にいる垣根を睨みつけた。

「お前がなんか勝手な事する前に止めに来たんだよ。俺の予感じゃ、

責任感じて一人で銀時を止めようとしてんじゃないかってな」

「……………」

垣根がそう言って美琴をみるとやはり驚愕した顔。

大正解か、と思いそのまま続ける。

「お前は例え責任感じたとしても、首を突っ込むんじゃないやねえ。裏を知らねえお前が足を簡単に踏み入れるような場所じゃねーんだよ」

「……………なんでよ」

「あ？」

聞いていた美琴はプルプルと震えながら声をだした。

「確かに裏とかそんなの知らない。だけど！私だって超能力者なんだから、あんたらの力になれる事だってある！！」

垣根は飽きれ顔で言った。

「何を言ってるやがる、同じ超能力者だから力になれる？そんな甘ったるいモンじゃねえだろ、俺達は」

「それに例えお前を連れてったって悪化するだけだ。超電磁砲は銀時にとっては爆弾なんだよ」

「……………！？」

「俺は知らないが、あいつはお前を傷つけたことに苦しんでんだ、そこにお前がいたら……………手がつけられなくなる」

「お前じゃあ銀時は救えねえ」

がくつと銀時と会った時のように膝から崩れ落ちた。垣根はそれを見て更に冷たく言い放つ。

「所詮、一方通行と超電磁砲っただけの関係であってそれ以上も以下もありやしねえよ」

「そこでテメエの無力さに、絶望でもしてろよ」

そう言っつて飛びもせず歩きだした。

「う、うわあああああああ！……！！」

後ろで泣き叫ぶのを聞きながら。だが、ピタッと立ち止まった。

「ああ、一つ言い忘れてたは」

そして泣いている美琴のほうに振り向いた。

「だからこの俺がテメエの願い叶えてやる」

「……え？」

聞いた瞬間、泣くの止めて垣根の方へと顔を上げる。

「俺だつて常識っつーもんは弁えてる。無謀だつてな。だが、俺の能力”未元物質”にその常識は通用しねえ」

そう言っつたあとその場が消えた。

常盤台から離れたあとすぐに00001号に会った。

「銀時は見つかったか？」

「はい。一人のミサカが見つけて接触を計る所です、とミサカは答えます」

「そうか急がねえとな」

場所は？と続けると00001号は答える。

「場所は――」

「クッソ……何だってこんな場所に来たってんだよ……」

銀時が来た場所は頭浮かんだ実験の最後の場所。

十七学区の操車場に来ていた。

「……あつたま痛エよ ……チクシヨウ。俺ってよっほど脆いらしいな」

頭を押さえて自分の脆さに苦笑した。

そこにもう一つの声。

「見つけましたよ坂田銀時。とミサカが発見できたことを喜びます」

「……………オメエは」

「このミサカとは初めてですね。改めまして、ミサカ10032号ですと自己紹介します」

銀時といるのは最終目的であるミサカ10032号だった。

だが、それどこではなかった。銀時の精神状態は限界に近かった。

にも関わらず、10032号は近づいて来る。

「来るな……………来たら、俺は制御できねエ」

反射は切りたくとも、精神がぐちゃぐちゃで収まりがつかない。

「いいんですよ」

「何が……………いいン……………だよ」

10032号の言う事が分からず、途切れ途切れに聞く。

「ミサカ達はもう人間だと充分に貴方達に教われましたので」

微笑みながら近寄る。

「だからそんな貴方の苦しむ姿は見たくありませんとミサカは自分の気持ちをぶつけます」

そして目の前に来て銀時に触れようとする。

「やめろ……………」

「ミサカ達のためにこんな苦しんでいるのはミサカは…私は望んでいません。」

あなたのおかげで私達は人間になれました。人を好きになれました……そう、みんなあなたの事が好きなんですよ？

あなたが私達を思ってくれているように、私達もあなたには笑っていてもらいたいです、幸せになってもらいたいです。

そのためなら私は坂田銀時のためなら死ねます」

「な、に、を」

「あなたが悔やむことはありません。私が死んでも他の私達はあなたを責めません、憎みもしません。人間として死ねる。それが本能ですから」

そして銀時に抱き着いた。

「!?!」

10032号の身体からはバキバキと嫌な音が立っているがそれで

も離さなかった。

「グッ……貴方は……私が死んでも悔やまないでください……貴方がいたから存在できたんです、だから……感謝してます」

「チツ………クソツ………タレがアアアアアアアアアア！！！」

10032号が感謝したと同時に銀時の方から力を振り絞ってふり解こうとするにも離れなかった。

10032号の身体からは血が吹き出している。それでも彼の身体からは離さない。

そこで違う風が吹き出して漸く離れたのだった。

風かも怪しいほどの現象に彼女は倒れこんだままその先を見た。

「しつこく来てやったぜ、銀時。こっからは俺が相手だ」

垣根と100032号に向かう00001号の姿が見えた。

「悪党に常識は通用しない」(後書き)

次は少しずつバトル要素含んでいきます。

く誰かを救うのに必要なのは力だけじゃないく（前書き）

間が開きましたが、

それぞれの戦いでございます。

「誰かを救うのに必要なのは力だけじゃない」

美琴は垣根が消えていった場所から動けなかった。

垣根の言った言葉。

『だからこの俺がテメエの願い叶えてやる』

つまり垣根が自分の変わりになると言う事。

だが、第一位と二位。結果はわかりたくなくともわかってしまう。

どこまでも無力な自分に腹が立ち、拳を強く握る。

美琴は希望を捨てない。なぜならこの状況を打破できそうな奴を知っている。

右手一本で終わらせてしまえるあの少年がいる事。

巻き込みたくないとは思っていたがそんな場合ではない。

「（まったく、情けない。第三位である私が無能力者に頼るなんて）」

美琴は自重気味に笑う。

だから気づけなかった。後ろにルームメイトである後輩がいることに。

「…………お姉様」

「！黒子！」

ハツとして後ろを振り向くと、心配しているような、どつすればい
いかわからないと言った複雑そうな顔をしている白井黒子「しやくろくし」がいた。

「あはは……………聞きちゃった？」

美琴は罰の悪そうに言つと黒子は頷いた。

「そつ……………」

それだけ言つと自然に空を見上げていた。

「あの……………」

後輩の弱々しい声に反応して視線をそつちに向ける。

「今が第二位ですの？それに……………」

白井の耳に入っていた。一方通行と言つ言葉。

それを伝えようとするまえに美琴が首を振つて止めた。

「終わつたら……………話すから。今はごめんね？」

そつ言つた後、走つて中学校を出て行つた。

白井は追えなかった。自身の能力、空間移動テレポートを使つてしまえば止められたかもしれない。だが、美琴のただならぬ雰囲気雰囲気に追えなかった。ただじつと見つめる事ができなかった。

大能力者（レベル4）であってもそれしか白井にはできなかった。

「あんたが天井ねえ……こんな小さなガキ追っかけて何が面白いのかしらね、このロリペド野郎」

麦野はニヤリと歪めて目の前にいる天井に挑発する。

「あまり私を舐めてもらっては困るな第四位」

それに対して天井もフツと笑って余裕そうな顔をする。

「……わかってんのにそんな余裕ぶっこいてんのがムカつくねえ」

「フフフ、いずれわかる事さ」

どうも不敵に笑う天井が麦野を不快にさせた。

服を握っている打ち止めの奮えが止まらないのを気にかけてつつ、天井を睨みつける。

「何のためにこんな事をした？」

「何のために？それは一方通行を元の居場所に帰すためだよ」

何の躊躇いもなく天井は答える。麦野は眉に皺を寄せる。それに何となく天井の目的を理解し始めた。

そして、更に睨みつける。

「テメエ……」

そんな麦野に対して天井は動じない。

「4月8日午前0時。そのウイルスで上位個体：打ち止めから発せられる上位命令群によって全妹達の暴走。二万ものの武装した妹達に学園都市は襲撃される」

それを聞いた途端、麦野の中で何かはじけそうになる。

「もっとも君達の力でも何もできはしないさ。妹達や打ち止めを殺さなければ止まらない。そうしないと学園都市中にいる人々に沢山の犠牲がでるがな」

ブチリと糸が切れた。

「ふざけんな……ふざけてんじゃねえぞゴラああアアアアアアアアアア！！！！！！」

怒りが頂点にまして麦野が叫ぶ。

「なんでここまでしてコイツらが苦しまなくちゃいけないんだよ！？せつかく人間らしくなれたつてのによお！またテメエらの実験動物にすんのかよ！！コイツらにだって普通の生活だつてできんのにテメエらゴミクス共にそんな道辿らせてたまるかよ！！」

麦野の思いが叫びと共に爆発した。妹達や打ち止めを自分みたいにはさせたくない。真つ当に生きて、真つ当な光の世界で笑っていてほしいそんな願いがあった。

それをこんなところで間違いな道を辿らせては決してならない。そんな願いが。

それはきつちりと近くにいる幼い少女にはきつちりと届いている。

「……………ありがとう」

「ハアハア……………打ち止め？」

打ち止めの言葉に叫び疲れたのか息を切らしながらそちらを見る。

「あのね、10032号があの人、坂田銀時に接触したときに言ったの。あなた達のおかげで人間になれたって。ミサカ達のために苦しんでるのは見たくない、笑っていてほしい、あなたがいたから存在できた。だから感謝してるって」

ネットワークが接続されているため10032号が銀時に言った事を打ち止めや妹達全員知っている。

「だから人間としてあの人のために死ねるなら本能だって。それはミサカ達全員の思い。あなた達三人がいたお陰でミサカ達は変わった。だから」

打ち止めはそこらへんの子供と変わらない笑顔で

「妹達が人を殺す前に」

全力を持って敵を殲滅させようとしたが、キーンと懐かしい音が麦野を妨害した。

「ぐあっ……！」

あの時のように頭を抑える。

「どうした？第四位？私みたいな三下すぐ殺せるだろうに！まったく情けないなあっ！」

思う存分に嘲笑うと打ち止めを担いでどこかへ歩く。

「待ちやがれ……っ！」

無理矢理にでも動こうとするが、どこからか着たのか何人かに武装した連中に囲まれた。

「どこまでもなめたことしやがっでクサレ野郎が…調子乗ってんじやねえぞ！こんなんで私を消せると思ってるんじゃねえぞオラア！」

バシユウウウウウ

出来る限りの能力を使って曖昧なまま固定されている電子を今いる敵に放った。

集団の一部は悲鳴を上げながら吹き飛び、ある者は体ごと消し飛ばされた。

生き残ってるものは目の前の恐怖に怖じけづくも、麦野の精一杯だと思われる状態に怠ることなく銃器を向けて放つ。それはかつて銀時に放ったものと同じだが、威力は強化されている。

だが、それが甘かった。麦野はギリギリながらも能力を使って避け、

手や足を使って放つ。彼女は全身から放つことができる。

「ハアツ！ハアツ！ギャハハハハ！これが原子崩しだ！第四位だ！つけあがってんじゃねえぞ、クソ野郎共！」

残りの武装集団を殲滅するため頭痛というハンデを背負い戦う。打ち止めと天井を追うために。

「くっ！！撃てえ！！！！」

ズガガガガガ

強化された特殊の弾が機関銃がまた発射される。

同じように避けていくが頭痛が酷いのか鈍くなり

「うがあっ！！」

肩や腕やら徐々に掠っていき次第には

「ぐっ……」

足にも当たってよろける。それを狙ってか、「死ねえ！」と叫び声を上げて撃ってくる。

「冗談じゃない……こいつらぶち殺すまでは……打ち止め助けるまでは……！くたばってたまるかよ！」

何とか堪えつつ敵を殲滅する。

もう少しで終える。打ち止めを救うことしか考えてない麦野は自身の体を気にせずに

「さっさとくたばって楽になれやあああああ」

能力を力の限り限界まで上げて攻撃した。

ズガアアアアアアン！！

残りすべての敵を殲滅した。

だが、彼女も限界だったようでバタツと倒れる。

「チツ……まだやることあんのに」

麦野は体を引きずりながらも前に進む。

「こんなところで……寝てられるかよ……！」

自分がどんなになっても天井を殺してまでも、打ち止めを救わなければならぬ。しかし、傷だらけの体は正直なためついていかない。

「あーあ、何が超能力者だ、何が第四位だ、何が原子崩しだ……自分が言っただけで情けなくなるほど恥ずかしいわ」

ふっと笑えてきてしまった。

そして周りの残骸を見て呆れてしまった。結局自分には殺すだけ殺してまともに大切なものを守れないのかと。

「あははは……これがアイテムのリーダーだなんて泣きたくなっちゃうほど……」

そついつてる間もポロポロと涙をこぼす。

「嫌になっちゃうわ」

笑いながらも涙は止まらない。

「ごめんね……木原……垣根………銀………時……」

途切れながらも大切な大切な三人の名前を途切れながら呟いて謝ったあと、目を閉じた。

第十七学区の操車場。銀時と垣根は対峙する。

「大丈夫ですか？10032号？と00001号は大丈夫じゃないだろうなあと思いつつ、問い掛けます。っていうか無茶すぎです」

心配しながらも怒っているように見える00001号に10032号は答えた。

「…………骨が何本がやられたようですと素直に答えます。なんだが無茶しないといけない気がしたのでと苦笑してみます」

それは00001号も実感していた。こうでもしないと銀時に思いを届きはしなかったんではと思うくらいには。

「立てますか？」

「…………肩貸して下さい」

そんな事を考えながらも00001号と10032号は支え合いながらなるべく安全な場所へ移動する。

「それより他の個体に現場へと向かわせてますが、上位個体の方も大変な事になってますねと00001号は最悪な状況に顔を歪めます」

「…………原子崩しも大丈夫でしょうか？と10032号は不安で一杯です」

打ち止めからの接続が途中で切れたため、そのあとの状況がわからない。

どちらの思いをぶつけ合い、上位個体が天井に向かっていったまですか。

不安で押し潰されそうになりながらも遠くで見える銀時と垣根が対峙しているところを見守る。

そして、凶器と化した赤い目をギロリと垣根を睨みつけた。銀時の自我は完全に

「ったくよオ……一人で勝手にハシャいでンじゃねエよ、三下がア」

「今からお前と俺の格の違いってやつを見せてやるからよオ！」

ぶっ飛んでいった。

「ハッ……格の違い？知らねえよ、そんなもんは。たしかにテメエより下だし、差があんのは長年一緒にいたから自覚はあんだよ」

銀時……いや一方通行にくだらないと言ったように吐き捨てる。

「それでも、俺はお前を……お前の闇を全部取り払うまでは、格上だろうがなんだろうが、ボロボロになるまで立ち向かってやる」

垣根は意思の強い眼差しでじっと一方通行を見つめる。

「来いよ、一方通行。今からテメエを俺達の知ってる銀時に戻してやる」

それを聞いていた一方通行は

「クツクツ……おもしれエなお前。最ッ高に……おもしれエぞオ！
！やれるもんならやってみるやア！」

笑いながら木刀をブンと一気に振り払うとそれは銀色に輝く、刀へと変わっていった。

「ただの仕込み刀じゃねエぞ。こいつだってなア……俺の能力添えてやりゃあ」

また何も無いところで素振りでもしてるかように空を斬る。そしてそれは、ブオン！と風の斬撃は高速でかまいたちのように垣根に襲いかかる。

垣根はそれを白い翼で身を防ぐとガキンと遙か上空にその斬撃は跳ね返っていった。

「風だろオがよ、何でも力の向き（ベクトル）を変えることができんだぜ。まさに俺にピッタリな武器だ」

ニヤリと笑って余裕を見せる一方通行。

彼の能力は垣根は十分に知っている。全てに置いてあらゆるものの向きを操作できる。まさに最強に相応しい能力。

だが垣根は

「そついやあ、お前とは今まで悪ふざけやらかしてきたが……ガチで殺り合ったことはなかったな」

一向に引かない。

「俺の未元物質に常識は通用しないのは知ってるよな？」

まだ日は沈んでいない太陽に手を翳して何かを手元に集中させる。

そしてそれを赤い光線として放った。超電磁砲とはまったく違う何

かを混ぜた光線で。

（あいつはもう銀時じゃなくなってる。おそらくまだ未元物質を解読しきってねえはずだ。なら）

一方通行と銀時は違うと独断で判断して、反射は働かないはずと予想しているとそれは当たった。

「ガアッ!？」

一方通行の肩にそのまま直撃した。

「やっぱりな……俺の能力はこの世にない素粒子を作りだす。だから、テメエの反射を破れんのも例外じゃねえ。だが、それも時間の問題だな」

ブワアと再び6枚の翼を広げて高速で一方通行に移動する。

「テメエが解析完了する前に一気に叩く！単純だが、それが俺の勝算だあ!!」

未元物質で蓄積された翼で攻撃を繰り返す。

「チッ!!」

ダンッと重力のベクトルで足を踏み込んで飛びあがって避ける。

なおも刀を振り続ける。

斬撃の雨が上空から降ってくる。

「うおおおおらあああああ！！！」

翼で防ぎながら堪える。

それに心の中で

(これが銀時なら解析なんてとっくに終わってんだろっな)

一方通行と銀時の差を見つけて笑みが浮かぶ。

そしていつのまにか斬撃の雨は止まる。

それに応じて飛びだして反撃しようとする。

一方通行は面倒そうな顔して刀を木刀に戻してそのまま投げ捨てる。

「チッほんにめんどくせエ野郎だな……ならっコイツならどオダア？」

そして両手を広げてブツブツと演算を開始する。

すると

ゴオオオオオオオオ！！！！

空気が圧縮され、青白い気体が一方通行の頭の上に集まっていく。

「オイオイオイオイ！！！！冗談じゃねえぞ！！」

造りだされたのは高電離^{プラズマ}気体。

撰氏一万度ものの灼熱。

「ギャハ！これを自慢の未元物質で防いでみるや！」

飛びあがっている途中の垣根に向かってプラズマを放り込む。

避けられそうにない垣根は

「チツクシヨオオオオオガアアアアアアア！！！」

防御に徹するが押し込まれていく。

そして操車場に大きな衝撃が響いた。

少したったあと、青白い光は消えて周りが見えてくる。

「さアてとつ、どオなつたンでしょオかねエ？」

着地したあと埃被っている場所へ行く。

見たものは

「ほオ」

「ハア……ハア……くそつたれ」

陥没した中心のところどころ火傷を負っていて疲労もあるのか息絶え絶えになって横たわっている垣根がいた。

「スゲエなアお前エ！生きてるなんてよ」

パチパチと拍手を送る一方通行。

絶望的な状況にも関わらず垣根の目は変わらない。

「ハツテメエ馬鹿なんですかア？なんだなんだなんでしょうかア？その目は？今どオいう状況かわかってんのかア？」

垣根の眼差しにイライラし始める。

「俺は……お前が……戻ってくるまで、諦めねえぞコラ……銀時、聞いて……んのか？」

必死に銀時に呼びかける垣根。

「お前には大事な仕事残ってた。妹達を守るって言う仕事がない……！こんなところで……飲み込まれてんじゃねえよ！」

できる限り叫んで呼び戻そうと。

「うるせエうるせエうるせエ！どんなに叫ぼうが届きやしねエよ。も才遊ぶのも飽きたから死んでくれや」

だが聞く耳もたない一方通行は能力もままならない垣根に止めを刺すため近づく。

しかし、邪魔が入った。

ジャリ、ジャリと垣根の遙か後ろから近づいてくる音が聞こえてくる。

「ハア……どいつもこいつも邪魔ばかりしやがってよオ……な

ンの用ですかア？」

そしてその姿が見えてくる。

「一度、俺に負けたヒーローさんよオ」

そこには幻想殺しの少年がいた。

そこにはまっすぐで善人の目をした上条当麻がいた。

「ヒー……ロー……？」

垣根は力を振り絞ってそちらを向く。

何故一方通行がこの少年をヒーローと呼ぶのかわからなかった。

この時は。

「お前に負けたわけじゃねえよ」

上条は力強く答えた。

「なんだよ？負け惜しみですかア！？手も足も出せなかつたくせによくそんな事言えんなア！」

クククと笑いながら一方通行は

「今度は容赦しねエぞ。腹わたブチまけてグチャグチャにしてやらア」

凶悪な笑みに変えた。

「だからお前に負けたんじゃねえって言ってんだろ。俺はお前の中にいるソイツになら負けたけどな。誰がてめえみてーな野郎に負けるかよ」

上条も負けずに笑って答える。

それに黙ってはならない。

「いいねエいいねエ！最っ高にム力つく野郎だなア テメエはア！！」

凶悪に歪めながらテンションを上げる。

「お前は家族まで傷つけて何をしたいんだ」

上条はまた真剣な顔をして一方通行に問い掛ける。

「決まってるんだろ。絶対能力者（レベル6）になれば「無敵」が手に入る。「最強」じゃなんの意味ももたねエんだよ。コイツ（銀時）は興味ねエみてエだが、俺は違う。誰も挑もうことも馬鹿馬鹿しくなるくらいそんな無敵な存在になりてエんだよ！そうすりゃあ、誰も傷つかなくて済むんだよ！立ってるだけで人を傷つける俺だって苦しまくって済むんだよ！なのに」

一方通行が持っている思いは息すら忘れるくらい全部伝えても尚も続ける。

「コイツは違った。家族なんか持って、必死にそれを守って、更には妹達全員守ろうとしているなんてよオ。結局はオリジナル傷つけて、挙げ句には10032号を重傷にさせちまったらア………だったら全部俺に委ねりゃ良かったんだ！！
最初っから俺だったらコイツは何も苦しなくて良かったんだよ！！」

「!!」

最初から自分だったら何も持たなくて済んだ。孤独でも他人が傷つかなければそれでいいと。

そうであればこんな事にはならなかったと。

「無敵」以外何もいらなかったはずだと。

だが、この少年は否定した。

「間違ってたんだよ、お前」

「なんだと……?」

思いを否定された一方通行は叫んだ。

「俺の何が間違ってるってエエエエ!? だったら教えてよ? どこを間違ってるんだよ!？」

上条も怒りを隠せない。

「二万人もの人踏み台にして何が「無敵」だ。それだけでテメエは人を傷つけようとしてんだろ? お前はその地点で矛盾してるんだよ」

それに対して鼻で笑う。

「何が人だア? 俺に殺されるだけに生まれてきた実験動物でしかないねエ奴らが人だア? そんなモン、ノーカンに決まってるだろオが」

そんな一方通行に上条は顔を崩さない。

「だが、ソイツの思いは違うだろ。殺される為に生まれようがソイツは人間だと思ってるからこそ、守ろうとしてんじゃねえのか」

「!?!」

一瞬一方通行が揺らいだ。

『玩具？あいつらが玩具だって？俺らと何ら変わらねエのに、理由がどうであれちゃんとして生きてンのに！そんなふざけた言葉で済ませてるじゃねエ！！』

かつて己の中、銀時が天井に向けて放った言葉。

「それがなんだってんだよ！？俺は無敵を諦めるわけにはいかねエ！！！」

揺らいだのだが、自分の思いを変えることはない。

上条はグッと右手に力を入れる。

「そうか。そこまでテメエがソイツの思いを踏みにじってまで力が欲しいって言うんなら」

「ソイツが命はってまで守ろうとしたものを殺そうってんなら」

「まずは」

「その『幻想』をぶち殺す！」

一方通行の思いという名の幻想を打ち砕くために、彼は対峙する。

く誰かを救うのに必要なのは力だけじゃないく（後書き）

妄想を積み重ねていたら、意外と長くなってしまったあ！

銀時と垣根の能力にも少し妄想入っちゃいました。

次回は

上条が銀時達にたどり着く経路からです。

く悪党(さいきょう)と善人(さいじやく)く(前書き)

上条と銀時が再び会うまでの経路からです。

く悪党(さいきょう)と善人(さいじやく)く

上条が一方通行(銀時)と対峙する前。

上条は珍しく一人だった。いつも一緒にいる二人はいない。

時刻は午後4時を回っている。

「さてと、夕飯の材料ないからなあ、今日はタイムサービスだったかな?」

そして財布を見てハアとため息をはく。

「1000円か…なんとなるか」

上条はなんともひもじい学生生活を送っている。

「上条さん的には不幸ばかりじゃなく幸福も欲しいわけですよ」

それは誰でも同じでは?と思ってしまうくらい素朴に悩んでいた。

学校に出てすぐだろうか、タツタツと誰かが走ってくるのが見えた。

「アンタ!!ちょっと待ちなさい!!!!」

「ん?」

聞き覚えのある声があったのでよく見てみると知っている少女だった。

「ベリベリ?」

上条を呼び止めた美琴は息を整える。

「その呼び名の事は今はどうでもいいわ!—それどころじゃないの
っ!」

その美琴の尋常じゃない声に一瞬動揺してしまうが、すぐに真剣に
なる。

「どうしたんだよ?」

「……とりあえずこっちに来て」

叫んでいたので注目を浴びてしまい、何せ常盤台のお嬢様が何の変
哲もない平凡な高校の近くでその高校生を呼び止めたのだ。注目さ
れないわけがない。

それを美琴は気まずくなり人気のないところに上条を引っ張りだそう
とする。

上条は「お、おい」と慌てふためく。

「話なら俺がしてやろうか?」

しかし、第三者が現れる。

「アンタ誰よ?」

美琴達に現れたのは金髪に白衣、顔面半分に刺青の男。

「あのアホガキ共の保護者って言ったら、超電磁砲はわかるんじゃ

ねえか？」

ニヤリと木原数多は笑った。

「!？」

美琴は驚いていた。上条は何が何だかわからないと言った顔をしていたが無視。

麦野から聞いていたが想像とは遥かに越えていた。

麦野達を実験から救ったのがこの男なのが信じられなかった。

「まああいつらがどこでやらかしてんのはもうわかってる。何から何までてめえらに話してやる。着いてこいよ。手遅れになる前に、決着つけに行こうぜ」

木原はそう言って近くに停めてあった車に乗る。

美琴は覚悟を決めていた。爆弾と言われようが関係ないと、ただ素直に自分の変わりになってくれた垣根を助けたいと、自分や自分の知らなかった妹達のために戦っている銀時を救ってやりたいと。誰かに頼ってでも。もう決心は着いていた。

「よし、行くわよ!」

気合いを入れて車に歩きだす。一般高校生を引きずり込んで。

「何だかわからんが、とりあえず」

不幸だあああああああ！！！！

上条はズルズルと不幸への道を通り走って行くのだった。

そして現在。

「いくぞ最強おおおおおおお！！！！！！！！！！」

「調子乗ってんじゃねえぞ三下アアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

上条は全部知った。何故自分が病院にいた事から全部。

打ち止めや妹達の事。そして銀時の思いも。

「たしかにあいつは強い。けどよ、何でも感でも一人抱え込んで勝手に傷ついてる弱い奴なんだよ」

「こんな状況じゃあ何言っても聞きやしやがれねえ。お前のその右手で全部壊してくれねえか？とびっきりの目が覚める奴をよ」

この場所について、一番に飛び出したのは美琴。止める暇もなく、走りだしていった。そのあと惨状を見ていた木原はたしかにこう言った。

『何で俺の右手のこと………』

『俺を誰だと思ってやがる』

馬鹿馬鹿しいと言った感じで木原は吐き捨てる。

『あいつを育てた天才研究員だぜえ？てめえのその摩訶不思議な能力、把握すんのは簡単なんだよ（まあ幻想殺しって名前しか知らねえけど）』

決まってる木原だが、そんなことを知らない上条は啞然としていた。

『行ってこい、幻想殺し。あいつを頼む』

さて、00001号と10032号は回収したし、俺は自分の仕事しますかあ

木原は車の方へと歩いていった。

「うおおおおお!!!」

右手を突き出して一方通行のほうへと走りだす。

「ハン……学習能力がねエのかテメエは!!!」

近づいてきた上条に地面に足を踏み付け、瓦礫ごと吹っ飛ばす。

「くっ……!」

「あはっ！ぎゃははは！ホラホラア！！どオしたア三下！！」

さらにはアンテナをベクトル操作して上条に放つ。

上条はそれを必死に避ける。

異能の力じゃない物理的な攻撃は右手は効果ない。
避けなければ死ぬ。

「もオいい加減楽になれエ！！」

一方通行は一瞬で終わらさべく上条のもとへと一気に縮める。

「くっそおおおおお！！！！！！！！」

上条もそれに備えて右手を奮う。

バキッ！！

早かったのは

「はっ！！」

上条の右手だった。

一方通行は地面に倒れこむ。

「相変わらずに…わけわかンねエ能力だなア！」

垣根の反射を貫くのはまた違う上条の能力に、対応の演算式が成り立たない。

刀に変えることができる木刀は今手に持っていない。

あれがあれば手間はかからない。

そして能力なしでも蹴散らすことはできるが、今の一方通行は上条を殺すことにしか頭がない。

それは上条にとっても好都合。能力で向かってくる最強にただ右手で反撃するだけ。

そこから上条の反撃は始まる。

そのころの垣根は移動しながら戦っている一方通行と上条をただ見ているだけ。

自身の能力によって少し傷が和らいでいるが、疲労のためそのへんに寄り掛かっている。

「……………何もんだよ奴は」

右手だけで応戦している上条に垣根は呆然としている。

ただ殴ってるだけなのに、あの能力使用している一方通行にダメーシを与える。

一体何の能力で……………と考えている内に誰かが近づいてくる。

「……………大丈夫？」

女の声。そしてこの声はこちらに来る前に聞き覚えのあった声。

「来るなって言っただろっが」

どうやってきた？とかそんな疑問を吹っ飛ばしての言葉。

垣根は目の前に来た美琴を睨む。

「最初言ったよね」

「ああ？」

いきなり話だした美琴に垣根は視線を合わせる。

「信じてくれるなら、協力してくれって」

「……………」

それは確かに言った。ただあれは銀時と美琴の件を知らなかったからの言葉だ。

「だからって爆弾って知っても来るなんて馬鹿だろ」

呆れた声で垣根は言う。

「……………それでも私はアンタが変わりになるってわかったからほっとけなかった」

美琴はそんな垣根に対しても意思の持った強い目で訴えた。

「ははっ……………ほっとけないからってこのあとどうすんだよ……………俺でさえこんな様なのによ……………お前は何ができるんだよ？」

その目に揺らいつつも、美琴を笑いとばす。

銀時を止められなかった自分を含めて。

「私にできることは」

「一方通行と坂田銀時の思いを受けとめてあげる事」

美琴はできる事はそれだと言わんばかりに答える。

その時、

ドオオオオオオン！！

大きな音が聞こえる。

美琴は思わずそちらに走りだした。

「オイ！待て！」

後ろから垣根が叫ぶが無視。

「チツ！くそつたれが！」

ところどころ負った傷のせいで動けない。

美琴が見たものは

ボロボロになりながら膝から崩れ落ちている上条と、同じくボロボロだか立って留めを刺そうと近づいている一方通行の姿だった。

「待ちなさい！一方通行っ！」

考える暇もなく、その間に入り込んだ。

「！？ビリビリ！？」

上条は目を大きく見開く。

ドクン

それを聞いた一方通行は様子に変化する。

「クツ…ガアツ…オリジナルだとオ？」

目の前にいるのがクローンではない。それだけで頭の中がぐちゃぐちゃになった。

「ねえ………」

美琴は相手を睨みもせず、に穏やかな顔をして話す。

「本当はアンタだって殺したくないんでしょ？」

「な………にイ………？」

一方通行は何故か動揺してしまう。

「たしかに最初っからアンタだったら坂田銀時は苦しまなかったかもしれない。なら、何で今再アンタがでてくるの？」

美琴が思っていたことを続ける。

「最初からアンタだったら妹達は大分死んでははずよ。なのにそうしなかった」

「グッ……うるせエンだよ…」

頭を抑え、立っているのもやっとな一方通行はそれしか言えなかった。

たしか美琴の言う通りなのかもしれない。

無敵という存在になりたいと思いつつも、戸惑っていたのかもしくない。

殺したくないという思いがあったのかもしれない。

一方通行はもう何もかも考えられなくなった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ……!!」

「……………」

ゴパアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

一方通行の背中にはあの、漆黒の刺々しい翼が出現した。

その場にいた全員が驚きだす。

「レ……………ル……………ガ……………ン」

掠れながらはつきりと聞こえた美琴は気付いた。

「坂田銀時……………？」

一方通行……銀時は頷いた。

「あん……時は……すま……な……かつ t b j g m t p w g た」

徐々にノイズが酷くなり、聞き取れにくい。美琴は理解している。

「ううん……あの時はアンタがやってこなかったら、もっと悲惨な
ことになってたわ……ありがとう」

美琴は普通に会話している事に驚きながらも笑いながらもあの時の
お礼を言った。

「 a j t p g m d ……! 」

ゴオオオオオと音を立てて、限界なのか、その漆黒の翼は竜巻の
ようにこちらへと襲いかかる。

「あぶねえ……っ! 」

「きやつ!?!? 」

上条は引っ張って美琴を軽く突き放したため後ろへ倒れ込む。

そして右手で黒翼を打ち消そうとする。

「くっ! 」

竜巻と同じような威力に上条は苦戦する。

すぐには全部は打ち消えてはくれない。だが、上条は踏ん張る。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

かつてない咆哮とともに上条はこの幻想を消しつづける。

黒い翼が弱まっていったのか銀時の意識がはっきりとしてきた。

あア………やっと終わんのか。

と、そんなことを思っていた。

そして

最後のシメと行きますかア
と笑った。

その後、刺々しい翼は完全に消された。

俺が負ける最高の舞台をな。

「ヒイイイイイイロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！」

銀時は突っ込む。最高の善人っぷりを見せる男に。

その中で上条はヒシヒシと感じていた。

「お前達の思いは全部届いた」

銀時が突っ込んで伸ばしてきた両手を右手で払いのける。

銀時は驚きもせず、ありのままの笑顔を見せて目を閉じる。

「俺はそれをこいつ（右手）で答えてやる」

上条は銀時の顔面に放つために飛び込む。

「歯あ食いしばれ、最強」

渾身の右手を放つためにグツと力を入れて握りしめる。

「俺の最弱はちつとばつか響くぞお!!」

バキイイイイイ!!

それは見事に顔面に決まった。

銀時は勢いに負け、十数メートル吹っ飛んでそこにとまる。

「ハア、ハア」

上条は息をつきながらそちらを見る。

「……不思議だなア」

倒れながら銀時は呟く。

「負けたってエのに、気分が最高にいいなよオ。ドMじゃねエの」

そして体だけ起こす。

「なア……名前なんて言うんだ？」

自分を負かした無能力者に聞く。

「上条当麻」

上条は答えた。

「上条…やればできる奴だって信じてたぜ」

上条はいやあと照れたように笑う。

よっこいしょっと少年らしからぬ掛け声で立ち上がる。

「垣根」

その少年にいる場所に振り返る。

「スマン」

そして深々と謝った。

「……気にすんなよ」

垣根は何でもないかのように振る舞う。

「テメエのために戦ったんだ。こんくれえなるのはわかっててやっ
たんだからよ。そんなもん大したことじゃねえよ」

「ありがとオな」

「……ふん」

自分は大したことしてないとは思ってたのに銀時に礼に言われると
恥ずかしくなってそっぽを向いた。

「ていといくら恥ずかしかつてるよオ……赤くなるメルヘン……クク
ッ」

坪にハマったのか笑いをこらえるのに精一杯だ。

「よし、余程愉快な死体になりてえと見た。ちょっとはシリアス
場面を把握しろやあああああ！！」

ブチ切れた垣根は翼を広げようとしたがそれはしなかった。

ただホツとしたような顔で

「まっ今回だけは許してやるよ」

笑っていた。

「そオかい」

銀時もまた同じように笑っていた。

上条も美琴も微笑ましい状況に顔が緩む。

「学園都市トップ2の素顔がこれと違って想像できないよな」

「それをさせたのが木原さんなんですよ」

沈利もね、と心の中で呟いた。

すると、いなくなっていた木原が両手に何かを持ってやってきた。

「微笑ましいところわりいんだけどよ、まだ打ち止めの件が残っているぜ?」

その声にいち早く反応したのは銀時だった。こつやって面と向うのは久しぶりだからだ。

「木原くん!」

「でかくなっても、世話かけさせてくれるねえ」

「相変わらずテメエも変わってねえな。得に顔が」

「ぶつ殺されたいんですかあ? 銀時い?」

そんな物騒な会話に上条が止めに入ろうとしたが、垣根に止められる。

「まあ冗談は置いて」

これが冗談!?!と上条が叫ぶくらいピリピリしていたのだ。

それをみて垣根は当然のように呆れていて美琴は苦笑していた。

「ちょっと予想外になった」

木原は面倒そうに言う。

「麦野がやられた」

そして人を殺せるくらいに顔を歪ませた。

「……?!?!?!」

四人はかなり驚愕した。

ちなみに上条は木原に聞いているため、麦野のことは話し上だが知っている。

「下位個体らが駆け付けたおかげでとりあえず一命は取り留めた」

その木原の言葉に安心したが銀時だけは違った。

「オイ」

それは誰も聞いたことのない声で。

それは上条、美琴はおろか、垣根と木原まで震え上がらせるほどの声で。

「誰にやられた？」

声量は変わらない。

木原は息を吞んで答える。

「天井亜雄だ」

銀時は聞き覚えがある。自分にレベル6になれる実験を持ち込みだ

した張本人。妹達を玩具呼びした天井だ。
それに銀時自身、二度も麦野を巻き込ませ、さらには怪我させた。

「なア」

「あの野郎がどオなつても文句はねエよな？」

一瞬また一方通行が出たかと思わせるくらいの殺気と凶悪の笑み。
まさに悪党の顔。

「待て。話は終わってねえ。ここに天井の情報の資料と、打ち止めの情報が入っているデータスティックがある。まっ今のお前がすんの壊すことなんだろうけど、どっちを選ぶ？」

冷や汗を垂らしながらも銀時を引き止める。

「フン、分かりきってることじゃねエか。俺が何を選ぶかなんてよ」

木原に近づいていき、右手を伸ばしたその先にあるものを持って飛び出した。

現在、午後7時。タイムリミットまであと5時間。

く悪党(さいきょう)と善人(さいじやく)く(後書き)

戦闘シーンやら何やら微妙すぎるような…

指摘等あれば何でもお願いします！

くソツタレな奴は最後までくソツタレな人生で終わる。(前書き)

打ち止め編もクライマックスですね。

くソツタレな奴は最後までくソツタレな人生で終わる。

飛び出す前の木原の言葉を思い出す。

『午前0時。それがタイムリミットだ。間に合わねえあつという間にウイルスによって打ち止めの上位命令群で妹達は暴走する。そうなりゃあ誰も止められねえ』

『どこにいるかは、芳川に任せてある。それを頼りに辿っていけ。そして学園都市も、妹達も、打ち止めも救ってやれ。それがお前の今日の最後の仕事だ』

銀時は走りだしながら電話に手をかける。

もう片方に持っているのは打ち止めのデータ。

『もしもし』

「俺だ。天井の場所は割れたのか？」

電話の相手、芳川に尋ねる。

『ええ。彼はここにはまともな知り合いなんていないし、匿ってもらう友人なんていないわよ』

利用し、されるだけの関係ね、と淡々と答える。

「……まさか外に逃げたのか？」

芳川の話聞いて見れば、それしか考えられない。

『いいえ』

彼女ははつきりと言った。

『学園都市は今、外に出られないようになってる。あらかじめ、外からの侵入を防ぐための対策をね。だからこちらからも迂闊には出られない。天井はまだ学園都市の中にいる』

「だとすればだ」

導かれる場所は一つ。

『そう。彼がいる場所は……その立ち入り禁止区内にいるわ』

天井は車の中であせていた。

目の前にあるのは立ち入り禁止と言う看板。そこには数々の特殊な罠が仕掛けられている。

道を塞がれている。

「くそ！このままではっ……」

ガン！とハンドルに手をたたき付ける。

助手席には打ち止めがいる。いろいろな装置を付けられ、意図的に眠らされている。だが、その様子がおかしい。

「ハア……ハア……」

息遣いが段々と荒くなってきている。

それも天井の焦っている原因でもある。

下手をすれば打ち止めは死ぬ。

「頼む！ウイルス発動まで持つてくれっ！」

天井は今回のおかげでかなりの負債を抱えている。なので、これだけは必ず成功させなければならぬ。

何としても。

だが、やはりそう簡単にはいかない。

バサバサツと近くで何かが聞こえる。

「ヒイツ！？」

天井は怯えて聞こえたほうを見るとどうやら、カラスが飛び降りてきたようだ。

ホッと安心しているうちにすぐに飛び立っていったが、次にはコツ、コツと確実にこちらに近づいている音。

サイドミラーを恐る恐る覗いてみると、そこには悪い笑みを浮かべてこちらに歩いてくる最強がいた。

天井の心拍数はかなり上がった。

ボタン式のキーを必死に押しつづける。

するとブロロツとエンジンがかかりバックして方向転換する。

アクセルを全部踏み切って走らせた矛先にいるのは銀時。

だが、それは自殺行為に等しい。

彼の能力はベクトル操作。あらゆるものを反射して、力の向きを交換できるのだ。

銀時は目の前まで車に、怯むことなく、カッと目を見開いてボンネットに手を触れる。

ゴシヤッ!!

ボンネットが潰れた音がして、その衝撃でハンドルに強く頭をぶつけた。

「さアて、どうすつかねエ？」

銀時の笑みは変わらない凶悪な顔。

「ヒイイイ……!!」

潰れたドアを開けて逃れようと心見るが、ボンネットに足を踏み込まれたことでそのドアは戻ってくる。

「ぎゃっ」

情けない声をだしてその反動で気絶した。

「落ち着けよ中年。みっともないっつウの」

銀時は気絶した天井を無視して助手席の打ち止めのいるほうに向かい、携帯を耳に当てる。

「芳川、ガキは保護した……ン？」

銀時が打ち止めの顔に何かついてるのに気が付く。

「オイ……このガキの顔に何か電極みてエのがついてンぞ」

芳川はわかっているようで普通に答える。

『おそらく、妹達の身体用の検査切手だわ』

「BC稼働率ってのは？」

『脳細胞の稼働率ね。ブレイン・セルでBC』

「脳細胞の稼働率ねエ……」

そのモニターに映っている装置を見ている。

「まったく……メンドクセエ、ほんとにメンドクセエなオイ」

どこか疲れたような顔。それもそうだ。先程までずっと戦闘していたのだから。

「まっそんなメンドクセエのだからこそ見逃せねエほど、俺の大切なモンになっちまってんだよな」

『……………』

そんな銀時の独り言に黙って聞いている芳川。

「ンで話を戻すがよ、この機械使ってウイルス駆除できねエのか？こつからじゃ、そつち戻るには時間がかかるぞ」

『無理ね。書き換えるにはそれ専用の培養機と学習装置がないと』

本題に戻ってこの装置でできないか確認したが、あっさりと答えられた。

だが、何か近くで車のクラクションのような音が電話越しに聞こえてくる。

「あ？お前今……………」

それに続けるように芳川は答える。

『ええ。貴方が来るより早いと思ってね、そちらに向かっている所だわ』

「ウイルスは解読出来たのか？」

『まあ八割方つてとこかしらね。午前0時には間に合うわ』

それを聞いた銀時は一息着くと

「ったく、とりあえずは少なからず解決に近づいてるってわけか」

安心した顔をする。

その時、事態は急変した。

「ミ…ミ…サ…カ」

「ン？」

声が聞こえて打ち止めを見る。

「ミサ…カワミサ…カワミサ…カミサミサミサミサミサミサ」

狂ったように声を出していて、更にはその装置がビービーと警報が鳴りつづける。

打ち止めから意味不明な単語が発せられている。

「オイ！こりゃあ何が起こったんだ！？」

『黙って！』

思わぬ事態に銀時は叫ぶが、芳川は黙らせて打ち止めの状態を携帯

から把握する。

『やっぱり……そうなのね』

理解したのか、かなり渋い顔をする。

「結局何なんだよ？」

銀時が痺れを切らす。

『ウイルス・コード……もう起動準備に入ってるんだわ』

「なっ!？」

あまりにも早い展開に驚く。

『0時まで……あと4時間もあるのに……まさかダミー情報?』

まだ8時だと言つのに早過ぎる。

芳川と銀時はかなり焦っている。

先に口を開いたの芳川。

『聞いて。あなたは聞いていると思うけど上位命令郡は5分〜10分で全妹達に伝わる。そうなれば学園都市は後の祭状態。だけど、ただ一つだけ止める方法はある』

この後どうなるかを簡単に説明すると一つの解決方法を見出だす。

「まだ手があるなら聞いてやる！」

そんな希望を持った銀時だが、彼女の言葉でそれは絶望した。

『銀時。あなたならわかっているはずよ。どれだけこれに関わっている研究者達が汚いかをね』

「オイ……………まさか」

『そう……………あなたに出来る事はただ一つ。打ち止めを殺して世界を守るのよ』

「どこまでもクソツタレだな畜生」

彼はどう判断するのか。

実は垣根もそうとう苛立っていた。

木原もそうだが、暗部たる人間。こうなる事はわかっている。わかっ
てはいたが家族がやられたのだ。

どす黒い何か体が体の中では持っていた。

それを抑えて冷静を何とか保っているが、垣根は違う。いくら大きくなつたとしても、暗部の人間になつたとしてもまだ子供なのだ。冷静にはなれなかつた。

「ム力ついた」

いつの間にか声をだしていた。

「あ？………」

一瞬何事かと思つたが、垣根の顔を見て木原は悟つた。

「つたく、そんなボロボロなつてんのに行く気か？」

聞く耳持たないだろうな、と思いつつ問い掛けた。

「関係ねえな。俺は気に入らねえもんは、自分でぶつつぶさねえと気が済まないからな」

やっぱりかと、ため息をついて「勝手にしろ」と木原は言った。

「俺達は病院行つてつから、早めに終わらせてこい。銀時だとしても何が起ころかわからねえからよ」

「「え？」」

木原の脇にいた二人はキョトンとしたがついて来るように促した。

「ああ、お前が決めたことだ。お前の力で辿り着けよ」

「何時までも甘えてられっかよ、そんなくねえわかってんよ。さっさと行け」

「ハイハイ」

手をヒラヒラとさせながら二人を連れて車へと歩いていく。

「んじゃ行きますかあ、楽しい楽しいショーの始まりってなあ」

垣根もまた凶悪な顔で楽しそうに呟いた。

「なんで」

上条は木原にわからないといった顔をして問い掛けた。垣根のあの表情はあきらかに人を今から殺してくるようなものだった。上条は何となくわかってしまった。

何故引き止めなかったのか。

「俺達はな、お前らとは違う」

木原はゆっくりと話す。

「お前や、超電磁砲みたいな表向きの人間はわからねえかもしれねえがな、俺達みてえな裏の人間はそうやって生きて行くしか道はねえんだ」

「好きでこんなことしてるわけじゃない。ちゃんと俺達だって守りたいもんはある」

「裏の人間なんてのはな、犠牲にどんなに出たとしても前向いてメモエの守るもんのために進む覚悟があるやつができるもんなんだよ」

「犠牲ださない方法なんてのは皆無だ。俺達はそういう世界で生きてんだ。今更、何も知らない善人どもに何を言われようと世界が変わりはしねえ」

「この生き方を否定するのはこの俺が許さねえからな」
言いたい事を言って、最後は冗談まじりに笑いとばす。

上条は反論できなかった。笑ってはいるが木原の目は笑っていない本気の目。

美琴自身も先ほどから無言だ。

「麦野に会うのにシンミリしちやいけねえな」

自分がそういう雰囲気にしたのに何でもなさそうに笑う。

二人の顔はとても悔しそうな顔をしていた。

くソツタレな奴は最後までくソツタレな人生で終わる。(後書き)

区切りのいいところでストップしてその？に続きます。

木原くんなんかまたていとくんにおいしいところを…。(笑)

くソツタレな奴は最後までくソツタレな人生で終わる?? (前書き)

その?です

くソツタレな奴は最後までくソツタレな人生で終わる??

銀時の能力は人を救うというよりも、殺すほうが似合っている。それは自分が一番わかっている。

だからこそこの迫りくる決断に頭を悩ませる。

(やったことはねエけど、人の体に触れて生体電気や血液を逆流させれるらしいが)

(殺すことしか……!)

そう考えて止まる。

(待てよ……何か引つ掛かる……考える……)

そしてある二つのキーワードで閃いた。

(生体電気……逆流……)

思い付いたのは

(俺の手元にあるのは、打ち止めの感染前的人格データ……)

「オイ、脳内の電気信号さえ、いじくればウイルスを止めれるンじゃねエのか?」

『何を……まさかあなた自身が学習装置になるつもり！？無理よ』

銀時自身が学習装置になってワクチンを用意することだった。それは無謀だと芳川は言う。

「無理かどオかなんて、やってみねエとわかんねエだろオが」

『仮にもし君がワクチンを用意できたとしても、ウイルス全部を止められるかはわからない。そうなれば妹達はもちろん、都市にいる人達にだって多く犠牲が出る。そうならないようにするには打ち止めは諦めなければいけないの』

銀時は聞く耳を持っておらず、携帯をフェンスの方へと投げた。

芳川が何かを言っていたが無視。

「最初っから諦めてたら忙ねエってんだよ。それに…俺を誰だと思っつてやがる」

そのデータをスティックに差し込み、読み取る。

「感染前のデータと照合して、余分なモン全て排除すればいい話じゃねエか」

その画面から流れてくるデータを見ながら笑った後、それを真っ二つにして打ち止めの額に手を当てる。

「行くぜエコラ。人がここまでやってんだ。今更助かりませんでしたなんてオチはいらねエぞ」

目を閉じて頭の中に入りこんできたデータを読み取る。

(感染前データと照合。対象コード数357,081)

「コイツを取り除けば、感染前の状態に戻るってわけだ。こんな事起きたことも知らない状態に」

「まっ何も知らない方が幸せだろオシな」

目を開けて打ち止めを見る銀時はウイルスを排除するために行動に
でる。

(コマンド実行……削除っ！)

開始された瞬間、パソコンの画面のWARNINGでうめつくされているのが徐々に消えていく。それに伴い、打ち止めの状態も変わって動きが激しくなる。

(残りコード数……173,592)

(途中でめんどくせエこと起きるンじゃねエぞ)

少しずつ汗を流している銀時は全て終わるまで気を抜かないで集中する。

(残りコード数、23,891!後10秒か。楽勝じゃねエか)

思わず顔を緩めていると、カチャリと音がした。起きた天井が銃をこちらに向けていた。

「邪魔を……するな!」

今にも引き金を引こうとしている天井に銀時は何もできない。

(ふっざけんねエぞ…！こっちは電子顕微鏡クラスの精密作業やってんだ！反射に使う余力なンぞ残ってねんだよ！)

心中穏やかにはなれなく、汗を大量に流している。

時間は待つてはくれなく、バアンと一発の銃弾が銀時に向かっていく。

(あと少しだつてエのに…こオなのかよ)

ウイルスも間もなく消えると言うのに銃弾も近づいてくる。どちらもあと3秒と言ったところか。カウントダウンは始まった。

3

(クソツタレ…また俺は守るもん残して死ぬのか?)

2

(ここまでして俺を…神って奴は許してくれねエってか?)

1

(もし俺を許さなくても…何も害もねエコイツや、あいつらだけでも…頼むから許してやってくれよ)

0

ズシャッ

銀時の額に当たり、助手席から放り出されて倒れた。

「死んだ？それはそうだよな！常に特殊弾持ち合わせてるからな！
ククク……アハハハハッ！！！」

反応しない銀時に天井の笑いは止まらない。

次の瞬間、打ち止めが何かを呟いた。

「コード……ブレイク……不正な処理に上位命令郡は中断されました。よって検体番号20001号は再覚醒します」

「中断？再覚醒……？」

天井は一瞬混乱したが、わかってしまった。銀時が全てウイルスを消してしまったのだ。

「まさか失敗したというのか……！」

天井の計画は失敗に終わった。

悔しさを滲み出していたが、もう打ち止めは必要がなくなった。だから銃を向けて打ち止めに放った。

だが、その弾は跳ね返ってきた。

「ぎゃあああああ……何故！？お前が生きている！？！？」

情けなく地面に転がりこんで叫ぶ。

目の前にいたのは死んだと思っていたはずの銀時が額を抑えて打ち止めを守るように立っていた。

「どオやら……神って奴ア土壇場で俺に味方してくれたみたいだな
ア……駄目元で反射働かせて良かったぜ」

「!？」

天井はようやくそれで血だらけの手で自分の銃弾を見た。中に入っ
ていたのはごく普通の弾だった。

「何故だ」

天井は奮えながら銀時を見る。

「…元々お前がこんなことする必要などなかったはずだ!」

そんな叫ぶ天井に銀時は

「たしかにそオだったかもしねえな」

呟いた。そして面と向かって話し出す。

「俺はアイツらに会わなかったらテメエらの好きなよオにされて、
こんなくっだらねエ実験参加して殺しまくってたんだろオな」

血を垂らしながらも思い返しながらも話し続ける。

「不思議だよな……こんな俺でもあいつらと普通の生活できてんだ
からよオ。それにアイツらといると立場なんて忘れるんだ。とんだ
平和ボケだな、こりゃあ」

「それをテメエみてえな野郎に壊されてたまるかよ。あそこはもう

俺の大切な居場所なんだよ」

そしてしっかりと天井を逃がさんと睨みつける。

「第一位？知らねエよそんもんは」

まっ暴れる時はその肩書を利用するけどな、と付け足す。

「あいつらの為なら学園都市が滅ぼつが、超能力が滅ぼつがどオでもいいんだよ！昔から！」

「今も昔も、俺の守るもんは何一つ」

頭に浮かんだのは、この世界で守るべき存在全て。

「変わっちゃいねエエエエエエエエエ！……！」

全てを出し切って一歩ずつ天井に襲いかかる。

「ヒィッ……！」

怯む天井に辿り着くまでもう少し。だが、

「ぐっ………」

もう少しと言う距離で俯せに倒れた。

天井は恐る恐る近づいて、後頭部を踏み付ける。

「反射は……効いてないのか」

そうわかれば行動は一つ。

「ハハハっ！結局、お前にはヒーローみたいな力は持ってなかったわけだ」

そう言つて懐から銃を取つて突き出す。

「無理もない。我々みたいなのはみんなそうだ」

「そういうものなんだ」

引き金を引いて銃声の音が響く……………はずだった。

銃声の音ではなく、天井の後ろからドスツと刺した音が聞こえた。

白い鋭利な翼が天井の背中を突き刺していた。

後ろを向くとそこに垣根がいた。

天井はもちろん知っている。

「だ…第…二位…」

前から崩れ落ちていく天井を見て垣根は近づいていく。

「はあ……………これじゃあ何の為に暗部入ったのかわかんねえな」

倒れている銀時を見てため息をついた。

「守ってるつもりが、これじゃあ逆じゃねえかよ？」

それでもぞもぞと動いて苦しんでいる天井を見て笑っている。

「お前が天井か……おっと、誰もテメエの声なんざ聞きたくねえ」
ゲシつとフェンスの方へ蹴り飛ばす。

天井は悲鳴を上げて気絶する。

すると車が近づいて停まる。

出て来たのは芳川。

「あらっあなたの方が早かったのね」

意外そうに尋ねる芳川に垣根は「フン」とだけ答える。

「芳川。このガキ頼む」

助手席から打ち止めを抱えて芳川に渡すと、車の中にある培養機に入れた。

「この子は……まあ、冥土返しがいるから大丈夫よね。貴方もいることだし」

「なんとかしてもらわなきゃ困る」

暗部でも有名なため、その名は幾度もある。

「なあ……」

垣根が芳川に目配せると

「わかっているわ。それに無惨な光景なんて見たくないもの」

芳川は苦笑しながら車に戻ってそのまま発進した。

「さてと」

「俺も十分クソツタレだと思っていたが、テメエはそれ以上だなあ？」

車が行ったのを確認して気絶した天井を見つめる。

起きる気配はまだない。

「いいか。クソツタレな奴は」

「最後までクソツタレな人生で終わるもんだ。テメエにピツタリじやねえか」

翼をまた鋭利な物に変えて天井に向ける。

「肉塊すら残さず消してやる。素晴らしい死に方だと思わねえか？」

言っても答えられねえかと呟いて最後に「じゃあな」と残して翼を放った。

ドスドスドスと天井の体に休む事な突き刺さる。血が飛び散ると共に垣根が笑う。

「ヒヤハハハハ！楽しいなあ！オイツ！！」

原形はもうグチャグチャになっており、何が何なのかわからない。ただど攻撃は止まらない。垣根はぶっ壊れたように続ける。

ビチャビチャと顔やら服やらに着くが気にしない。

そして飽きたの攻撃を止める。

「ああ……つまなくなつたなあ……終わりにするか」

「テメエのその肉塊を見るのもムカつくからよ。散れ」

銀時には被害がでないように天井と言う塊に集中してブオオオオオと彼特有の風を起こしてそこだけ全て吹き飛ばした。

「急ぐか」

散々血を染みらせた体で銀時を担いで病院へと急いだ。

くソツタレな奴は最後までくソツタレな人生で終わる?? (後書き)

垣根クウウウウウン!!!

く病院では静かにしましょう（前書き）

ちよつとした平穩の始まりです。

「病院では静かにしましょう」

木原、上条、美琴は病院に辿り着いて、受付に麦野がいる場所を聞く。ちなみに治療は終わっている。

上条は何かを思い出したように美琴に振り向いた。

「お前、門限……大丈夫なのか？」

時計を見れば9時を回っている。

「あ……」と青ざめたが、木原がポンと美琴の頭に手を置く。

「そこんところは心配すんな。俺がちゃんと話つけてあっからな」

「そうですか／＼」

撫でられるのが照れ臭いのか顔を紅くした。

「ビリビリもそんな顔するんだなあ」

のんびりと微笑ましげに言った上条だったが、バチバチと聞き慣れた音がした。

「私をなんだと思ってるのー！？」

攻撃しかねん美琴に上条は

「……病気ですからあー！！」

叫ぶとゴンと拳が上条の頭に下ろされた。

「うるっせんだよ！静かにしろってんだ」

ゲンコツかました木原が怒鳴る。

「いつ！？えっ！？なんで上条さんが殴られないといけないんでせうか!？」

痛みに堪えながら納得のいってない上条が反論する。

「お前が近くにいたからだ」

「そんな納得いきません!!」

「だあかあらあうるせえってんだよボケがああああ!!」

ギヤーギヤーと喚く二人に蚊帳の外だった美琴はポカンとしている。

それはすぐ終わる。

ズン、ズンと怪物でもきたかのような足跡でもものすごい形相した顔をした、ゴリラみたいな看護婦が近づいてきた。

「え？何あれ？人なの？思いつきり」……」

メキツと言いつ切る前に木原が壁にめり込んだ。

目にも見えない速さで叩きつけられた。

「貴方達も静かにしないと……こうなるからね?」

ニコリと笑っているのが更に怖い。

「はい、気をつけます」「

二人はガクガクしながらしっかりと頷いた。

「あくクソ、あのゴリラ覚えてやがれ。俺の顔なんともなっていないよな？ 陥没とかしてねえ？」

あのと復活した木原は顔を気にしながらブツブツと独り言を呟いていた。

上条は「大丈夫ですよ」と苦笑してみせた。

そうしているうちに麦野がいる部屋へと着いた。

入る前に前方から歩いてくる人物がいた。

木原はよく知っているので声をかける。

「よお、芳川。早かったじゃねえか」

かけられた芳川はじっと見て、ポロポロな木原に不思議に思った。

「かなり飛ばしてきたわ。どうしてあなたはそんなにポロポロなの？」

「まあ、うん。気にすんな」

思いたしたくないのか、顔をしかめていた。

あと二人も顔を青くする。

「? まあいいわ。それより…」

深くは追求しない置こうと思い、本題に入る。

「打ち止めは無事回収したわよ。銀時がウイルス全てを排除した」

全くあの子もやってくれたわね、と何だか嬉しそうな顔していた。

「そうか。さすが俺の息子だ」

木原も満更でもないような顔をして自慢する。

上条もそうだが、特に美琴は一安心していた。

「ただ……」

しかし芳川の顔は一気に優れなかった。

「どうした」

何かあったのか? と真剣な顔をして木原は芳川を見る。

「あの子……いえ、今にわかるわよ」

芳川は少し辛そうな顔をしたが。

「オイ、何だよ?」

それを三人は見逃してない。だから木原尋ねるが芳川は無言。
痺れを切らして再度尋ねようとしたが

ガッシャアアアアアン!!!

窓から何かが入り込んできたのだ。

病院内は騒ぎ始める。

四人はそこに目をやると垣根が血だらけで立っていた。

「垣根!？」

木原は驚いて向かう。三人も向かったが、ピタッと止まった。

垣根が担いでいるものがわかったからだ。

「銀時!？」

「なんでこんな……!？」

「い、いやあああああ!!!」

「……………っ」

そこには、額から大量に血を流した銀時がいた。

「冥土返しを呼べっ!!!」

垣根は叫んで看護婦に頼む。

そしてタンカーで銀時は運ばれた。

「予想外にも程がありすぎんだろっ！！」

木原は怒鳴り散らす。

上条は混乱している。

美琴は「自分のせいだ」と泣きわめく。

芳川はそれを宥める。そして垣根は

「頼むぜ……」

冥土返しに託した。

数分前、病室には静かに寝ている麦野と椅子に腰掛けている0000
01号がいた。

「無事で良かったですとミサカはホッと胸を撫で下ろします」

麦野は重傷ではあったが、助かったことに彼女は安心した。

「上位固体は無事です。体張ってまで守ってくれた事に感謝してますよ」

麦野自身何も救っていないと思いきこんでいるだろう。だから、00001号は彼女の行動にお礼した。きちんと救ったのだと、あなたの思い一つで救われたのだと。

「今思えば……何回救われたかわかりませんね、とミサカは救われてばっかだと苦笑してみます」

「麦野沈理、垣根帝督、坂田銀時。必ずミサカ達は貴方達の恩は決して忘れることはないでしょう。本当にありがとうございます」

もう一度度頭を下げると立ち上がって部屋を出ようとした時だ。

ガッシャアアアアン!!!!

窓の割れる音が聞こえた。

00001号はビクツと体を竦めていたがすぐに騒ぎ始めたためドアの方に耳を澄ませる。

『垣根!?!』

聞いたことのある名前。だとすれば騒ぎの中心は彼だと判断する。

そしてまた聞き覚えのある名前。

『銀時!?!』

しかし、聞こえてきたのは混乱した声と、00001号達のオリジナルの悲鳴。

そして、

『冥土返しを呼べっ！』

垣根の叫び声だった。

ドクンと嫌な音が身体中を駆け巡る。

恐る恐るドアを開けて、騒ぎの方へ見ると

「……………え？」

一番に映ったのは血だらけの垣根。

そして額から血を流して抱えられている銀時。

タンカーに運ばれている。

血で濡れた垣根もこのままじゃ駄目だと言われて風呂場の方へと連れていかれた。

残ったのは割れた窓から流れる夜風と美琴の泣く声だった。

「……………どういう事なのでしょうか？とミサカは動揺隠し切れませんっ……！」

動揺の余り、声を大きく上げてしまったのか、木原達には聞こえていた。

「貴方……00001号ね？」

芳川がそう確信する。

頷く00001号に芳川は話す。

「私が着いたところには垣根君がいたのだけど、その頃に銀時はそうなっていたわ」

あの子が来る前になってた可能性は高いわね、と付け足した。

00001号は罪悪感を感じている。他の妹達もそうだろう。打ち止め以外は全員ネットワークに接続してあるため、00001号と共感できてしまうのだから。

人間としてくれるのは感謝しているが、この状況になるくらいならば

「やっぱり……ミサカ達が生まれたのが間違いだったのですね」

生まれなかったほうがあの三人はこんなことにはならなかったと考えてしまう。

「馬鹿言っでんじゃねえよ」

木原が声を出す。

「くだらねえ事で生まれたとしてもな、あいつが守りてえと思ったから体張ってまでお前ら救ったんじゃねえか。だったらよ、生まれなかったら良かったなんて言うんじゃねえ。」

怒声を向けてはなく、優しく00001号に声をかける。

「後悔なんてすんな。あいつらに感謝だけしてろ。そして俺らもお前らが人並みに生きれるように全力をつくすからさ、時間かけてゆっくり恩を返していけばいいじゃねえか。負い目を感じることはねえ」

近付いていってポンポンとそつと頭に手を置く。

「だから、いつまでもあいつらの側にいてやれ、必ず喜んで歓迎するだろうしよ」

笑っていて、安心させるかのように木原は笑う。

上条も芳川もその様子を見守る。

そしてクルリと美琴のほうへと向く。

「お前もだ、超電磁砲」

ちゃんと聞いてたんだろ？

そう言つとまだ涙を溜めながらも頷く。

「本当に……いいんですか？」

美琴が聞くと

「ああ、俺がそう言ってんだ。嫌な訳ねえだろ」

当たり前のように答える。

涙を拭って00001号と共に礼を言おうとしたが、木原は

「俺じゃなくてクソガキどもに言えばよ」

そう言った。

すると見知ったカエル顔の医者が歩いてきた。

「やれやれ…緊急とは言え、派手な登場したもんだよ彼は」

そう言って冥土返しに近付いてくる。

「あの子の状態は？」

一番気になっていることを芳川が聞くと全員が冥土返しを見る。

「垣根君には先に言ってあるけど、前頭葉中心にダメージを受けているね。言語機能と計算能力…この二つに影響はでるね」

冥土返しの言葉に全員が言葉を失う。

「計算能力って……じゃあ銀時は……」

芳川が何とか声を出すと冥土返しは何でもないように言う。

「どうにもならないのをどうにかするのが僕の心境でね。彼の言語機能と計算能力は必ず取り戻す。必ずだ」

確信を持ってそう答えると芳川の方を見る。

「君も厄介なもの造ったからね、それを利用させてもらっつよ」

それに何かを気づく。

「ミサカネットワーク……打ち止めは大丈夫なのね？」

「彼女…10032号と言ったかね？その子と一緒にスヤスヤ眠っているよ。それに二万もの脳をリンクさせれば、一人くらいの言語と能力を余裕で補えるだろうしね」

打ち止め、そして10032号が安全だとわかりほつとする。

「必ず助けるよ。失敗したら、うっかりテメエを殺してしまうかもしれないねえ」

木原は挑発するように睨む。

「まったく、血は繋がってなくても親子なんだね君達は……垣根君にも言われたよ」

冥土返しは呆れたように笑う。

「必ず助けてみせるさ。誰が出頭すると思ってるのさ」

そして彼の戦場に向かっていく。

「まあそこまで言うてんだから信用するしかねえか。帰るか」

木原はなんとなくあの冥土返しならやってくれろと確信している。だからこうもあっさりと引き下がる。

「あら？あの子は見て行かなくていいの？」

芳川は木原を呼びとめて麦野の病室へと指を指す。

「明日また来る。そんなときでいいだろ」

お前らも来るだろ？そう上条と美琴に振り向く。

二人は頷いた。

そして

「お前も来るだろ？垣根」

戻ってきた垣根にも言う。

「……ああ」

垣根は返事だけしてさっさと去っていった…はずだった。

ガシイと途中で肩を強く捕まれた。

「あ？」

掴んだ相手を見ると硬直した。ゴリラのような看護婦がいた。

「貴方…：ガラス代と騒ぎを起こした件についてタツプリとお話しないかねえ？」

ゴリラのような顔で凄まれて垣根は段々と顔を青くなっていき、木原達の方へ向くが、顔を逸らされた。

「それにイケメンねえ……気に入ったわあ」

垣根は瞬時に思った。

(こいつヤベエ！別の意味で犯られる！)

そう思ってる間にもズルズル引つ張られる。

(ちよつ！お前ら顔そらしてんじゃねえぞ！誰でもいいから助けてくれええええ！！)

「あの…金はいくらでも払うんで返してもらえんでしょうか？」

「却下」

ニコリと凄みのある笑顔で言われて、どこかへ連れ込まれていく。相変わらず彼らは見て見ぬふりをしている。

「ああああ！！！テメエらああ覚えてろよおおおおお！！！！」

垣根の叫び声も虚しく消えていった。

「あいつは良い奴だった。勇敢に戦って犠牲になんたんだ。無駄にはしねえよ、うん」

そんな光景をみて木原がシミジミと言いながら合掌した。

他の者達も。

く病院では静かにしましょう（後書き）

まあなんていうか垣根哀れですね。

く仲間だからこそここにいてく（前書き）

のメンバーが登場します。

く仲間だからここにいて

パチリと目が覚めた。

一通り辺りを見渡すと昔に見た光景と同じだった。

病院の風景にそっと溜息をつく。

窓を見ると日差しが強く、眩しい。

携帯を見るともう日付が変わっている。

「4月8日……」

ボソリと呟く。そして昨日何があったか思い出して把握して

「打ち止めっ……!!」

上体を起こしたが痛みが走った。

しかし、足元に重みがあること気付いて見てみると、そこにはスヤスヤと気持ち良く寝ている小さな少女がいた。

「……無事だったってことはあいつらが何とかしてくれたのね」

打ち止めのちゃん、とあほ毛のついた頭をそっと撫でる。

「うん」と気持ち良さそうに擦り付けてくるのがまたかわいらしい。

麦野も「何この子？めっちゃくちゃかわいいんだけど？」などと癒されてるくらいだ。

この安心した顔を見ると自分の不甲斐なさがどうでもよくなるくらいに吹き飛んでいるほどホツとしている。

「まっ一件落着いて事かしらーん？」

暗部活動もあるが、またいつもの日常に戻る。

そう考えただけでも笑みがこぼれる。

「さあて、まず銀時ほこさないと気が済まないしねえ」

それから凶悪な笑みに変わる。

電話とメールの件についてだ。銀時をどうぼこすか考えているとガラツと開ける音が聞こえた。

「目が覚めたようだね。それにまさかこの子がここにいたのは少し驚いたよ」

「冥土返しか」

医師、冥土返しが様子を見に来てくれたようだ。

「この子……何も覚えてないはずなのに君の元へ来るってことは奇跡に近いね」

「それとも君達の印象が強すぎて彼女の心に残っていたかもしれない。非科学的だけど」

カエル顔を綻ばせながら打ち止めを見る。

麦野は

「心にか……」

そう呟いて緩ませていると本題に入る。

「あの後どうなった？あんだ知ってるんでしょ？」

解決したのは良いとしてその後が気になっていたのだ。実験はどうなったのか。彼らはちゃんと無事なのか。

「今回の件、上に知られてしまったみたいだね、実験は完全に中止。芳川君：だったかね？彼女含めた研究員は解雇。研究所は解散したよ」

実験は完全に中止になったと聞いてさらに安心した麦野だったが中止になったのを具体的に聞く。

「無能力者の上条君に負けた後、銀時君がこの子のウイルスを解除してくれたみたいだね」

「！」

驚愕した。まさか本当に無能力者に負けるとは。まさか銀時はこうなるシナリオを考えていたのかと思わず顔に出してしまった。そして最後にやってくれたのはやはり銀時だった。

それを聞いただけで本当に終わったのだと実感する。

「それで、銀時達はどっしてる？」

更に無事を確認する。

「ああ……彼らは無事だよ。だけど」

麦野は怪訝な顔で見つめる。何かあったのかと。

「銀時君は……常に最強では無くなったってところかな」

「は……？」

そして冥土返しからの話を全部聞いている内も言葉を失っていた。

ようやく出た言葉は

「銀時の部屋はどこだっ?!」

部屋の場所だった。

「彼の部屋ならこの階の一番奥にあるよ」

それを聞いてすぐにベットから離れようとしたが、ドタバタと騒がしい音が聞こえてきて、乱暴にドアが開かれた。

「」「麦野っ!?!」「」「」

「あ、あんた達……!」

そこにいたのは『アイテム』のメンバーがいた。

「実験は中止か……結果オーライだが……」

アジトに帰った垣根は冷静に呟いたが心の中はボロボロだった。

「あんの雌ゴリラ……この俺に最大の黒歴史を与えやがって……」
何をされたのか思い出したくないほどに唇を噛み締める。

「それにしても……俺がもう少し早くきてればよ、あいつは……」
「そう悔やんでも仕方ないんじゃない？」

途中で遮られそつちを見るとそこには心理定規がいた。

「お前もいたのかよ……」

ボソツと吐いたのが聞こえたのか彼女はクスリと笑っていた。

「失礼ね。それでも上からの情報を仕入れてきたのよ？」

「また援交紛いのことしてきたのか？」

「違うわよ。話を聞いているだけよ」

「ホテルで話し相手たあ随分都合がいいこつたな」

彼女の行動はホテルに連れ込み話し合い、情報を仕入れるのが主だ。

垣根はどうでも良さそうに言うが心理定規が茶化す。

「それとも嫉妬でもしてくれたのかしら？」

「はあ？アホかお前」

それに対しても呆れたように答える。

「まっいいわ。仕入れたのは…あなたが一番気にしている第一位の現在の状況」

心理定規が真面目に切り替えたところで垣根は漸く耳を傾ける。

それは病院行けばわかることなのだが、いち早くどこよりも手に入る情報だ。今聞いたとしても損はない。

「とりあえず、問題だった言語機能と計算能力は戻ったらしいわよ
それを聞くと」「そうか」と穏やかに言う。

「ただ、制限付きだそうよ」

「何？」

制限付きという言葉に突っ掛かる。

「彼の首にチョーカーって言うのかしら？クローン達の力が送られる電極みたいのがつけられたらしいの。バッテリー式みたいでね、日常生活で持って約三日。能力使っちゃえば30分が限界だって」
クローンを使うということも冥土返しの話しでわかってはいたが、まさかの制限付き。彼女らにも限界があるのだろう。素直に助かったことに喜ぶべきだが、何故かそれどころではなく絶句してしまっ

た。
つまり彼は四六時中、能力を使えない。まあ殆どとして使わないだろうが、その状態ならばいざという時には非常にまずくなる。

「……だが奴は能力なしでも」

能力なしでも最強クラスを誇る第一位だ。問題ないと思ったが、心理定規の言葉で崩れた。

「能力使わなければ、彼は杖付きの無能力者」

杖付き。これさえなければどんなに楽に考えられたかわからない。

「ここまで言えばわかると思っけど頭蓋骨の損傷が原因が殆どね」

そこまで聞いた瞬間、垣根は考えるのをやめた。

「クツ……クク」

「ハハツヒヤハハハ！！ぎヤハハハハハハハ！！！上等じゃねえかクソ野郎オオオオオ！！！！」

笑って笑って叫びだした垣根に心理定規はゾクツと恐怖した。

「これで、守ってやらなきゃならねえことが増えたなあ」

「これ以上地獄に落とすわけにはいかねえ」

スツキリしたかのように吐き出した。

「ねえ」

少しビクつきながらも聞きたいことがあった。

「今なら第一位になれると思わないの？なりたいたいと思わないの？なったらアレイスターの交渉権を……」

ゴシヤア！！

言い切る前に何か物が潰れた音が聞こえた。

「何のために三つの組織が同盟組んでると思ってるやがる？」

ギロリと睨む。

「『アイテム』、『スクール』そして『ハウンド・ドッグ』。これはあいつの家族やつてる俺達リーダーあつての許された同盟だろうが」

この三つは木原、麦野、垣根によって形成された組織。そして上にも認められた三組織協定同盟も受理されている。

「第一位狙う？馬鹿馬鹿しい……んなもん、こんな出会いなかったらとっくの昔に狙ってたんだよ」

「それとも何だ？この同盟が気に要らなくなった奴がいるのか、そう思い始めてんのかだな」

そう言うってことはそうなんだろう？

人を殺せる殺気を放って睨む垣根。

「もし……その組織のどれかにいるとしたら……？」

見たこともない垣根の表情に心理定規らしくない、恐怖に震えて聞くど、

「わかってんだろが、そいつがその組織の一つでも危害加えてみる」

「仲間だろが、なんだろが関係ねえ」

「この俺が」

「ブチ、殺す」

ただ、それだけだと言い放った。

「もし仮に私がそうだとしたらどうするの?」

汗をかきながらもニヤリと笑う。

その理由は彼女と彼は親密に近い関係だと彼女自身が自負しているからだ。

だが、彼の返ってきた答えは

「お前、今ここで愉快的な死体になりてえんだな?」

ニヤリとたった今からでもやると言いたげな顔をしていた。

「望みどおりブチ殺してやってもいいんだぜ?」

これに対して彼女は

「ふ、不満な、んか、もってるわけないじゃない!」

全力で否定した。

「テメエは俺を甘く見すぎだ」

「テメエの能力で、そんな小細工で通用するってレベルを遥かに越えてんだよ、俺は」

そう言ってアジトから出ようとする。

「もし、銀時だけじゃなく、麦野や木原んとこ狙ってみろ。本気で殺すぞ」

他のやつらにも言っておけよ。とドラドラと片手を挙げて出ていった。

心理定規はヘタリとその場に座り込んで暫く動けなかった。

麦野は少し動揺してしていた。暗部での情報は早い。ただ今回の件にしては早過ぎると思ったのだ。よほどの実験の中止は影響を受けたのだろう。

それに『アイテム』のメンバーが来てるのがこれではっきりとわかる。

そんな時一人の少女が麦野に対して怒った。

「何で、超頼ってくれなかったんですか……！」

「絹旗……でも、特にあんたは……」

絹旗最愛。レベル4の空素装甲

かつて行われた実験で、置き去り（チャイルド・エラー）として行われた被験者でその実験の名は暗闇の5月計画と呼ばれた。

学園都市最強の能力者、一方通行である坂田銀時の演算パターンを参考に能力者の自分だけの現実の最適化、能力者の性能を向上させるプロジェクト。暗部ではかなり有名な計画である。その銀時の演算と精神面の一部を意図的に植え付けられた一人が、絹旗だ。

そのせいで生活は目茶苦茶。挙げ句にはこの世界に墮ちることになってしまった。

「憎い、超憎い、恨んでいってそうやって私は今まで生きてきました……あの人と会うまでは」

「……！」

「あなた…銀時に会ったの!？」

絹旗の発言で他のメンバーの滝壺^{たきつぼりこう}理后とフレンドは驚くが、一番驚いたのは麦野だった。

絹旗は頷く。

「三日前に偶然会ったんです」

「実験開始の日……」

三日前とのことに麦野はそう呟いた。

その日絹旗は上機嫌に歩いていた。自分の欲しかったDVDボックスの入った袋を手に持って。

中身はB級、C級といったもの、絹旗は少し変わった趣味を持っていた。

（麦野は無理だとしても、滝壺さんや、フレンドにはこれがいかに超面白いかわからせないといけませんね）

そして自分の趣味を他人にも押し付けようとしている。

しかし、その上機嫌はすぐに終わってしまった。

絹旗に目に写ったのは路地裏から出てきた白髪。

あの目立つ白髪は絹旗は一人しか思いつかない。

「だ、第一位イイイイイイイイイイイイイイイイイイ！……！！！！！」

ダダダダダッとそれに向かって猛スピードで向かう。

「ああ？」

振り向いたと同時にブオンと何かを絹旗が振り落としていた。

「チツ！」

すぐに反射に切替えてそれに備える。

バキッ！！！！

振り落とされたものはポロポロに砕けた。

「テメエ……………何者だよゴラア？」

いきなり襲撃してきた絹旗を睨む。彼女は下を向いて口を動かす。

「……………で」

「ハア？」

よく聞き取れずに眉間を寄せていると

「あなたのせいで！！私は！！私はっ！！！！」

ポロポロと涙いっぱい前を向いて叫んだ。

「あなたがいなければあの実験は行われなかった！！！！あなたがいなければ私はっ！！！！普通に学校行ったりとか友達作ったり、普通の生活ができたハズなんですよオオオオオ！！！！」

周りは銀時と絹旗に視線を集めて騒然としている。

その中で彼女はぐしゃぐしゃの状態で叫んだのだ。

銀時のとつた行動は

ぐいっと彼女の手を引っ張って一目のつかないところに向かっていった。

そして路地裏。

「っーかよ、その実験って何なんだよ？余りの出来事にさすがの銀さんもついてこれないんですけど？」

銀時は急すぎてイマイチ状況を飲みこんでいなかった。

「超とぼけないでください！！あなたが能力の提供したくせに！！」

「それで！私は、あなたの精神面と能力の一部を強制的に埋め込まれた！！」

徐々に話し始める絹旗に動揺せず黙って聞いている。

まとめて言えば自身の能力で能力者の向上させる。そのために絹旗が言った精神面と能力を埋め込ませる。

ようやく彼女が自分をせめている理由がわかった銀時。先程叫んだときの口調も納得がいく。しかし、

「待て待て待て。そんな実験……俺アまじで知らねエンだ」

銀時は本当に初めて知ったのだ。

能力の提供したのは覚えがあるが、そんな風には教えられていなかった。

でもそんな実験があったから絹旗はこうやって自分のところへ襲撃してきたのだ。

事實は曲げられない。

「……………他にもいるのか？お前以外に」

コクン、と頷かれた。

「そうか。知らねエで済まされねエよな。こんな事知ってたらぶっ潰してたのによ」

「え？知ってたから……………協力してたんじゃないかなかったですか？」

本当に知らなかったようなそぶりに目を真っ赤にしながらも絹旗は思わずキョトンとしてしまった。

「んなわけあるかよ……………俺はな、目の前で誰かが傷つくのは……………ましてや俺のせいで傷つくのは見たくねエンだよ」

銀時は否定して苦笑しながら、絹旗を見る。

「すまねエなんて言わねエ。言葉一つで解決できるレベルじゃねエしな。……………そのかわり」

こころで一息つく。

「気が済むまで俺を恨め。憎め。俺はそれを背負ってテメエを守ってやる」

銀時は決めた。絹旗は自分のおかげでそうなってしまったのだから、背負って彼女を守ると決めたのだ。

「あなたに守られる義務なんか……！」

「お前はそのままでもいい」

絹旗は続けられなかった。銀時が遮ったからではなく

「俺は俺のルールで勝手にやって生きてんだ。まっ償いだと思ってくれりゃあいい」

「守ると決めたモンは最後まで守り通す、そう決めてんだよ」

嘘は見えない真剣な眼差しに何もいえなかったからだ。

「また襲うかもしれないですよ？」

まだ憎いはずなのに、何故か冗談まじり聞いてしまつ絹旗。

「構わねエよ。それでも気がすまねエなら殺す気できたっていいぜ。何回でも。俺は何度でも受け止めてお前を救ってやる」

銀時もそんな雰囲気を感じとつたのか怠そうに言った。

「あなたを恨んでいる私を救うなんて超馬鹿なんじゃないですか」

根本的にこんな展開はありえないのだ。

絹旗は自ら手を銀時の前に差し出す。

「俺を恨むお前がそれを望むのも大概だと思っぜ」

フツと鼻で笑ってその細い手を握る。

こうして銀時と絹旗は約束を交わしたのだ。

「私は……だからあの人を信じていこうと思います。超憎みながら」

「……………絹旗」

なりゆきを話してくれた絹旗に麦野は微笑んだ。

「麦野があの人を守ろうとしているのが超わかった気がします」

麦野が何故そこまでして無理をするのか、彼女自身わかってしまったのかもしれない。

「まっ家族なんだから当然でしょ」

麦野はそう言う。

「それだけじゃない。あの方は超優し過ぎるんです。だからこそこ

ちら側に引き込んではいけない」

絹旗は自分でそう感じたのだ。今回の件で。

「それに、麦野はもう無理しないと超約束してください」

そしてジッと麦野を見つめる。

「守ろうとするのはあなただけじゃないんですから。私も守られるばかりではなく、守りたいんです」

決心がついた絹旗は止まらない。

「暗部組織に無駄な信頼関係はいらなとか超関係ない。私達は私達です」

「それ以前に私はアイテムを家族だと思ってるんですから。家族として、仲間としてもっと頼ることを約束してください」

「まっ最後まで麦野についてくってわけよ」

「むぎの…一人で頑張るのは私は応援できない。だから、みんなを支え合っっていこう？」

絹旗が言ったのを始め、今まで黙っていた滝壺やフレンドも軟らかな笑みで告げた。

麦野は

「ありがとう……」

嬉し涙を流していた。彼ら以外にもこんな近くにも大切なものがないで、こんなにも慕われているのだから素直に感謝した。

「こんな、駄目なリーダーだけど、よろしくね？」

三人は直ぐに頷いた。

「うっ……いい話ですなあってミサカはミサカは貰い、グスツ……泣きを……」

いきなり今まで該当しなかった声が聞こえてその根源である麦野の足元を見ていると、目に一杯に涙を溜めた打ち止めがいた。

「ラ、打ち止めちゃん？何時から起きてたのかなあ？」

麦野が何だか嫌な予感を感じて冷や汗を流す。

「『銀時の部屋はどこだっ?!』ってところからだよってミサカはミサカは事実をぶっちゃけてみる！」

「最初っからじゃねえかああああ!!!」

嫌な予感ハ的中した。だがそれだけではなかった。

「あとね、ミサカネットワークMNWで共感しちゃったから二万人の妹達が感動しちゃって大変なのってさらに打ち明けてみる！」

「ああああ！最悪だああああ!!!今すぐ消せええええ!!!」

自分の醜態を全妹達に知られて必死に打ち止めの肩をガクンガクンと揺らす。

「あわわわわ…やめてえってミサカはミサカは…ふわああああ」
などと聞こえてくるがお構いなしに続ける。

他の者はこの苦笑しているが、滝壺は「むぎの、楽しそうだね」と一人だけズレていた。

それに対してアイテムの二人はいつもと同じことなので動じない。

「賑やかな事は別に構わないがね……彼の部屋には行かないのかい？」

冥土返しが声をかけると麦野がハッと正気に戻って打ち止めを離す。打ち止めは「ふにゃあ…」とパタッとベットに倒れ込む。

「行くわ。あんたらは？」

麦野は即答して彼女達に聞く。

「」「」行きますよ」「」

彼女達も何も怠ることなく頷く。麦野は「そう」とだけ言って打ち止めを抱き上げる。

「ああ、そうそう」

行こうとしていた時に呼び止められた。

「妹達……各国に散らばることになってね。学園都市に残るのはほんの数人だけだよ」

調整しなければならないから私は行くよ

と伝えるだけ伝えて、冥土返しは部屋から出ていった。

「各国か……まっ元気にいてされくれれば、こちとら満足なんだけど」

麦野は妹達がこれからも無事あることを祈って、アイテムのメンバーと共に銀時のいる方へと向かった。

く仲間だからこそここにいるく（後書き）

次は銀時の住居先ですね。

そして、銀時と麦野と垣根が……

「ハーレムと言う名の死亡フラグは主人公の宿命」(前書き)

居候先はあの人とこですよ」

「ハーレムと言う名の死亡フラグは主人公の宿命」

垣根は路地裏にいた。まわりにはバタバタと無能力者が集まる武装スキル集団アウトが倒れていた。

「はあ、なんでこんなところ歩いてんだかなあ。俺あ」

呻き声も気にせずに進む。何故彼の周りに倒れているのかと言
うと、

「あ、あのっ助けてくれてありがとうございます」

頭に花飾りを着けて、制服の袖には風紀委員のマークジャッジメントをつけている少女が絡まれているのをたまたま見かけたので助けたのだ。

「ああ… ったく、善人気取りは俺に合わねえっての」

クシャリと髪を軽く触ったあと、つまらなそうな顔をしている。

「風紀委員なら後始末頼んだは。警備員アンチスキルでも何でも呼べばいい。俺は急いでんだ。行かせてもらうぜ」

早くこの場から垣根は立ち去ろうとする。

「待ってくださいー！」

大声で後ろから呼び止められる。

「私は初春飾利ういはるかきりって言います。貴方の名前を教えてくださいっ！！」

少女、初春が垣根に名前を聞く。そこでようやく振り向いた。

「……………垣根帝督だ」

たっぷりと間を開けた後、漸く自分の名前を言う。

「垣根さんですか。…………改めて助けてくれてありがとうございます！……今度お礼をさせていただきます！……」

どうやら初春は自分の正体を知らないらしい。恐怖に怯えている雰囲気には見られなかったからだ。

垣根もこんなに感謝されたことはあまりなかったため少し恥ずかしくなり、

「……………気い向いたらな」

そっぽを向いてそのまま歩いて行った。

初春は「あっこれをなんとかしなくちゃっ！」と仕事に移した。

まだ差ほど離れてはいなかった垣根は初春の行動を見ていた。

「初春飾利……………ねえ。何か見てると歩く生け花みてえだな」

クツクツと笑いを堪えると、今度会った時どうかからおうかねえ、と考えながら、行く先である病院へとゆっくり歩いていった。

病院では、麦野達は銀時の部屋の前まで来ていた。

そして麦野がドアを開けると、そこにはまだ誰もおらず、ベッドには静かに眠る銀時の姿があった。

「まったく、相変わらず見合わない寝顔しているわねえ」

普段だらしなく、尚且つ見た目悪党面な銀時だ。

ギャップはかなり激しい。麦野はそれを散々弄んだことを思いだす。

三人いや四人の反応を見る。

いつの間にか気づいたのか、抱かれたままキラキラと目を輝かせて銀時を見つめる打ち止めと呆気に喰らったアイテムのメンバー。

四人が思うことはただ一つ。

「かわいい」「」「」

この時の四人は団結していたのだ。

得に

「会った時は超超超ム力つく顔してなのに、なんだなんだよなンんですかアアアア！！！その寝顔はアアアアア！?!?!?!?」

「絹旗、口調が銀時になってるわよ（笑）」

絹旗が興奮して、またもや銀時口調になってしまった。

麦野はそれがおかしくて笑っている。

フレндаと滝壺、麦野から降りた打ち止めは彼に近づいてすでに好き勝手やっていた。

「やわらかい……」

「うわっサラサラ……一体、どうやってたらそうなる訳よ？」

「それに細かい割には何気にいい体付きしてるってミサカはミサカはこの人の体に乗っかってみたり！！」

「ちよっ！！私も超混ぜてください！！！！」

後から興奮していた絹旗も混ぜ違ってギヤーギヤーと騒ぎ立てる。

「何か面白い光景よねー」

少女四人に囲まれて散々弄ばれているのだおもしろくない訳がない。

「むぎの」

滝壺が急に振り向く。

「ん？どうした滝壺？」

麦野が返すと

「持ち帰っていい？」

「……………は？」

とんでもない発言をした。麦野の含めて全員が固まった。

我に返った麦野はブンブンと首を振って叫んだ。

「いやいやいや。ダメだろ！！何考えてんのさ！！」

「じゃあ、らすとおーだーも一緒に」

却下されたが、今度は打ち止めを胸に引き寄せて言った。「むぎぢゅ」と何気にある胸に押し込まれて打ち止めはさらに固まった。

「それはもつと駄目だって！ってかどうしてそうなる！？」

「らすとおーだーと、ぎんときを抱きまくらにしたい」

「羨ま……………じゃねえし！！そんな状態じゃないだろうがあああああ……………！！！！」

「むう〜第一位のかわいい寝顔を抱きまくら……………超いいですね」

「き〜ぬ〜は〜た〜？お前まで滝壺に影響されんな！」

滝壺に続いて絹旗までもが入ってきた。それに対してどっと疲れが出ていると固まってるフレンドを見る。

「まさかあんたも……」

「いやっ私は別に……」

少し赤くなってもじもじしているのを見て

お前もかよ！！

心の中で叫んだ。

「どうしてこうなった……」

まだ騒ぎ声が聞こえる中、麦野は疲れた顔をしていた。

そうしている内に時間は随分と過ぎて行った。

周りは夕焼けに赤く染まっている。三人は帰って行き、残ったのは麦野と打ち止めのみ。

麦野は銀時を見つめる。

「銀時……」

彼女が手を伸ばした先は首元についている命綱、黒いチョーカー。

それにそつと触れる。

「あのね、ミサカ達はようやくこの人の力になれることが嬉しいんだってミサカはミサカは心境を吐露してみる」
打ち止めは静かに話しはじめた。

「例え、どんなに微弱だとしても、この人を救えるならミサカは、ミサカ達はどんな壁があろうとも立ち向かっていけるよ！ってミサカはミサカは胸を張って意気込んでみる！」

「……打ち止め」

麦野は思った。この子達は無理してまでも、彼の役に立とうとするだろう。打ち止めの話しを聞いて容易にそれがわかる。だから

「あんたらも私達の守るカテゴリーに入ってたんだから、無理は禁物。すぐに私達に頼ること。いい？」

自分達も協力するから無理しないでと懇願する。

「……うん！」

それに打ち止めは笑顔で答えた。

「よしよし……いい子いい子」

麦野はまるで母親のように撫で続けた。本人に言ったら確実に消し飛ばされるが。

「そろそろ戻る？」

麦野が言つと頷いた。

「じゃっ行きましょうか」

打ち止めの手を取ってドアに向かうと、丁度よく開かれた。

しかもぞろぞろと入ってきた。

「ここにいたのかよ」

木原の声が聞こえた。

メンバーを見ると木原、垣根、上条、美琴、芳川ともう一人、ジャージを来た女がいた。

「なんだか、知らないのがいるんだけど？」

見知った顔が多いがあと、二人はわからない。

その二人を見る。

「俺は上条当麻って言いますよ」

「お前が上条……」

上条の顔をじっくりと見る。

上条は「綺麗な女性に見られると照れるんでせうが……」とデレデレになっている。

「あー！！実験止めてくれたヒーローさんだね！？

ミサカは打ち止めって言うよってミサカはミサカはもう一人のヒーローさんに挨拶してみる！」

麦野の脇でぴよんぴよん跳ねながら上条に挨拶した。

「ヒーローって……」

彼は照れながらも苦笑している。

「ううん。どんな形であつても貴方はあの人を含め実験止めてくれたから……それにミサカ達にとつてもあの人もヒーローだから感謝してるし、協力してくれた皆には本当にしきりないほどの感謝で一杯だよってミサカはミサカは深々と頭を下げてみたり」

打ち止めの精一杯の感謝を受けた者達を代表して木原が口を開く。

「まっこれからも大変だろうが、俺らも頑張っからよ。まあ……その気持ちは素直に受けとつておくれ」

とても朗らかな感じになっていると、麦野はもう一人の方に目を向ける。

その視線に気付いた女性も紹介を始めた。

「あたしは黄泉川愛穂^{よみかわあいほ}。上条んとこの高校で教師やってるじゃんよ。あと、警備員もな」

黄泉川は軽く挨拶をすると、芳川が続ける。

「彼女とは昔からの知り合いでね、これから銀時と打ち止めの世話をしてくれるのよ。ついでに私のことも」

「桔梗。お前も働くんじゃんよ」

「嫌よ。面倒くさい」

そんな軽い感じで二人の会話を聞いていると木原に向けてた。

「まっそういうことだ。警備員の家で銀時、打ち止め、芳川が居候ってことだ。ある程度っていつか、かなり信頼できつから問題はねえ」

木原がスムーズに話しを進めるが、ピクリと麦野は反応した。

「男一人だと……?」

「あーあー……間違いは起きねえって」

麦野が銀時に好意を向けていることを知っているのは垣根だけ。木原は知らないのだ。

垣根は麦野の耳元に小声で呟く。

その垣根の行動に気に食わないのが一人いた。

「ちよつとビ……いや御坂さん?なんでそんなビリビリしてるんですか!?!」

上条はビクツと美琴を見るが、バチリと無言で帯電させている。

「へー」

木原は何か気付いた。

「ていとくんよお、超電磁砲がご立腹だぜえ？」

「それいい加減やめろ！！　ってなんで怒ってんだよ？」

はあ…と溜息つきながら近づいて宥める。

「何でか知らねえが……落ち着け。な？」

ナデナデとまるで子供をあやすように頭を撫でると「ふにゃっ／＼」と弱々しくなっていていつのまにか静まっていた。

「まさかこんなのを見せつけられるとは……不幸だ」

上条さんもそういうことしたい女性を見つけたいですよ、といじけているが垣根は何のこと言ってるのかさっぱりわからないため、とりあえず無視した。

「お姉様かわいってミサカはミサカはあまりにウブなお姉様に抱き着いてみる！」

「わっ！」

そしてロケットのように突っ込んできた打ち止めを危なっかしながらも受け止めた。

「さて麦野も元気そうだし、銀時はまだ目覚めなさそうだな」

木原を含め心配そうに銀時を見つめている。

「今はゆっくり休ませようや」

いつもの銀時に戻るようによ

そう言って全員連れて出ていこうとするが、黄泉川に止められる。

「待つじゃん！」

その声に全員、彼女に視線を向ける。

「垣根と麦野だったよな？学校に通うつもりないか？」

「「はあ？」」

突然の言葉に疑問だけが残った。

「立場上、難しいのはわかってる。だけど、お前らは子供じゃないよ。子供なら子供なりに楽しく過ごしてほしい」

垣根と麦野と銀時は見た目、上条と同じくらいだ。

ならば、学校を通して友達を作つてどこにでもいるような生活を送つてほしい。言葉にしなくても黄泉川の目からはそんな意思がはつきりと見える。

「……俺達みてえなクソ野郎はそんなん浸っちゃあいけねえんだよ。」

血で汚れまくった俺達が今更そんなところ行けるかよ」

垣根の言う通りだと麦野は思った。血で汚れ、悪党の道を進んだ自分達が何も知らない奴らと過ごして良いはずがないと。

「あたしは、どんな闇を抱えようが、どんなに闇が深いだろうが、お前達を絶対に諦めない」

しかし、黄泉川がそれを許さなかった。

闇に潜んでいたとしても手を差し延べて引きずりだす。それが黄泉川愛穂という人間。

「……いいんじゃないか？」

賛同する木原に二人は驚愕して振り向く。

「誰も脱退しろとは言わねえ。俺のほうで調整してやる。お前らにも楽しく生きてもらいてえんだよ」

今更だけどよつと軽く笑う。

「いくら汚れてても、お前らの側にいてくれる奴はもういるんじゃないのか」

それを合図に

「俺にはお前達の生き方は否定できない。だけど、それ以外俺達と変わらねえじゃねえか。俺とお前はもう友達みてえなもんだろ。わからねえところはいくらでもサポートしてやる」

上条がポンと垣根の肩を叩く。

「ねえ沈利。今度、後輩とか友達紹介するから一緒に遊んだりして楽しくやるっよ?」

美琴も麦野の手を握る。

「……………」

沈黙の末、出した答えは

「あー参ったはこりゃあ」

垣根がわざとらしく降参のポーズをする。

麦野はそれをみて、決まりだなと呟く。

「行つてやるよ、学校つてもんにな」

二人ともそれ相応の笑顔を見せる。

黄泉川も美琴も上条も芳川も木原も全員笑つ。

「ただ、条件がある」

垣根が話す。黄泉川は聞く。

「二人じゃなく、三人な」

それを聞いて黄泉川はニコリと笑つた。

「ああ、了解したじゃんよ」

くハーレムと言う名の死亡フラグは主人公の宿命く（後書き）

学校行きが決定しました。

っていうか垣根は美琴からフラグが！？

学校に入る前に

銀時と10032号と再び絹旗ちゃんの話です。

く慣れない奴で絡むのはすべくには慣れないく (前書き)

あんまり長くないと思います。

く慣れない奴で絡むのはすぐには慣れないく

実験中止から三日がたった。

4月10日、午前3時。

この時間帯は普通ならば誰もが寝ている時間だ。

しかし、とある病室で起きているのがいた。

「……………」

無言。なぜなら椅子に座り、壁にもたれている人物に無言で驚いている。

ゴシゴシと目を擦って再び見る。

やっぱりいた。

暗くてよく見えないが自分以外の誰かがいるのはわかった。

(オイオイオイオイオイオイオイ……何だよこれ……まっまままさか、ゆ、ゆ、ゆ幽霊とかじゃねエよな!?)

ブルブルと震えながらも起き上がろうとしたが

ガターン

「いつ!?!?」

上手く起きれず、床に落ちてしまう。

幸い椅子からの動きはない。

(起きろ起きろ起きろオオオオ!! 奴が気づく前に起きてくれエエ
エエエ!!!)

何とか自立で立とうとしたがモコツと何かが盛り上がった。

(立つってそこじゃネエエエ!! 何に反応して起ってんだア?! 俺
の息子はアアアア?!?!?)

力を入れるとここを間違えたのか、どうやら股間にあるものについて
しまったようだ。

(つうか、何でこんなに動けないの? たしかに頭に弾ぶち込まれた
けどさア。その影響か? 大体それで生きてンのも不思議だがなア)

打ち止めを救うためにウィルス解除に奔走して天井に打たれてから、
それからは余り覚えていない。

(.....どオやら情報を集めねエといけねエらしいな)

今の自分には情報が足りな過ぎる。明けた時、実行しなければいけ
ないが、

(その前にこの金縛りみてエな状況を何とかしないと)

まずはこれを何とかしなければならぬ。

そう考えていると椅子から声が聞こえてきた。

「んん……………」

ゴシゴシと目を擦って目を開け、ベッドのほうを寝ぼけガチに見ているようだ。

そして気付く。

「あ、あれ！？超第一位がいません！？」

大声で叫んだ。

叫んだ人物から銀時の姿は見えていないようだ。

すぐ近くで倒れているのに。

しかし銀時の心中は

(ヒッ！！ななななンか動きだしたぞ！？オイ！？)

かなりビビっていた。

それは一瞬で終わる。

(ン？でも待て。やけにリアルなんだが…？それに『超』とかがどっかで聞いた時ある口癖だな)

心当たりがあり引つかかっていると

「とりあえず、麦野のところへ……………」

電気もつけずに飛びだそうとしている。

(麦野ンとこだア？)

そう聞こえた時には声を張り上げた。

「ちょっと待てエー！！俺ここにいるからアー！！」

それはピタツと止まる。

よく見えないため、明かりをつけると、床に倒れていた。

「あ、いた」

それは声を出す。そして明かりがついたので銀時も今までいたのが何かわかった。

「お前は……」

見えたのはこの前、襲撃してきた少女。

「やっと目が覚めたんですね」

どこかホツとしたような声。

「あっそういえば紹介が超遅くなりましたね。私は絹旗最愛です。あなたの名前は超知ってますよ」

「お前、何でいんの？」

普通に話しかけてきたというか、普通に夜中に人の病室にいるのに疑問が湧いた。

「あゝその前に俺こんなだから誰か呼んできてもらえない？」

その前にいつまでも倒れた状態は嫌なんで呼んでもらおうと声をかけた。

「あつそれなら私に超お任せを！」

何故か自信満々に近寄って来る絹旗。

そして

グン！！

「おオっ！？」

銀時の体は軽々と持ち上げられた。

お姫様抱っこで。

「目茶苦茶気持ちわりイ光景なんだけど。てかよくそんな力あるな」
この光景はおかしいと思いつつも、絹旗にこんな力があるのに驚いた。

「私の能力は窒素装甲って行って、あなたの防御性の演算をパターン化したものですよ。それに窒素を纏ってしまえばこれくらいどうってことないんです」

「ふうん……」

絹旗の大体の能力を把握して適当に返す。

「とりあえず、ベッドに降ろしてくれない？」

それにいつまでもこの状態は恥ずかしいのでそう頼むと絹旗はすぐに頷いてベッドに降ろす。

「で、俺がどうなってつか知っているのか？」

自分が今どうやって生きられるのかを触れると、彼女は躊躇しながらも自分が持っている情報を話した。

首元についた電極、制限付きや妹達の脳波リンクでの援助。普通時は杖なしでは立てないことも。ついで実験がどうなったのかも。

（暗部のことは……伏せてたほうが、超良さそうですね）

余計なことは喋らず麦野とは友達という風にごまかした。

「……………」

彼は無言で命綱を触る。

「妹達が俺の心臓みてエなモンってとこか。……笑えねエ話だ」

その笑う姿は悲しそうなそんな雰囲気は絹旗は感じた。

「お前、帰らなくていいのか？」

銀時はすぐに切り換えた後、絹旗に帰らないのかを聞く。

「いえ、私は帰っても一人ですし……誰かと一緒にいたいんです」

「……そオですか」

今度は彼女が寂しそうな顔をする。銀時は絹旗が置き去りだったのを思い出して一言で返し、ゴロンと寝返り打った。

「それにあなたに話す事があるんです」

そこに絹旗が声をかける。

「なんだ？」

「私は実験で散々いじくられて、親の顔すらどんなのが超忘れてしまったんです。憎い上に、あなたが羨ましいのかもしれない。麦野がいて、第二位がいて、それに超怖い研究者がいるあなたが」

「……………」

銀時は目を閉じて黙っている。

「だから突然ですが妹にしてくれませんか？」

黙って最後まで聞こうとしていたのだが、今ので目を開いてそつちを見た。

そこには至って真面目な顔した絹旗がこつちを見ている。

「は……………？何言っちゃってんですかア？絹旗ちゃん？」

正気なのかお前？と言って驚愕する。

絹旗はニヤリと悪戯めいたように笑う。

「だってそのほうが近くであなたを実験を理由に好き放題できますし、そっちのほうが守りやすいんじゃないですか？」

意地悪い顔を見た銀時は呆れたのか、諦めたように

「お前からしてみりゃあ、こんなクソ野郎を兄貴としていいのかわかる？」

聞こえる最小限の声で呟く。

「そんな超クソ野郎だからこそいいんじゃないですか。さっそく朝起きたら付き合ってもらいますよ！」

それを聞いてニコニコと少女らしい顔を見せて答える。

「あゝもう勝手にしろ。テメエももう寝ろよ」

(やっぱまだそういう風に見るのは馴れそくにねえな)

馬鹿らしくなったのか眠いのか適当に返して欠伸を一つ吐いた後寝ようとするが、ゴソゴソと背中に温もりを感じた。

「何してんの？」

「勝手にしろと言ったので」

この場で入り込むのは絹旗しかない。

銀時が何か言う前に更に口を開く。

「拒否れば、目を覚ました第一位が超かわいい、いたいけな少女に襲いかかってレイプしたことを麦野達に暴露してやりますよ?」

「何、ありもしねえ事をでっちあげようとしてんだお前エエエエエエエ!!! 麦野はやめるオオオオオオオ!!!」

「それが嫌なら、従うしかないですよ」

思わず大声だした銀時に黒い笑みを浮かべる。

「タチ悪いなお前!」

一人でギャーギャー喚いていると、バタバタとコチラに近づく音がしてボタンと開けられた。

「銀時!!!! 目が覚めたん……………だ」

そこにいたのは一番見せたくない麦野が固まってこちらを見ていた。

明かりが点いた部屋。ベッドに絹旗と銀時が寄り添っているように見える光景。

行動に移したの絹旗だ。泣きまねをして麦野に飛び付いた。

「麦野~~~~!!! うっぐすっわああああん!!!! 第一位が、いきなり目が覚めたら襲いだして、うっうっう、超怖かったですよおおおおお!!!!!!!」

その姿にピシヤリと更に動けなくなった銀時にたいして麦野は

「……なんで絹旗がここにいないのは知らないけど部屋の外で待つてくれる？そのゴミを掃除しなくちゃいけないから」

ビキビキと血管が飛び出そうなほど顔を歪ませている。泣きべそ（嘘）かいた絹旗は素直に頷いて部屋から出ていった。

「銀時」

呼ばれて我に返り、顔青くする。どうも弁解できる状態じゃないことは十分に把握できた。それに体は録に動けない。万事休す。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・カ・ク・テ・イ・ね」

バシユウウ！！！！

「ギヤアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

一つの部屋からビーム音と少年の断末魔が聞こえたのだった。

その外ではニヤリとまた黒い笑みを浮かべた少女がいたことも誰も知らない。

く慣れない奴で絡むのはすぐには慣れないく（後書き）

状況的に10032号じゃなくて妻のんが適任になってしまった（笑）

く 愉快的日常はなかなか楽しいく (前書き)

銀時達の愉快的新生活ですよ

く愉快的な日常はなかなか楽しいく

あれから更に一週間が経って銀時はというと

「はい、これは君の木刀。あとは杖は渡したよ」

「あア。サンキューな」

冥土返しから説明を受けて木刀と杖を受けとって立ち上がる。

「何かあつたらすぐに病院に来るんだよ？」

カエル顔で凄まれて若干引きながら「はいはい」と答える。

そして左手で木刀、右手で杖を持ってカツカツと音を立てて出口へ向かう。

その前に妹達二人が見えた。

00001号と100032号である。

「退院おめでとございます銀時。と少し寂しい気持ちで00001号は祝います」

少し気が沈んだ声をだす。

「ったく、もう会えねエわけじゃねエからよ、そんな顔すんなよ」

優しく頭を撫でてから銀時は笑った。

「たまにお前らの様子見に来てやるし、外出とかできたら付き合っ

「やるからさ。元氣出せ」

な？と更に微笑むと一気に顔を赤くして00001号は固まった。

そんな状況を10032号は羨ましく見ている。そして我慢できなかったのか、固まっている00001号を無理矢理どかして頭を銀時に突き出す。

「このミサカにも頭を撫でて下さい！！と10032号は邪魔な0001号をどかして頭を差し出します」

「お……………おオ？」

興奮気味な彼女に一瞬顔を引きずった銀時はとりあえず同じように撫でた。

撫でられて嬉しそうな顔をしている10032号を見た銀時は怪我をさせた事を思い出し複雑な顔をする。

「体の方は……………大丈夫なのか？」

そんな気まずそうな顔をして一旦、撫でていた手を離して問い掛ける。

撫でられていた彼女はまだ物足りなそうな顔をして銀時を見ると質問に答える。

「まあ損害は激しかったのでまだ万全ではないですが、今は全然動けるようになりました。と10032号は平気だと言うことをアピ

「ルします」

「そオか……悪かったな」

ニコリと笑うのを見てホッとする。

「改めて……本当にありがとうございました」

そして更に感謝するように蔓延な笑みを見せられた銀時は頬をポリポリと掻きながら、気恥ずかしそうに「……おオ」と呟いた。

そうして静かだった00001号も混ざって賑やかになってると

「おーい、いつまで外に待たせる気？」

痺れを切らしたのか麦野がこちらへとやってきた。

銀時はそれに気づき、「わりィ、今行く」と伝えて妹達を見る。

「じゃあ、またな」

木刀を麦野に持たせて杖を持ち直してそれだけ言っと、くるりと待っているだろうメンバーの元へと歩く。

それを見て麦野も

「暇あったらまた来るからさ。他の妹達にもよろしくね」

そう告げると銀時の後を追う。

彼女達は彼らの行く先を見つめて笑顔で送った。

「遅い」

病院の外へ出て待ち構えたのは木原、垣根、芳川、打ち止め、黄泉川そして妹となった絹旗。

声をかけたのは木原。不機嫌そうにも言いながら、銀時を迎える。

「ちつと話し込んじゃったよ」

悪気なさそうに銀時は答える。

銀時が目を覚ましてからの一週間はいろいろあった。

木原達の慌ただしい行動や、これからの新生活。今まで味わえなかった学校まで行けるなどと銀時は驚いたが、黄泉川や上条に説得されて渋々頷いた。

(まア、そんな生活も悪くねエかと思っちまってる俺も俺だな)

そんな干渉に浸っていると

「銀時? どうしちゃったのよ? ぼーっとしちゃって」

ぬっと目の前すぐに麦野の顔が近くにあるのに気づいて現実に戻った。

「うおっ!? 顔近エし!!!? ……いや、これから面白くなりそだなと思っただな」

あまりにも近かったため少し退いて驚く。

銀時のあまりの鈍感さに呆れていた。

木原はさらに垣根を見つめて

(そういやあ、こいつもだよな?)

美琴が垣根に好意?を向けていることを垣根自身気づいていないだろう。そんなことを思い出しながら溜息を一つ漏らした。

しかし銀時達を見て不満をもらす二人がいた。

「むう、麦野だけ超ずるいです……ここは妹の私が引き受ける場面のはずなんです」

「ミサカもそれは同じポジションって言っても過言ではないかもってミサカはミサカは憤慨してみたり!!」

ブクーと頬を膨らませて不満顔をみせる絹旗と打ち止め。

芳川と黄泉川はそれを見て呆れながら苦笑している。

「おい、時間間に合わなくなると思っぜ?」

垣根が声をかけると、黄泉川がいち早く携帯を見ると、8時を回っている。

「あー!!!まずいじゃん!?お前ら早く学校行くじゃんよー!!」

固まっている麦野や困惑する銀時、そして呆れ果てた垣根を車に催促して警備員らしからぬスピードで飛ばして行った。

「まったく私達はどうすればいいのかしら？」

取り残されたら芳川は零してのだが、クスクスと笑っている。

打ち止めと絹旗も黄泉川の行動に苦笑している。

「あー俺の方もオフだし、あいつらの学校終わるまでどっかで暇つぶしてるか？」

まさか木原がそんなこと言うとは思えなかったのか芳川は驚く。

「……何だよ？」

怪訝そうな顔で睨んでも、芳川は微笑んだまま。

「いいえ、あなたも前に比べてまた一段と優しくなったんじゃない？」

「けっ……まあ……」

芳川の言葉に否定しようにもできなかつた。自分でも自覚してしまってるからだ。理由はやっぱり

「あいつらのせいだな」

あの三人を拾った時から木原自身も変化していたから。

「あの子達のおかげ……でしょ？」

芳川は指摘すると木原は舌打ちした。

「一々うるせえよお前……ったく、おらっそのチビガキどもも早く乗りやがれや。好きなとこどこでも連れて行ってやらあ」

「「やったー！！」ってミサカはミサカはry」

悪態付きながらも優しい目で見ると木原は本当の父親のようで芳川は

「なんだか、大家族でもできた気分ね」

さらに笑って後を着いていった。

「……遅いですね……事故でもあったのでしょうか？とても心配なのですよー……」

とある学校の教室。1年7組というクラスの教壇には135cmで子供体質で子供地味な服を着た先生、月詠小萌は不安そうな顔している。

生徒達は期待の目でまだか、まだかとキラキラさせている。その理由は先程、

『ビックニュースなのですよ皆さん！！なんとレベル5の中でトップレベルの三人が入ってくるのですよ！そして男女共々喜べ！男二人と女一人ですよー！』

などと口走ってしまっているからだ。

それを聞いたクラス全員に歓声上がる。上条は知っていたため周りに合わせていたが。

予定の30分なっても来ないため、一人オオオオしてしまっている。

しかし、一番気にしているのは上条だった。

何か事件に巻き込まれてしまっているのかと。いくら警備員の黄泉川が傍にいようと、第一位、二位、四位だ。得に裏で動いている垣根と麦野が一番に狙われるだろう。

力は圧倒的でも対策は練ってきているはずだと馬鹿な頭でも考えられてしまう。

そうなれば動かざる負えない。

上条が自ら立ち上がろうとすると

ガラッ

と教室の扉が開いた。

「すみませーん、いろいろあつて遅れましたー」

ここの学ランを纏い、長身の茶髪で端正な顔立ちをした少年が一番に入ってきた。

「はい、第二位で未元物質こと垣根帝督です。好きな物は甘いもん全般でえ、趣味は女漁りです。よろしく」

ゴン！と気持ちいい音はその垣根の頭に響いた。

「最初っから印象悪くすんなっつーの！ごめんねえ、こいつただの馬鹿だから、「ていとくん」呼びでいいから。私は第四位の原子崩しで麦野沈利です。今、老けてると思った奴、前に出る。消し飛ばすから」

そのゲンコツを喰らわした茶髪で綺麗と呼べる少女麦野が入ってくる。

「いてえし、お前より馬鹿じゃねえし！冗談言っただけじゃねえか……てかお前、脅迫してんじゃねえよ」

ていとくんについてはもう突っ込まなかった垣根だった。

いきなり入ってきて紹介し始めたのに騒然としていたクラスはカツ、カツ、という音が入って姿が見えると静まり返った。

「まったく、銀さん抜きで始めんなや。淋しいだろオが」

印象はやっぱり白髪で先天性アルビノで整った顔立ち。スラツとしたこちららも長身な身体に独特な杖で歩く少年。

「どオも。初めましてじゃねエ奴もいますが、そこは置いて。あとはわかンよな？そオです、俺が一方通行こと坂田銀時でエす。」

好きな物はこのクソメルヘンの比にもならねエほどの甘党でさらにはブラックコーヒー好きでエす。
将来、糖分王とカフェイン王の二冠達成させるんで、よろしくお願
いしますウ」

二人よりふざけた挨拶をかました銀時。

トップレベルとは言えない雰囲気クラスはどよめきを隠せていないが、あまりにもフレンドリーなのがよかったのかまた歓声が上がった。

上条と小萌はホッと一段落した。

これから三人による愉快で危険な学園生活が始まるうとしていた。

く 愉快的な日常はなかなか楽しいく (後書き)

これからどう展開していく事やら……。

く一度入った世界は消えないく（前書き）

急な展開！

「一度入った世界は消えない」

「あゝ学校ってえのは意外と面倒くせえところなんだな」

学校が終わり、銀時と麦野と別れて帰順を辿る垣根はのんびりと歩きながら独り言を告げる。

「でも、これが普通なんだよな」

学生で溢れている街を見る。

友達と談笑したり、遊んだりとそれぞれに自分達の楽しい事をして
いる。

こういうのは自分には来ないと思っていたからこそ笑えてくる。闇
に潜み、自分が守りたいものを守るだけに生きる自分にとっては。
だからこうやってそこからへんの変わらない光の連中と同じ境遇が今
日から始まったのだ。

自称気味に笑うしかなかった。

なぜなら

闇である自分が心から求めていた光を得て、それを受け入れたから。
「ハッ、何で俺はこんなに嬉しそうにしてんだ」

まるで手に入れたかった物をもらったガキのようだ、と思うほどの
緩みきった顔をしているから更に笑えてくる。

「本当に、くっだらねえほど楽しいぜ」

これからもこんな生活ができるのかと気分揚々としてしまうのが本当に少年らしい。

そんな気分良く歩いていると

「あら？こんなところでバッテリー会うなんて珍しいわね。その顔だと初登校は楽しかったようね」

見たことのある派手なドレスを来た少女。

「なーんで、てめえがいんだあ？まっさか盛る時間じゃねえよな」

意外な物を見るかのように目を丸くした後、いつものように面倒くさそうに言う。

「だから、そんな事しないわよ。私だって暇な時くらい出かけたりしてるわ」

少女、心理定規は呆れたように答える。

「ふーん、意外だねえ」

垣根は興味なさそうに答えると心理定規はいきなりガツチリと腕を組んできた。

「どうせ、あなたも暇でしょ？ちよつと付き合ってよ」

ピッタリとくっつく彼女に動じず、垣根は嫌そうにする。

「なんでお前の暇つぶしに時間潰されなくちゃいけなんだよ」

何をしても反応しない彼にムツときたのか無理矢理引つ張る。

隣でなんか悲鳴を上げてるが無視。

(他人には鋭いくせに、自分は鈍感なのね)

心理定規はハアとため息をついて垣根を見る。

等の本人は諦めたのか抵抗しないでいる。

「んで、どこに行こうとしてんだ？」

「ん〜っとね……………」

垣根に答える前に彼の携帯から着信が入る。

それを見て顔をしかめる。

「……………何のようだ」

『おや？あなたならわかっているはずですよ？私から掛けてくる事は一つだけじゃないですか』

聞こえたの男の声。スクールに仕事を持ちかけてくる上司だ。

心理定規もすぐそばにいたため、すでに把握している。

『立入禁止学区にある一つのスキルアウトの基地を殲滅してもらおうと思っていたのですが』

男は普通通りのトーンで伝える。

「スクールに回ってくるって事は、それなりに危険な奴らがいるって事なんだろ」

大した事なければわざわざ垣根と言うNo.2がいる組織に依頼してこないと彼は想定している。

「ええ。ですが、状況が変わったんですよ」

「は？」

状況が変わった。その言葉に垣根はまた不審感を表す。

「そこにいたスキルアウト大勢をたった一人で殲滅した者がいるんです。それを貴方に調査して頂きたいと」

「それが本当の依頼なんだな？」

「はい」

垣根は驚きもせず対応した。闇の人間で相当な実力を持っているからそれくらいできるだろうと考えているからだ。

「で？そいつの情報はあんのかよ？」

その一人で殲滅させた人間の情報を得ようと男に問う。

「一人で行動したみたいですが、もう一人いるらしいですね。それに彼の容姿から、上層部から『シルバー』と呼ばれているようです」

彼、と言う事は男。そして上に深く関わっている様子。そう断定している男が声を発する。

『私は見た事はないんですが、歳は20半ばで身長が180手前くらい、そして銀色の髪に紅い目を持った男だそうですよ』

まるで、誰かと似ているようですねと男は笑う。

「……………銀時じゃねえことはわかってるだろうが」

確かに髪と目の色は銀時と同じ感じだが、歳が全然違う。それをわかって言っている男に苛立つ。

男は気にせずに『では、お願いしますよ』と伝えると通話が切れた。

「どうやら、仕事のような」

ちょっと不満な顔しているが、しぶしぶと腕を離す。

自由になった垣根はだるそうに「今回は俺一人みたいだな」と呟く。

「お前は一人でそこらへんうろついてろ」

そして適当に彼女に向かって返すと「出番はなさそうね」と頷いていた。

彼女が違う方向へと歩くのを見て垣根は空を見上げる。

「そうだよな……………こっちにいても、消える事はないんだよなあ」

「最初っからわかってた事なんじゃねえか。どんなに光を浴びても、

闇である俺は所詮、闇にしかならねんだ」

垣根は笑いながら見上げる。何かを決めたように。

「上等だよ、クソつたれ」

垣根自身の覚悟を決めた後、吐き捨てるように伝えられた場所へ向かう。

「はあ、ちっとやりすぎたかもしんない」

黒いスーツを来た、銀色であちこち跳ねている髪。そして死んだような魚で紅い目を持つ青年は、血のついた刀を薙ぎ払うと面白くなさそうに言う。

彼のまわりにはスキルアウトの死体。生きている者は一人もいない。

「まったく、まさかアレイスターがこの身体をリアルに造りあげちゃうとはねー。しかも、性格は全く違くなってるし」

まあ、どうでもいいけど、と鼻をホジリながら歩く。

そして携帯を開いて誰かに電話する。

「もしもーし？終わっちゃったぜ、パートナーちゃん」

『ぎゃはっ！パートナーは名前じゃないし、いい加減やめてくんない？その言い方。キモすぎて鳥肌立つちゃうよ』

掛けた先に聞こえたのは女性の声。

「相変わらずのテンションだなあ。どうしてこんななっちゃまったのかねー」

ケラケラと笑いながらいつも通りだとため息をつく。

『そりゃあ仕方ないでしょ。もともとこういう性格じゃないように造られる予定だったのに、貴方という存在（憎悪）がいるんだからこうなっただよ』

「そいつはすいませんしたあ」

女性の憎まれ口にも適当に返す。

『うん、いつも通りムカついて最高だよ 貴方 』

ぎゃはははと笑う女性に「そいつはどうも」と返すだけ。

「さてと、戻るとしますかあ。大体の俺の戦闘データは撮れただろ
うし」

ふああと欠伸を一つ。そして歩くが

「ああ、ちよつと遅くなるは」

前を見て立ち止まる。

『何？どうしたの？』

「用事ができた」

尋ねる女性にそう言った後、電話を切る。

「どうやら、こいつらとはまた違うな。少しは楽しめっかな？」

誰かがいるわけでもないのに前を見つめたまま動かない。

「いい暇つぶしになりそいだな」

誰かが来るのを感じているのだろう、ニヤリと笑みを変えてただ待ち構える。

刀をその方向に剥き出したまま。

く一度入った世界は消えないく（後書き）

事件を加えながらの平穩の日常を書こうかと…

く闇の力って素晴らしいく(前書き)

誰かの容姿と同じですね(笑)

く闇の力って素晴らしいく

垣根は立入禁止学区に近付くたびに血の臭いがいつも通りだと感じ
てしまうのが嫌になる。

そして死体に統一しているのは傷口。

「どうみても、ナイフとかそういうチャチのような物じゃねえな」

そういうものではなく、間違えなく

「刀か」

刀でしかできない傷ばかりだ。

「そんな武器使ってる奴なんだな『シルバー』っやつは」

情報で得たシルバーと呼ばれた男はまだ見えない。

「もう帰っちゃったとか？」

役目を終え、帰った可能性もある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2555r/>

とある侍の一方通行

2011年11月21日19時11分発行